

上板井遺跡発掘調査報告書

1990. 3

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

- 1) 上板井遺跡は兵庫県多紀郡西紀町上板井字河内に所在する。
- 2) 本書は一級河川宮田川改良工事（事業主体　兵庫県柏原土木事務所）に伴う事前調査報告書である。
- 3) 発掘調査は兵庫県柏原土木事務所の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。
- 4) 調査は昭和61年12月に実施した確認調査を村上泰樹・市橋重喜の両名が担当し、昭和62年10月に実施した全面調査を村上泰樹・久保弘幸の両名が担当した。
- 5) 調査で使用した標高値は調査区の西側約70mの位置、小坂川東岸に埋設されているB.M.8（標高214.570m）を使用した。また本書で使用した方位は磁北である。座標北は磁北からN 6°40' Eである。
- 6) 本書で使用した地図は国土地理院発行2万5千分の1「宮田」である。
- 7) 遺構写真は村上・市橋・久保が分担して撮影した。遺物写真的撮影は土器・石器を㈱吉田カメラ商会に委託した。木製品は村上が撮影した。
- 8) 整理・報告書作成作業は兵庫県埋蔵文化財調査事務所（兵庫県神戸市兵庫区荒田町2-1-5）で行った。
- 9) 本書の編集は村上・久保の両名が担当し、和田早芳子の援助を受けた。
- 10) 本書の執筆分担は本文目次に示したが、土器観察表の執筆は村上・和田が、木製品観察表は久保・角田あゆみが共同でおこなった。
自然科学分野の玉稿をいただいた方にについてはあらためて各執筆分担の文頭に執筆者の名を記した。
執筆分担は下記のとおりである。
青木哲哉（立命館大学非常勤講師）……………第1章第1節
鳥地謙（京都大学名誉教授）・林昭三（京都大学木材研究所）…第4章
上記の方々以外に、本遺跡出土木製品の年輪年代測定をお願いした光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所）にはこの場をかりて感謝するしだいである。
- 11) 本書に掲載した遺物実測図は、土器・木製品・石器ごとに図版と共に通し番号を付した。
- 12) 上板井遺跡から出土した遺物はすべて兵庫県埋蔵文化財調査事務所に保管している。

本文目次

第1章	遺跡の位置と環境	1
第1節	上板井遺跡における地形と堆積物	(青木) 1
第2節	歴史的環境	(久保) 5
第2章	調査に至る経緯と調査の方法	(村上) 7
第1節	調査に至る経緯	7
第2節	調査の方法	9
第3章	調査の成果	11
第1節	概要	(久保) 11
第2節	微高地面の調査	(久保) 11
第3節	旧河道の調査	19
1.	遺構	(久保) 19
2.	遺物	22
	土器	(村上・和田) 22
	木器	(久保・角田) 45
	石器	(久保) 60
第4章	上板井遺跡出土木器の樹種	(島地・林) 79
第5章	結語	(村上) 87

挿図目次

第1図	遺跡周辺の地形分類図	2	第11図	旧河道内木製品出土状況	20
第2図	遺跡周辺微地形等高線図	3	第12図	旧河道内土層断面図	21
第3図	周辺の遺跡	6	第13図	旧河道内検出遺構	22
第4図	調査区位置図	7	第14図	旧河道①層出土の土器 (1)	25
第5図	土坑1	12	第15図	旧河道①層出土の土器 (2)	26
第6図	土坑2	12	第16図	旧河道①層出土の土器 (3)	27
第7図	遺構配置図	13	第17図	旧河道②層出土の土器 (1)	28
第8図	遺構内出土の土器	15	第18図	旧河道②層出土の土器 (2)	29
第9図	旧河道内木製品出土状況	17	第19図	旧河道②層出土の土器 (3)	31
第10図	調査区内等高線図	19	第20図	旧河道②層出土の土器 (4)	32

第21図	旧河道②層出土の土器 (5).....33	第36図	旧河道出土の木製品 (7).....51
第22図	旧河道②層出土の土器 (6).....34	第37図	旧河道出土の木製品 (8).....52
第23図	旧河道②層出土の土器 (7).....37	第38図	旧河道出土の木製品 (9).....53
第24図	旧河道②層出土の土器 (8).....38	第39図	旧河道出土の木製品 (10).....55
第25図	旧河道②層出土の土器 (9).....39	第40図	旧河道出土の木製品 (11).....56
第26図	旧河道③層出土の土器 (1).....40	第41図	旧河道出土の木製品 (12).....57
第27図	旧河道③層出土の土器 (2).....41	第42図	旧河道出土の木製品 (13).....58
第28図	旧河道その他出土の土器 (1).....42	第43図	建築材(板材)計測値分布図 (1).....59
第29図	旧河道その他出土の土器 (2).....43	第44図	建築材(丸太材)計測値分布図 (2).....59
第30図	旧河道出土の木製品 (1).....45	第45図	建築材(角材)計測値分布図 (3).....60
第31図	旧河道出土の木製品 (2).....46	第46図	旧河道出土の石器.....61
第32図	旧河道出土の木製品 (3).....47	第47図	出土木材の顕微鏡写真 (1).....83
第33図	旧河道出土の木製品 (4).....48	第48図	出土木材の顕微鏡写真 (2).....84
第34図	旧河道出土の木製品 (5).....49	第49図	出土木材の顕微鏡写真 (3).....85
第35図	旧河道出土の木製品 (6).....50		

表 目 次

表1 上板井遺跡出土木器の樹種.....86	表2 旧河道内層位別の出土土器器種 構成表.....89
------------------------	---------------------------------

図 版 目 次

図版 1	1. 旧河道出土 木製鉗 2. 旧河道出土 木製匙	遺物出土状況 2. 旧河道Ⅳ区 ③層中
図版 2	1. 調査前 全景 2. 調査前 近景	遺物出土状況
図版 3	1. 確認調査 A トレンチ 2. 確認調査 A トレンチ 木製品検出状況	図版 6 1. 旧河道Ⅳ区 ③層上面 遺物出土状況 2. 旧河道Ⅳ区西側 ③層上面 遺物出土状況
図版 4	旧河道 I ~ VI区 調査終了後全景	図版 7 1. 旧河道Ⅳ区東側 ③層上面 遺物出土状況 2. 旧河道Ⅳ区東側 ③層上面
図版 5	1. 旧河道 I ~ II区 ②層中	

	遺物出土状況	図版 21 旧河道②層出土の土器
図版 8	1. 旧河道Ⅴ区 ②層上面 遺物出土状況	図版 22 旧河道②層出土の土器
	2. 旧河道Ⅴ区 完掘状況	図版 23 旧河道②層出土の土器
図版 9	1. 旧河道・拡張調査区全景	図版 24 旧河道②層出土の土器
	2. 拡張調査区 柱穴群	図版 25 旧河道②層出土の土器
図版 10	1. 拡張調査区 土坑1(右)・ 土坑2(左)検出状況	図版 26 旧河道②層出土の土器
	2. 拡張調査区 土坑2内 遺物出土状況	図版 27 旧河道②層出土の土器
図版 11	遺構内出土の土器	図版 28 旧河道②・③層出土の土器
図版 12	旧河道①層出土の土器	図版 29 旧河道③層出土の土器
図版 13	旧河道①層出土の土器	図版 30 旧河道③層・その他出土の土器
図版 14	旧河道①層出土の土器	図版 31 旧河道その他出土の土器
図版 15	旧河道①・②層出土の土器	図版 32 旧河道その他出土の土器
図版 16	旧河道②層出土の土器	図版 33 旧河道①・②層出土の土器
図版 17	旧河道②層出土の土器	図版 34 旧河道①～③層出土の土器
図版 18	旧河道②層出土の土器	図版 35 旧河道③層、旧河道避難土器
図版 19	旧河道②層出土の土器	図版 36 旧河道出土の木製品 (1)
図版 20	旧河道②層出土の土器	図版 37 旧河道出土の木製品 (2)
		図版 38 旧河道出土の木製品 (3)
		図版 39 旧河道出土の石器

付図 旧河道内堆積パネルダイヤグラム

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 上板井遺跡における地形と堆積物

青木 哲哉

1. 周辺の地形と遺跡の立地

上板井遺跡は、篠山盆地の西北部に分布する宮田川流域の谷中に位置している。この谷は、山地の間に開かれた幅1km以下の狭長なもので、ここには2面の段丘¹⁾が分布している(第1図)。これらのうち、上位の段丘はこの谷中に広範囲に連続して認められ、比較的発達が良い。これに対して、下位のものは宮田川に沿って細長く分布しているにすぎない。この2面の段丘は、野村(1984)²⁾によると約2万年前以降に形成されたと考えられている。

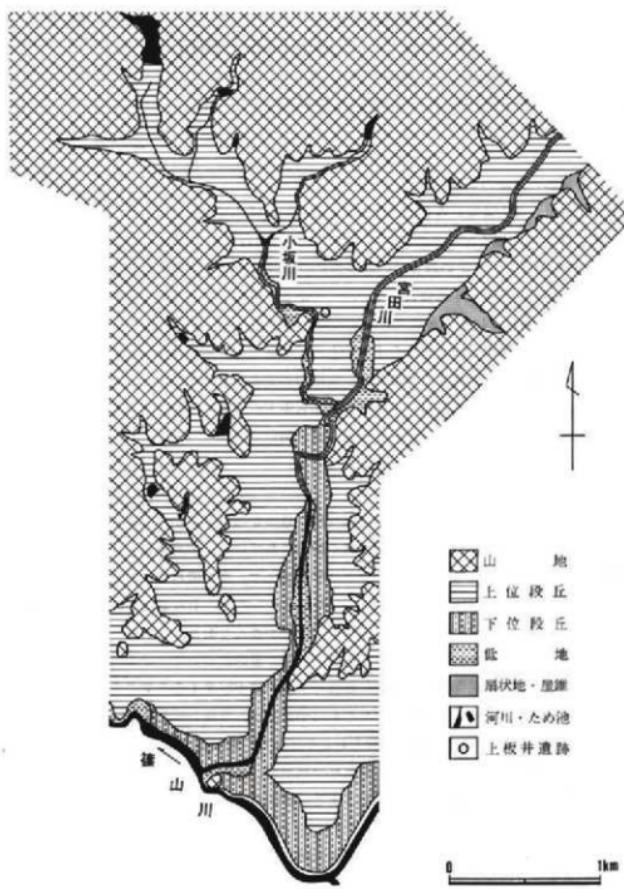
上板井遺跡は、これらの段丘のうち上位のものに位置している。遺跡付近の段丘は、およそ10‰の傾斜で南東方向へ高度を下げており、宮田川の支流である小坂川によって形成されたと考えられる。遺跡のすぐ西側には、小坂川が西から南方へ屈曲して流れおり、この川と遺跡との間に高さ3~4mの崖が形成されている(第2図)。

2. 遺跡における微地形と堆積物

上位の段丘に設定された本遺跡の発掘地域では、Ⅲ区からⅣ区にかけて東西に細長く延びる旧河道と、Ⅰ区およびⅡ区に分布する微凹地が検出されている。旧河道は、3m以上の幅をもち、穂やかに曲がりくねっている。その深さは60~80cmで、底が微起伏に富んでいるものの、全体として東方へ傾斜している(第10図)。このことからみて、旧河道は小坂川の流路跡であると考えられる。ただし、この旧河道の河岸には杭列が並んでおり、これが人間によって利用された可能性がある。また、旧河道は発掘地域の西端とⅢ区において、北方へは直角に方向を変えている。しかし、発掘地域が東西に細長く、旧河道が屈曲する北側の全容が明らかでないため、屈曲部分に人間の手が加わったか否かについては、今後の検討を要する。

一方、微凹地は幅が5.5m以上、深さが最大およそ25cmで、旧河道と比べて広く深い。これは、旧河道の東側に隣接しており、旧河道内を流れた洪水が、Ⅲ区の屈曲部分から東側へ溢れた際に、付近を侵食したため形成されたものか、あるいは旧河道内にみられる小規模な浅瀬と考えられる。

このような旧河道および微凹地は、現在河成堆積物によって覆われている。この河成堆積物は、下位より黒灰~暗灰色の砂質シルト層、暗褐色のシルト質砂礫層、暗褐色の砂混じりシルト層、暗灰色のシルト層、暗灰色の砂質シルト層、暗灰色の砂混じりシルト層および耕土に

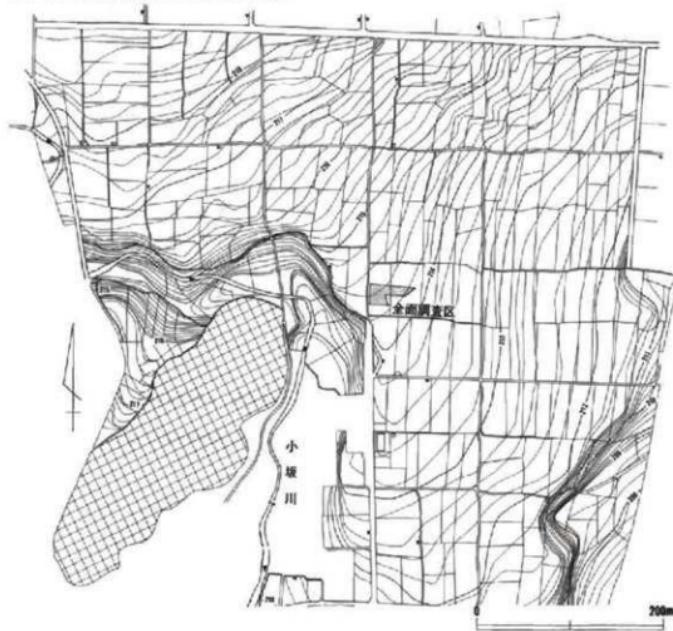


第1図 道路周辺の地形分類図

- 2 -

細分される（付図）。最下位にみられる砂質シルト層は、やや腐植質で、旧河道内の西半部に堆積している。その上位のシルト質砂礫層は、3cmの径をもつ礫を主体とし、旧河道と微凹地内のほぼ全域に認められる。これらの層には、弥生時代中期～後期の土器片が包含されている。

この2層を覆う砂混じりシルト層は、II区以西の旧河道および微凹地内に分布しており、微凹地を埋没させている。この層は、III区とIV区において径2cm以下の礫からなるシルト質砂礫層に層相変化する。これに対して、この上位のシルト層は旧河道およびI区とII区のほぼ全域で認められ、II区とIII区の境界付近において径3cm以下の砂礫に変わる。これらの2層からは、弥生時代後期の土器片の他に、弥生時代中期のものが少し出土しており、両層が堆積した際下位の層の上部を擾乱した可能性がある。



第2図 遺跡周辺微地形等高線図

この上位の砂質シルト層は、旧河道内の堆積物の最上位に位置しており、そのほぼ全域とⅠ区、Ⅱ区に堆積している。同層からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器片が検出されている。以上の各層には、木片が混入しており、とりわけそれは旧河道および微凹地の下位にみられる砂質シルト層とシルト質砂礫層に多く含まれている。さらに、これらの層と耕土との間に、砂質シルト層が認められる。これは、発掘のほぼ全域に堆積しており、層中には中世の土器片が含まれている。

以上の事柄から、旧河道は弥生時代中期以前に小坂川が発掘地域付近を渡下したため形成され、一方微凹地はこれと同時期もしくはそれ以降につくられたと考えられる。その後、旧河道は弥生時代中期から後期までに、層相変化の激しい砂質シルト層やシルト質砂礫などによって段階的に埋積された。このような旧河道形成期以降のある時期には、人間が杭列をつくり、旧河道を利用していった可能性が高い。旧河道および微凹地が埋積されて以降古代にかけては、洪水が発掘地域付近でおこらず、この辺りの旧地表はほとんど変化しなかったと考えられる。しかし、中世頃には洪水によって砂混じりシルトが堆積し、古代までの旧地表を被覆した。

以上のようにして堆積した各層は、遺跡が立地する段丘の最上部を構成している。これは、この段丘が旧河道および微凹地の埋没以降に段化したことを示しており、その時期は最上部の堆積物に混入している土器の時代からみて、中世頃であったと推定される。

このように、上板井遺跡では弥生時代中期以前に旧河道および微凹地が形成され、それぞれ古墳時代初頭と弥生時代後期までに埋積された。この間のある時期に、旧河道は人間によって利用された可能性がある。その後、洪水堆積物がこの辺りを被覆してから、遺跡付近の段丘が開拓されたと考えられるのである。

参考文献

- 1) 野村亮太郎 (1984) 「加古川上流域、福山盆地における河川争奪現象」 地理学評論57, pp.537-548. では、上位の段丘が大山面、下位のものが宮田面と名付けられている。
- 2) 野村亮太郎 (1984) 「加古川上流域、福山盆地における河川争奪現象」 地理学評論57, pp.537-548.

第2節 歴史的環境

篠山盆地においては、弥生時代遺跡は10遺跡余りが知られている。この中で前期の遺物の出土例は、岩崎四ノ坪遺跡で知られているのみである。中期の遺跡は中期後半を中心に6遺跡が知られている。これらのうち、竪穴住居跡が検出され、集落遺跡と考えられるのは、龍円寺遺跡、庄塙1号墳下層である（兵庫県教育委員会 1987 a）。また、この地に、方形周溝墓が検出された糸岡山遺跡、土壙墓群が検出された雲部車塚周庭帯などが知られている。後期の遺跡としては、内場山城跡、細工所遺跡が知られているが、このうち内場山城跡では、竪穴住居跡とともに木棺墓群が検出されている（兵庫県教育委員会 1987 a, b）。

遺跡は、弥生時代中期以降、盆地の周縁部全域に分布するようになる。しかし、中～後期を通じて存続する大規模集落ないしは拠点的集落は、これまでのところ知られていない。

これに対し、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけては、従来より存続する遺跡のほかに、新たに多くの集落が出現する。

上板井遺跡に近接する板井・寺ヶ谷遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭の土坑約100基が検出され、良好な土器群が出土している。上板井遺跡から、約1.5km南に位置する西木之部遺跡では、やはり古墳時代初頭と考えられる竪穴住居跡6棟と、良好な土器群が検出された。このほかに、同時期の遺跡として蘿池北遺跡、寺内遺跡、口阪本遺跡等がある。

篠山盆地における以上のような、弥生時代～古墳時代初頭の遺跡の消長の中で、上板井遺跡は、中期～古墳時代初頭にわたって存続する遺跡として注目される。今回の調査では、明瞭な集落跡は検出されなかったとはい、旧河道内からの多量の土器・木製品の出土は、隣接する地点における大規模集落の存在を示していると考えてよいであろう。これと同時に、近接する板井・寺ヶ谷遺跡で検出された土坑群との関連も注目される。篠山盆地北西の山麓部では、弥生時代末～古墳時代初頭に位置づけられる埴丘墓が、内場山城跡で検出されている。これは、尾根の先端部を溝で区画したもので、一墳丘上に、木棺墓、土括墓、土器棺墓等がつくられたものである。これらの中央に位置する木棺からは、素環頭大刀一口が出土している。

内場山城跡の埴丘墓は、多数埋葬墳であり弥生時代の色彩を強くとどめるものである。しかし、古墳時代中期に、篠山盆地北東部に雲部車塚古墳が出現する以前の、盆地の開発と生産が、上板井遺跡が立地する盆地北西部でも主体的に構成されていたことは想像に難くない。盆地北西部における、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺跡群を理解する上で、上板井遺跡は重要な位置を占めているといえよう。

引用文献

- 兵庫県教育委員会 1987 a 「庄塙1号墳」（兵庫県文化財調査報告書第41冊）
兵庫県教育委員会 1987 b 「汎の浦坪古墳群」（兵庫県文化財調査報告書第48冊）



- | | | | |
|------------|------------|------------|--------------|
| 1. 上板井遺跡 | 2. 安養寺古墳群 | 3. 杭谷古墳群 | 4. 四王谷古墳群 |
| 5. 小坂古墳群 | 6. 東山古墳 | 7. 素竹古墳群 | 8. 素竹遺跡 |
| 9. 菖葦古墳群 | 10. 沢の浦古墳群 | 11. 上板井古墳群 | 12. 板井・寺ヶ谷遺跡 |
| 13. 板井城跡 | 14. 内場山城跡 | 15. 西木之部遺跡 | 16. 向山古墳 |
| 17. 大芝原1号墳 | 18. 両野北遺跡 | 19. 口阪本遺跡 | |

第3図 周辺の遺跡

第2章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 調査に至る経緯

上板井遺跡は、霧山盆地北西部に位置する多紀郡西紀町上坂井地区に所在する。昭和60年度から当上坂井地区には場整備事業が計画されたため、昭和59年度に西紀・丹南町教育委員会の手で埋蔵文化財分布調査が実施された。その結果、遺物の散布が認められたため上坂井遺跡として周知された。この成果にもとづき同教育委員会では工事の進歩状況にあわせ昭和60~62年度にかけて確認調査を実施した。確認調査の結果、61年度に実施した上坂井地区北側・河内C



第4図 調査区位置図

地区で弥生時代後期の水田跡が確認された。

このは場整備事業に関連して、小坂川と宮田川を直結する一級河川宮田川小規模河川改良工事が兵庫県柏原土木事務所によって計画されていた。計画予定地は河内C地区の南端にあたり、西紀・丹南町教育委員会の手で坪掘りによる確認調査が実施され、遺構の存在が推定されていた。しかし、範囲等に不明瞭な部分があり、あらためて兵庫県教育委員会が当工事予定地内にトレンチによる確認調査を実施することになった。

確認調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 技術職員村上泰樹・市橋重喜の両名が担当し、昭和61年12月15日から同月23日かけて実施した。

確認調査の結果、Aトレンチ内より弥生時代後期の土器・木製品を多量に包藏する旧河道が検出された。Aトレンチ周辺に小規模の坪を設定し、旧河道の広がりを確認したところ約320m²の範囲に遺跡が存在することが判明した。

この調査結果をもとに、工事を担当する兵庫県柏原土木事務所と遺跡の取扱いについて協議したところ上記の範囲について全面調査を実施することになった。

全面調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 技術職員村上泰樹・久保弘幸の両名が担当し、昭和62年10月5日～10月22日にかけて実施した。

全面調査の結果、当初予測したとおり弥生時代中期～古墳時代初頭の旧河道跡が検出された。旧河道は長さ50mに渡って検出され、コンテナに換算して50箱分の弥生土器・木製品が出土した。調査を進めるうちに、調査区の南西隅に柱穴・土坑が検出され、当初予定していた調査範囲よりも南西側に遺跡が広がることが確認された。急遽この取扱いについて兵庫県柏原土木事務所と協議した結果、この部分についても全面調査を併せて行うことになった。

調査体制は以下の通りである。

昭和61年度確認調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

事務担当	課長	北村	幸久
	参考事	森崎	理一
	課長補佐	福田	至宏
	課長補佐兼		
埋蔵文化財調査係長	大村	敬通	
主査	井守	徳男	
調査担当	技術職員	村上	泰樹
	同	市橋	重喜

昭和62年度全面調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

事務担当	課長	北村	幸久
	参考事	森崎	理一
	課長補佐	福田	至安
	課長補佐兼		
埋蔵文化財調査係長	大村	敬通	
主査	井守	徳男	
調査担当	技術職員	村上	泰樹
	同	久保	弘幸
事務員	田村	弓子	

整理調査作業は、昭和63年度から平成元年度の2ヵ年に渡って実施した。63年度は、出土遺物のネーミング・土器の接合復元作業を行った。なお木製品については保存処理を急ぐため実測作業も併せて実施した。平成元年度の整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化調査事務所が実施した。整理作業は前年度の実績を踏まえ、土器の実測等出土品の資料化を行った後、遺物の写真撮影、造構・遺物のトレース、レイアウト等の報告書作成作業を行った。また木製品については実測・写真が終了した段階で、樹種鑑定は、京都大学名誉教授島地謙氏、京都大学木材研究所林 昭三氏、年輪年代測定は奈良国立文化財研究所光谷拓実氏にそれぞれ依頼し、各氏には御多忙中にもかかわらず、それぞれの成果をいただいた。樹種鑑定結果は第4章に掲載し、年輪年代測定結果は第5章でその概要を述べている。これら自然科学分野の鑑定と併行し、木製品についてはPEG含浸法による保存処理を行った。

整理調査体制は以下の通りである。

昭和63年度整理調査

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

事務担当 課長 北村 幸久

参考事 森崎 理一

課長補佐 福田 至宏

整理事務担当

課長補佐 松下 勝

主査 小川 良太

主任 岡田 章一

整理担当

技術職員 村上 泰樹

同 久保 弘幸

補助員 和田早苗子・齊藤海予子

水戸美美子・本庭田英子

住本 広子・岡田依理子

平成元年度整理調査

兵庫県埋蔵文化財調査事務所

事務担当 所長 大江 剛

副所長 村上 雄揚

総務課長 小池 英隆

整理事務担当

整理普及課長 松下 勝

技術職員 岸本 一宏

整理担当

技術職員 村上 泰樹

同 久保 弘幸

木製品担当

技術職員 別府 洋二

嘱託職員 和田早苗子・岡田依理子

山本 美佳・角田あゆみ

第2節 調査の方法

確認調査

発掘調査は1号幹線道路を挟んで、東側に幅2m、長さ20mのトレンチを南北方向に3条(西よりA-Cトレンチと呼称)配した。1号幹線道路の西側には、2×2m規模の坪(D・

E坪と呼称)をそれぞれ設定した。これらの坪・トレンチを中心に調査を実施し、必要に応じて小規模の坪を設定し調査する方法をとった。各坪・トレンチの掘削はすべて人力で行った。

A-Cトレンチ、D-E坪を掘削し精査したところ、調査区全体に渡って弥生土器等の遺物が出土したが、Aトレンチを除くB-Cトレンチ、D-E坪からは遺構が検出されなかった。遺構はAトレンチ北側で低湿地部分に移行すると考えられる落ち込みを検出した。この落ち込みを調査したところ、弥生時代後期の土器、梯子・建築部材等の木製品が多量に出土した。また、柵状の遺構が検出されるなどの状況から、たんなる低湿地部分へ移行する落ち込み遺構と理解するには問題があった。そこで遺構の広がりと遺構の性格を把握するため50×50cmの小規模な坪を11箇所設定し調査した。調査の結果、遺構は幅2~5m前後の旧河道跡で、道路の東側部分約320m²の範囲に展開することが判明した。

全体の基本層序は第1層が耕土、第2層が未土、第3層が黄褐色を呈する客土、第4層が灰褐色土で中世遺物を包含する。第5層が黄褐色の基盤層である。遺構検出面は第5層である。

全面調査

調査を開始するにあたって、便宜上調査区を6区画に分け、東からI~VI区と呼称した。それぞれの境界には土壠観察用の畦畔を設けた。遺物の取り上げに際しては、それぞれの区域名を用いた。

掘削は遺構検出面である第5層上面までパワーショベルで除去した後、VI~I区の順で旧河道跡調査を開始した。旧河道跡を人力掘削する前にI~VI区の各境界に幅1mのトレンチを南北方向に配し、掘り下げた。その後、詳細に各区域間の土壠堆状況を把握し、旧河道跡を層序ごとに掘り下げ、土器の出土層位を識別しながら、順次遺物の取り上げを行った。さらに木製品については出土位置を実測し、出土層位を識別しながら順次取り上げた。

以上のような手順を踏みながら調査を進めたところ、VI区南側で柱穴・土坑を検出し遺跡が一部南に広がっていることが判明した。そこでVI区南側約252m²の範囲をパワーショベルによる機械掘削で第5層上面まで除去し、精査した。その結果、柱穴・土坑の遺構が検出され、この分部についても併せて全面調査を行った。

以上のような調査の経過・方法で全面調査を終了した。最終的な調査面積は572m²である。

第3章 調査の成果

第1節 概要

今回の調査では、調査区北半から旧河道が、南西部から微高地面が検出された。微高地面上からは、柱穴・土坑等が検出されている（第7図）。

旧河道は、調査区北半ではば調査区境界に沿って東西に延びている。西端ではば直角に屈曲して、調査区北方へと延びる。河道は、調査区西端では深いU字形の断面形を呈するが、東端では次第に幅を広げつつ浅くなる。

旧河道は、断面B付近で北へも延びており、あるいは、旧河道の主要部は調査区北方へ延びるのかもしれない。

河道内は、砂・礫の堆積が主体的であるが、深い部分には、よく発達した腐植質シルト一粘土が分布している。遺物はいずれの層準からも出土するが、とくに層理面付近に集中する傾向が見られた。

第2節 微高地面の調査

微高地面上からは、小規模な柱穴と土坑が検出された。微高地面は、古期の河川によって堆積された、砂礫と黄褐色砂質シルトから形成されており、砂礫によって埋没した古期の河道も検出されている。

しかし、遺跡付近での水田耕作による擾乱のためか、いずれの遺構もきわめて浅く、遺存状態は良好とは言えない。また、このため遺構内からの出土遺物も少數にとどまった。

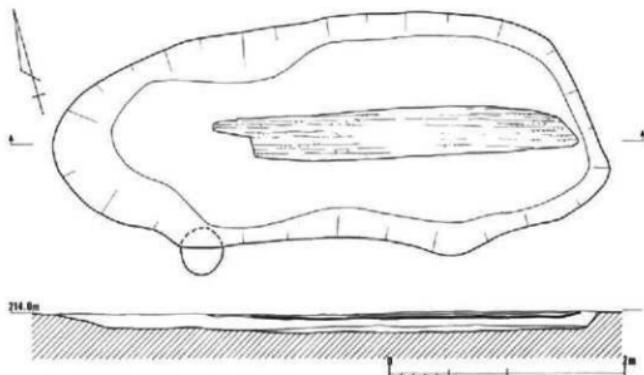
柱穴群

柱穴群は、平坦な微高地面上に不規則な分布を示している。54基中32基で柱痕が検出され、柱穴のなかには、柱根が遺存してたものもあった。しかし、既説のように柱穴はいずれも浅く、遺存状況は不良であり、時期を確認しうるような遺物は、柱穴46で1点の土器が出土したほかは、全く出土していない。

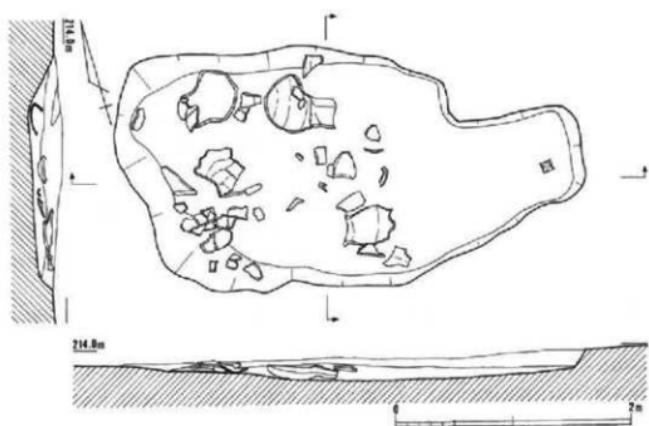
柱穴の中には、柱穴の掘形が直径30~40cmにおよぶ大型のものも存在するため、調査時には、建物跡を復原する試みを行ったが、確実に復原しうるものは、抽出できなかった。遺存状況からみるならば、既に削平によって消滅してしまった柱穴もあったものと思われる。

第8図(1)は、柱穴46より出土した土器である。長頸壺の頸部から口縁部に至る部位である。全体に、淡黄一淡橙色を呈し、径1~2mmの砂粒をまじえる胎土である。

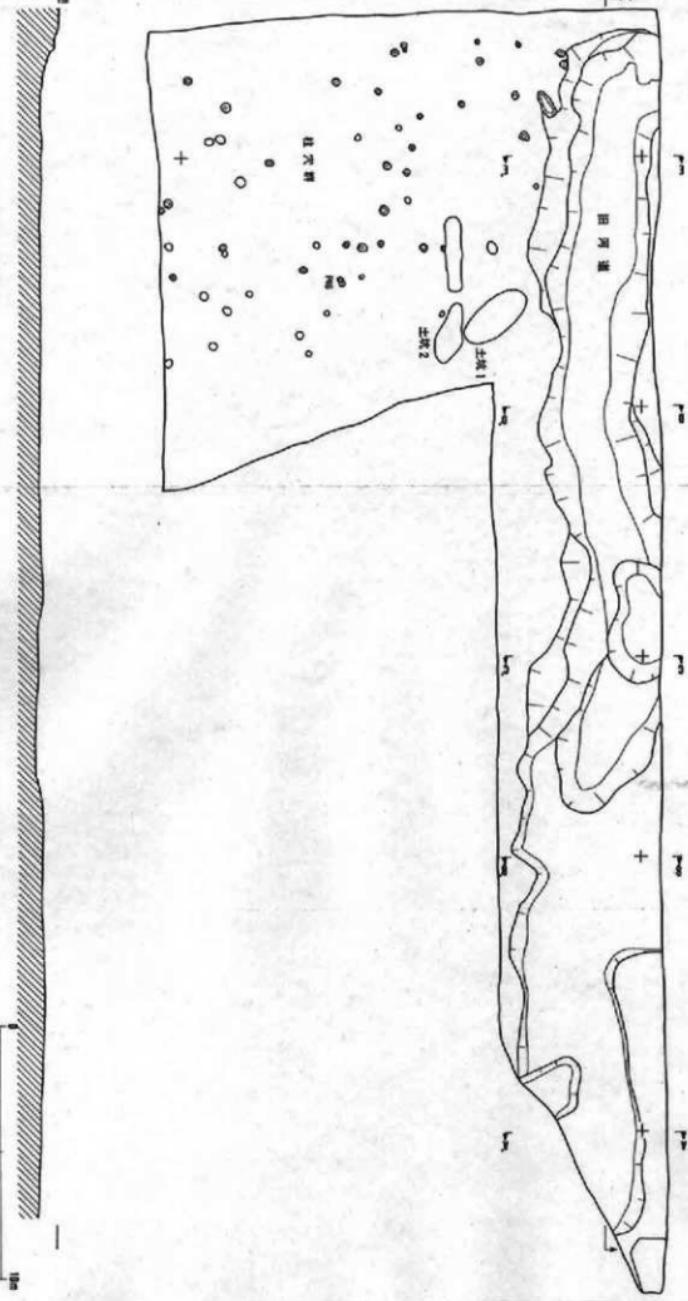
頸部は斜め上方に開いて立ち上がり、頸部の上位約1/4は、やや外反する。口縁部は、この外



第5図 土坑 1



第6図 土坑 2



反気味の頭部から、逆に内傾して立ち上がる。口縁部外面は、ヨコナデが施され端部は丸くおさめられている。頭部は、外面が縱方向、内面が横方向のハケ調整が施されており、外面はその後、ナデが施されている。壺G₄に分類される。

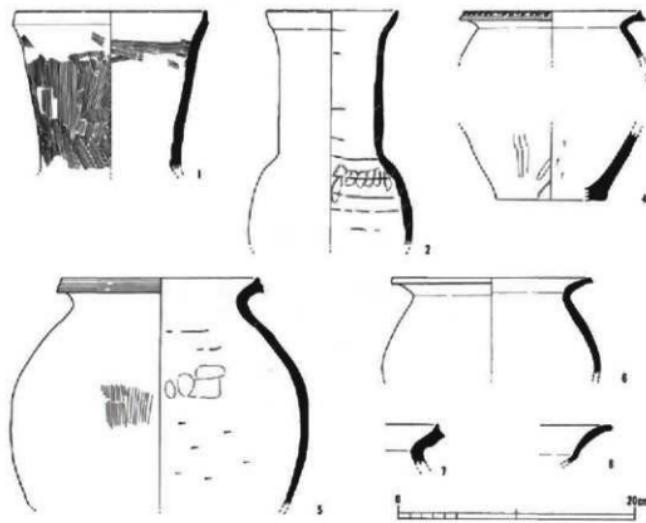
土 坑

土坑3基のうち、土坑3は、土坑2の延長である可能性が高い。ここでは、土坑1・2について記載をおこなう。

土坑1（第5図）

土坑1は、最深部で検出面から約10cmを測る。堆土は暗褐色を呈する。砂質シルトが主体となっている。全体は不整形な長指円形を呈し、柱穴1基と重複しこれを切っている。

土坑中央に、土坑の長軸に平行して、板1枚が検出された。板は、幅約15cm、長さ約125cmである。わずかに彎曲しつつも、土坑底に密着していたものと思われる。腐食による劣化が著しく、厚さも数mmに及ばなかったため、原形を保ったままでの取り上げはできなかつたが、調査中の観察からは、木器あるいは建築構造材的な加工痕は認められなかつた。



第8図 造構内出土の土器(1.柱穴46、2~8.土坑1)

土坑1からは、この他に出土遺物はなく、所属時期の確定は困難である。

土坑2（第6図）

土坑2は、深さ約20mを測る。埋土は、土坑1と同様の暗褐色砂質シルト層であった。全体に不整形ではあるが、あえていうならば隅丸長方形に近い平面形を呈している。東端は、小さな突出部をもつように見受けられる。

土坑西半からは、弥生土器が一括して検出され、今回の調査で唯一、遺構の時期を確定しうる資料を提供している。土坑の東端では、方形の板片（一辺約10cm）が単独で出土した。

(2)は、長頸壺である。体部上半～口縁部に至る部位が遺存していた。全体に橙色を呈しており、径数mm以下の砂粒が多く含む胎土である。体部から、ほぼ直立する長い頸部は、その上部でゆるやかに外反する。口縁部は、さらに斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめている。体部は、径が小さくむしろ紡錘形に近い形態を呈していたものと思われる。

内面に指顎圧痕が認められる。壺G₂に分類される。

(3)は、壺である。口縁部から頸部にかけての部位のみが遺存していた。全体に灰黄褐色を呈し、胎土には、径1～2mmの砂粒を含む。体部からほぼ直角に屈曲して、外上方にのびる口縁部である。口縁部はさらに、上方につまみ上げられている。口縁外面にはヘラ状工具による、刻みが施されている。外面は全体にナデによって丁寧に仕上げられている。

なお、外面には全体に煤が付着している。壺C₁に分類される。

(4)は大型の壺底部である。全体に淡い橙色を呈し、胎土には1～3mmの砂粒を含んでいる。体部は、底部から直線的に斜め上方に立ち上がる。体部内面は、ヘラケズリによって調整され、底部にはナデが施されている。

(5)は、壺である。全体に灰白色を呈し、胎土には、径数mm以下の砂粒が多く含む。ほぼ球形の体部をもつ。口縁部は、外面に面をもち、二条の擬凹線文が施されている。体部外面は、粗にハケ調整が施されている。また、体部内面の下半には、ヘラケズリの痕跡が認められる。

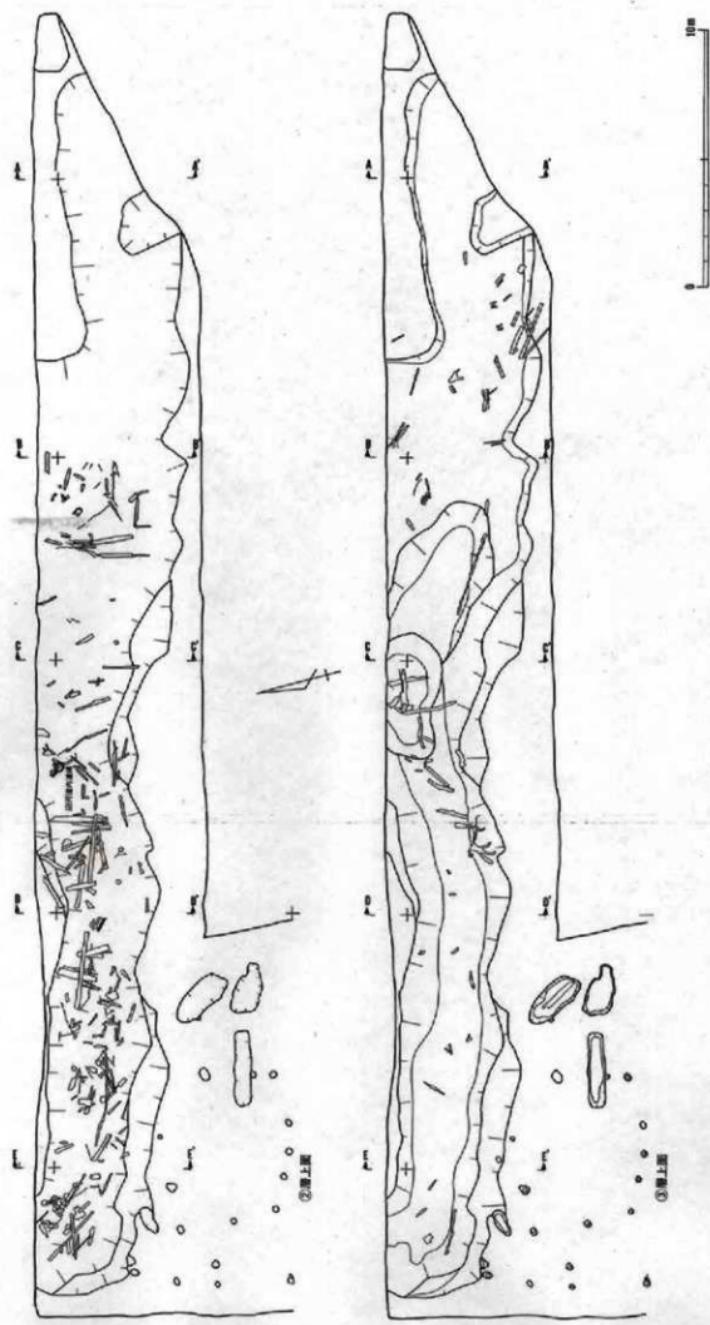
なお、外面は二次焼成を受けており、体部下半には煤が付着している。壺B₁に分類される。

(6)は、壺の体部上半～口縁部の破片である。全体に淡黄色を呈しており、胎土には1～3mmの砂粒を多く含んでいる。膨らみの小さい体部から、大きく屈曲して外反する口縁部を有する。口縁端部には、面をもつ。外面は磨耗が著しく、調整痕は不明である。壺Dに分類される。

(7)は、壺の口縁部破片である。橙色を呈し、胎土には、1～3mmの砂粒を含んでいる。口縁部は、上方につまみ上げつつ、やや凹んだ面を作る。内・外面とともに、ヨコナデ痕跡が認められる。壺B₁に分類される。

(8)は、高杯の口縁部である。灰白～灰褐色を呈し、胎土には1～3mmの砂粒を含む。体部から、屈曲して外反する口縁部で、端部は丸くおさめられている。高杯B₂に分類される。

图 9 四川地区的木船出土年代



第3節 旧河道の調査

1. 造 構

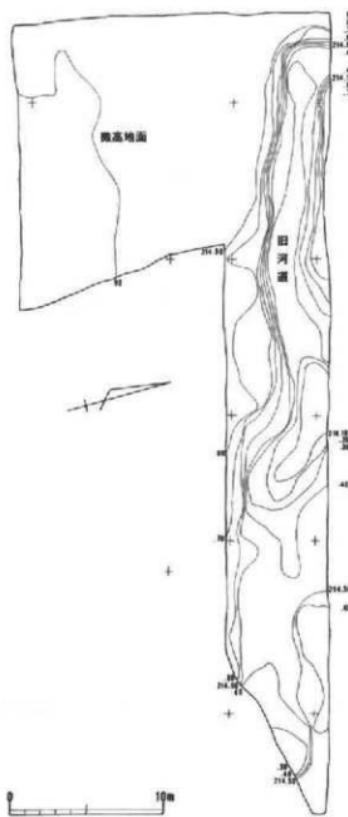
前節で触れたように、旧河道は調査区北部を東西に走っている。調査区内での延長は約50mである。最大幅は約6m、最大深度は検出面から-1.0mを測る。

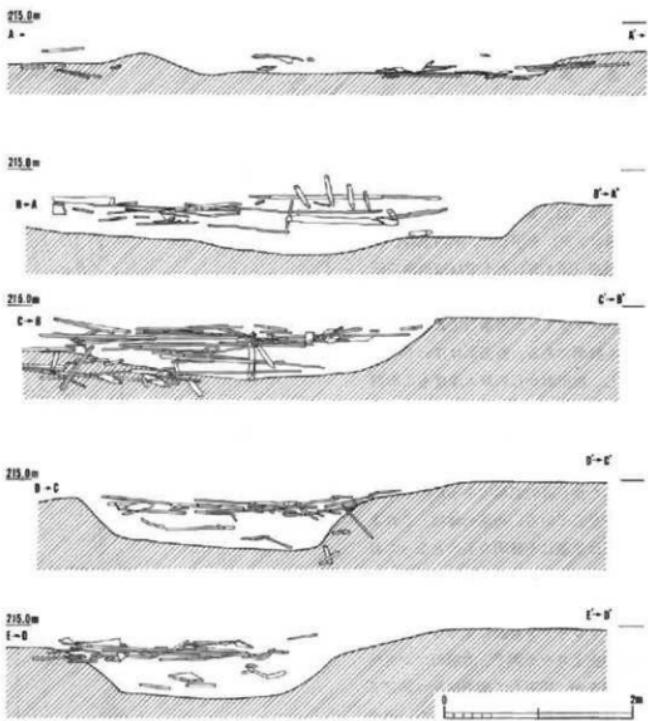
第10図には、調査区全体の等高線図(10cmコンタ)を示した。旧河道は、調査区西端(図上方)近くではほぼ直角に屈曲して北へ伸びる。調査区中央より西では、コンタインが密集しており、河道の幅も鮮明である。断面形は深いU字形を呈し、検出面からの最大深度もこの部分にある。

旧河道は緩やかに傾斜して東に下がるが、深度は調査区中央部付近が最も大きく、あたかも深い沼地であるかのような状況を呈している。河道の縁は、これより東では急激に不鮮明なものとなっており、調査区内では正しい幅を求めるることはできない。

コンタインを詳細に見るならば、調査区中央よりやや西で、北側のコンタイン数本が、屈曲して調査区北へ伸びている状況が看取される。先述した、河道内で最も深い部分は、このすぐ東に位置しているが、最深部の底を示すコンタインは、概ね南東—北西方向の伸びを示している。この方向は、旧河道北縁のコンタインが屈曲して伸びる方向とほぼ一致している。

以上のような点からみるならば、旧河道の主体は、あるいは調査区中央付近から再び屈曲して





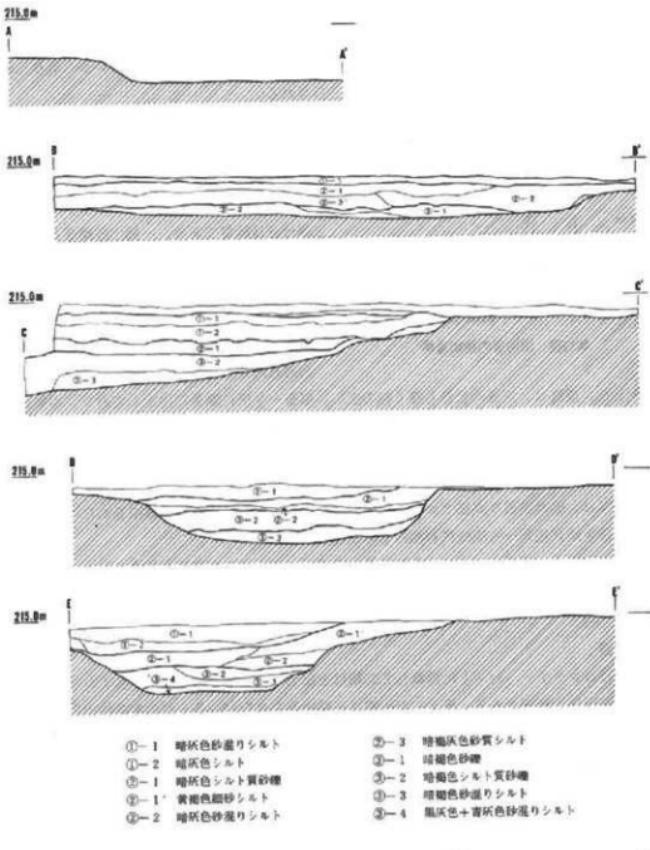
第11図 旧河道内木製品出土状況

北へ延びる可能性もある。調査区東半で河道が浅くなり、縁が不鮮明になるのは、当該部分が河道の主体部ではないためであろう。

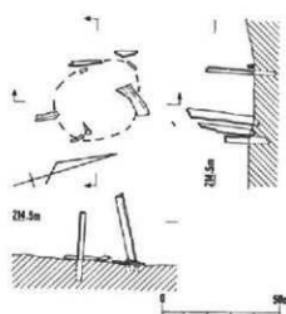
層序

調査に際しては、旧河道をA～Eの位置で区切り、東からI～V区とした。土層断面の図化と記載は A～E の位置と調査区北壁でおこなった。

調査の際には、第Ⅰ層—表土、第Ⅱ層—床土、第Ⅲ層—中世遺物を少量まじえる包含層とし、



第12図 旧河内土層断面図



第13図 旧河道内検出遺構

第Ⅴ層—いわゆる「地山」を構成する基盤層とした。

旧河道内の堆積物は層相の違いから数枚に細分される。

①層は、旧河道最上部を被覆する。シルトを主体とする。

②層は、砂・砾を主体とした堆積物で、旧河道第Ⅲ・Ⅳ区付近では堆積が厚くなる。②層の上面付近は砂質であり、一部で砂砾層となっている。

③層は、シルトである。河道の最下層をなしており、ビート質となっている。

遺構と遺物の検出状況

旧河道内からは、多数の土器および木製品が出土した。遺物は、河道内で最も深く幅の広い、第Ⅲ～Ⅴ区に顕著に出土しており、木製品はとくにその傾向が強い。木製品は、②層上面付近、および③層上面付近の2面で、顕著な集中が見られ、当該層理面相当の時期に、河道内に廃棄されたものと考えられた。

土器類も、木製品の集中層準付近に多く出土する傾向が明瞭であった。しかしながら、土器については、旧河道最下底部で弥生時代中期後葉のものが、ほぼ純粹に検出されたほかは各層準とも弥生時代後期～古墳時代初頭のものが混在していた。

また旧河道内の②層上面では、板状杭數本を円形に打ちこんだ遺構が検出された（第13図）。しかし、この他に顕著な出土遺物がなく、その性格は明らかではない。

2. 遺 物

土 器

土器はコンテナー・バットに換算して50箱以上出土し、狭小な調査面積からすれば、非常に密度の高い出土状況である。出土した土器は一部中世を含むが、多くが弥生時代中期～古墳時代初頭の範疇におさまる。弥生時代中期の土器は、量的には少なく、出土した土器の多くが弥生時代後期に比定される。

弥生時代中期～古墳時代初頭の土器は、柱穴46・土坑2・旧河道から出土し、土器の99%以上が旧河道内より出土している。とくに旧河道内より出土した土器は、完形に近い状態に復元できる土器が多く、遺存状況は極めて良好である。土器の器種も壺・甕・鉢・器台・高杯・蓋があり多岐にわたって出土している。

旧河道内の堆積状況は、すでに前項で説明したように、3層に大別される。とくに、洪水作

用によって短期間に堆積した③層中からは、土器総出土量の60%近くの土器が出土した。②層（洪水跡）中の土器の多さは、洪水跡が、旧河道内の堆積層をかなりの深度で削り取ったため、堆積層中の土器を巻き込んだ結果と推察される。③層中の土器は、弥生時代後期の範疇で捉えられる土器が大多数を占めている。

今回の調査で出土した土器のうち、器形が判別できるものは、790点を数える。うち圓化した土器は、全体の20%にすぎない。圓化対象とする土器の選別にあたっては、充分注意をしたものであるが、上板井遺跡の土器の実態を明示したとは言えないことをお断りしておく。

土器の概要を記すにあたり、土器の器形を中心とした分類基準を設定し、各遺構出土の土器の概要を説明する。旧河道内の出土遺物については、調査で層序ごとに取り上げており、便宜上、各層ごとに説明をおこなう。

壺形土器

A 口縁部が大きく広がるもの。端部の形態から2つに分かれる。

A₁ 端部が上下に大きく拡張するもの。

A₂ 端部が若干肥厚し面をもつもの。

B 前状の頸部をもち、口縁部が外上方に開くもの。端部の形態で3つ分かれる。

B₁ 端部が上下方向に拡張するもの。

B₂ 拡張しないもの。

B₃ 複合口縁をもつもの。

C 口縁部が外反して立ち上がるものの。口縁一体部の形態で2つに分かれる。

C₁ 口縁部が大きく外反して立ち上がり、体部との境が明瞭でないもの。

C₂ 体部が大きく張り出し、口縁部が外反して立ち上がるものの。

D 体部最大径を中位にもち、「く」の字状に外反する口縁をもつもの。端部の形態から2つに分かれる。

D₁ 端部が若干上下に拡張して、面をもつもの。

D₂ 端部が拡張しないもの。

E 球状の胴部をもち、口縁は短く外反して立ち上がるものの。

F 複合口縁をもつもの。

G 倒卵形の体部から口縁部が直立気味に立ち上がる長頸壺。口縁部の形態で4つに細分される。

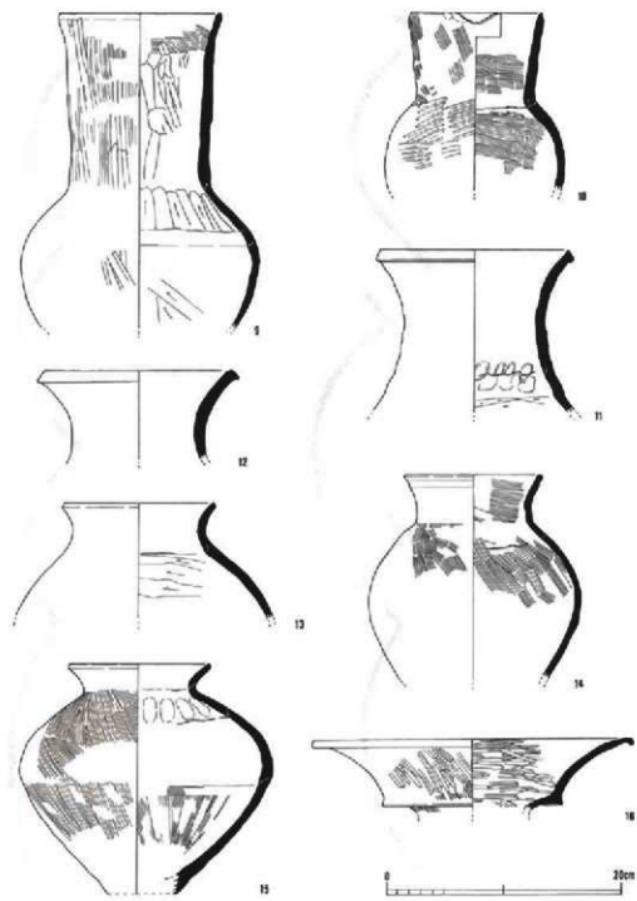
G₁ 頸部がほぼ垂直に立ち上がり、頸部を丸くおさめるもの。

G₂ 頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部が外上方に広がるもの。

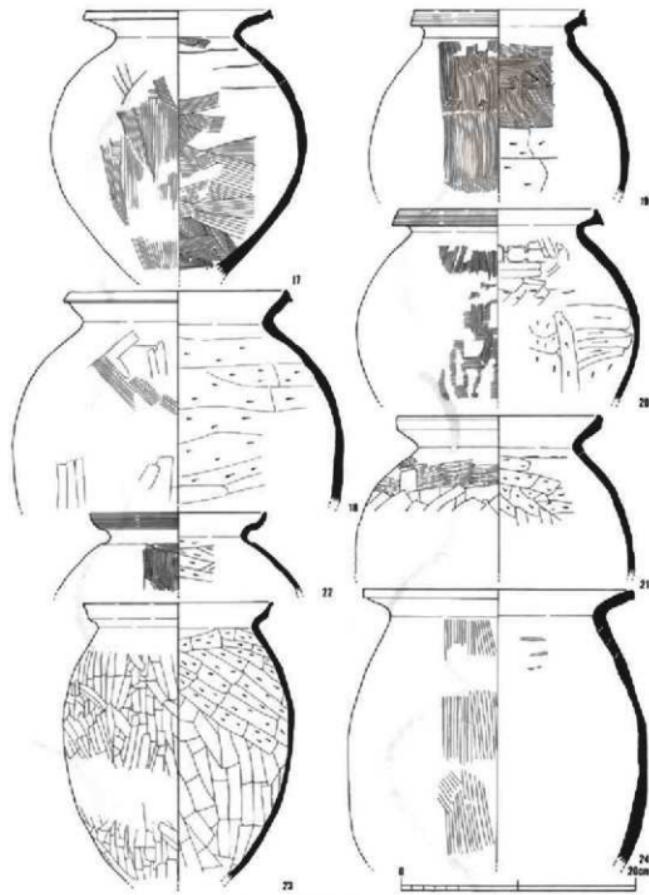
G₃ 頸部が外反して立ち上がるものの。

G₄ 頸部は外反して立ち上がり、口縁部が垂直もしくは内傾し面をもつものの。

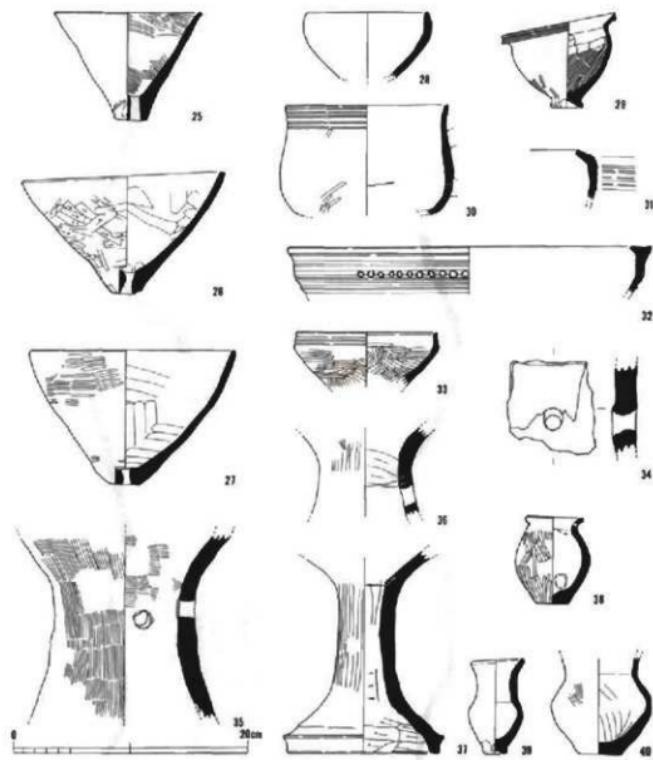
- H 短い頸部をもち、漏斗状に外反する口縁部をもつ短頸壺。
- I 筒状の細い頸部をもつ細頸壺である。口縁部の形態から4つに細分される。
- I₁ 口縁部は内擣氣味に立ち上がり、端部が平坦なもの。
- I₂ 口縁部と頸部の境が明瞭でないもの。
- I₃ 口縁部と頸部の境に段をなし、口縁部が肥厚するもの。
- I₄ 口縁部が複合口縁をなすもの。
- 変形土器
- A 口径30cm以上の大型の壺で、口縁部は「く」の字形に外反する。口縁端部は上下に拡張し、面をもつ。
- B 最大径を体部中位付近にもち、大きく張り出した体部をもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、端部が拡張する壺。口縁部の形態から3つに細分される。
- B₁ 端部が上下方向に拡張し内傾するもの。
- B₂ 端部が上方へ拡張するもの。
- B₃ 端部が外反するもの。
- C 体部最大径を上位付近にもち、肩が張った体部をもつ。口縁部は鋭く「く」の字状に屈曲する。端部の形態から3つに細分される。
- C₁ 端部が上方に僅かに内傾するもの。
- C₂ 端部が僅かに上下方向に拡張するもの。
- D 体部最大径を中位にもち、丸味を帯びた体部をもつ。口縁部は鋭く屈曲し、端部は平坦である。
- E 体部最大径を中位にもち、口縁部は「く」の字状に外傾する。
- F 張りのない体部をもち、口縁部は短く「く」の字状に外反する。
- 鉢形土器
- A 口縁部外面に凹線文をもち、端部は内側に拡張する。
- B 口縁部は直立して立ち上がる。ここでは鉢に分類したが高壺の可能性がある。
- C 底部穿孔の鉢である。器形から3つに細分できる。
- C₁ 駆弾型の体部をもち、若干丸味をもつ平底。
- C₂ 底部突出氣味の平底、体部は、直線的に斜め上方に開く。
- C₃ 大きく内擣する体部をもつ大型のもの。把手をもつものがある。
- D ブランデーグラス状の体部をもつ。擬凹線文をもつものともたないものがある。
- E 口縁部が外反する鉢。2つに細分される。
- E₁ 突出した底部をもち、口縁部が大きく外反するもの。
- E₂ 平底ないしは低い脚部をもち、短い口縁部をもつもの。



第14図 旧河床(I)層出土の土器(1)



第15図 旧河道①層出土の土器(2)



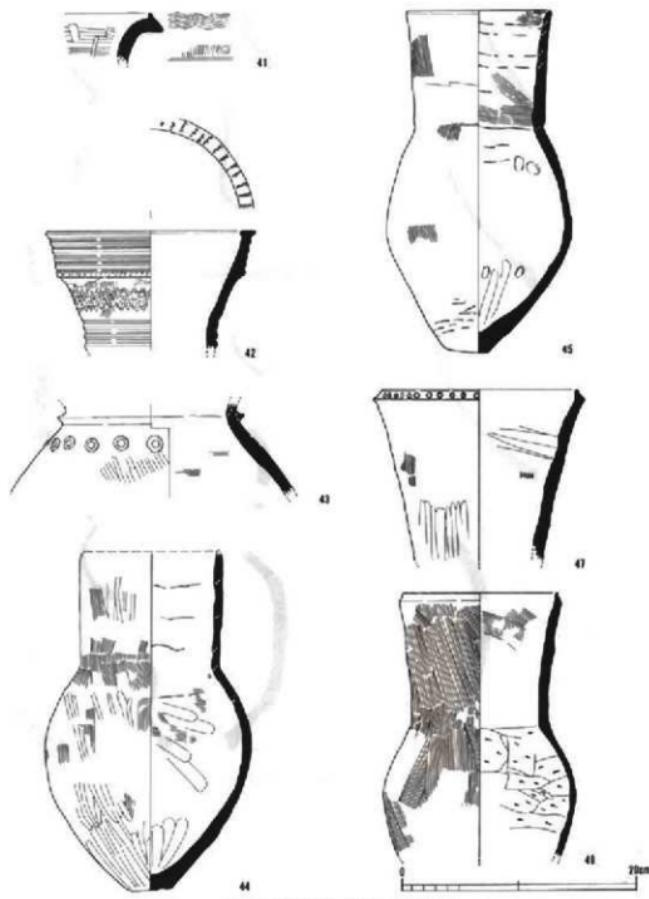
第16図 旧河道①層出土の土器(3)

E₃ 低い脚部をもち、複合口縁をなすもの。

F 内彫して立ち上がる体部をもつ鉢。2つに分かれる。

F₁ 突出した底部をもち、体部から口縁部にかけて内彫して立ち上がるもの。

F₂ 低い脚部をもつ。



第17図 旧河道②層出土の土器(1)

-28-



器台形土器

器台は2つに分れる。

A 筒状の柱状部をもつもの。

A₁ 短い柱状部をもつ。

A₂ 長い柱状部をもつ。

B 据広がりの器台。

第18図 旧河道②層出土の土器(2)

高环形土器

A 壁部上端から水平方向に張り出す口縁部をもつもの。

B 浅い皿状の環部をもち、口縁部が外反するもの。2つに分かれる。

B₁ 口縁部が肥厚しながら外反するもの。

B₂ 口縁部が大きく外反するもの。

C 複合口縁をもつ高环。3つに細分される。

C₁ 深い鉢状の環部をもち、口縁端部が垂直に立ち上がるるもの。

C₂ 浅い皿状の環部をもち、口縁端部が斜め上方に立ち上がるもの。

C₃ 口縁部の屈曲が弱く、口縁端部が大きく上方に拡張する。

D 内側する浅い環部をもつ高环。

以上の分類基準にしたがって、各遺構出土の土器の概要を説明する。ただし柱穴46・土杭2

出土物については、上述した分類に従い、それぞれの項目ですでに説明している。

旧河道①層出土土器 (第14~16図)

旧河道埋土の最上層である①層からは、壺 B₂・C₁・C₂・D₂・F・G₁・G₂が出土している。

(14)は筒状の頭部で、口縁部が屈曲して聞く壺 B₁で、端部を丸くおさめている。内外面ともハケ調整が施されている。壺 C (11~13)は口縁部が外反する壺で、体部が張り出し、口縁部が短く外反する (13) を C₁、体部の張り出しが弱く、口縁部が大きく外反して体部との境が明瞭でない (11・12) を C₂ とした。(11)の外面頭部はヘラミガキ調整、内面体部はケズリ調整が施されている。(13)は、内面体部にユビナデが施される。(15)は、偏平な体部をもち口縁部が「く」の字形に外反する壺 D₁で、端部を丸くおさめている。外面体部と内面体部下半にハケ調整が施される。内面にはススが付着する。長頭壺は頭部が直線的に外上方に向く壺 G₁ (10)と、口縁部が内側気味に聞く壺 G₂ (9)が出土している。(10)は口縁部に注口部をもつ。外面にはタキを残し、他はハケ調整を施す。壺 F (16)は複合口縁をもつ壺である。口縁端部は下方へ垂下し、頭部との境には明瞭な稜をもっている。内外面ともヘラミガキが施されている。

甕は B₁・B₂・B₃・C₂・D が出土している。甕 B₁ は端部の拡張が著しいもの (20) と、そうでない (19) があり、端部外面には擬凹線文が施されている。外面はハケ調整であるが、(19)は内面体部上半にハケ調整、(20)はユビオサエ・ナデ調整を施す。甕 B₂ は複合口縁の甕である。

端部外面に擬凹線文をもつ(22)ともたない(21)がある。(22)は外面体部にハケ調整、内面はケズリ調整を施す。(21)は外面体部のタタキ目を板ナデ調整で消している。壺B₃(23)は、複合口縁上半部が更に外反し下半部とは一直線になる壺である。体部は内外面とも板ナデが施され、内面体部上半はケズリ様の調整を施す。壺B₂よりも新しい要素をもつ。体部が大きく張り出し、口縁部が「く」の字状に外反する壺C₂は、壺部が上下方向に拡張する壺C₃(18)が出土している。この一群のなかでは大型の壺である。(24)は、張り出しの弱い体部をもつ壺Dで、壺Dのなかでも大型のものである。

鉢はA・B・C₂・D・E₃が出土している。

(31・32)は口縁部外面に凹線文・円形浮文を施した弥生時代中期の鉢Aである。鉢B(28・33)は、口縁部が直立して立ち上がる小型の鉢である。ここでは鉢として分類したが、高坏の可能性をもつ一群である。口縁部外面に細い凹線文をもつ(33)、凹線文をもたない(28)があり、とくに(33)は全面に細かいヘラミガキ調整が施され精良な胎土である。弥生時代中期に比定される。(25~27)は、突出した底部をもつ底部穿孔の鉢C₂である。外面体部がタタキ、内面にハケ調整を施す(25)、ナデ調整を施す(27)、内外面にナデ調整を施す(26)と調整技法に規格性がない。とくに(25)は有孔鉢のなかでは小型の鉢である。(30)はプランデーグラス状を呈し、精良な胎土の鉢Dである。(29)は、複合口縁・低脚部をもつ小型の鉢E₃である。口縁部外面には擬凹線文が巡る。

器台は長い筒状の柱状部の器台A₂(37)と歴広がりの器台B(34~36)がある。器台Aは脚部部が拡張し、面をなす。器台Bは脚部に円孔を穿つ。

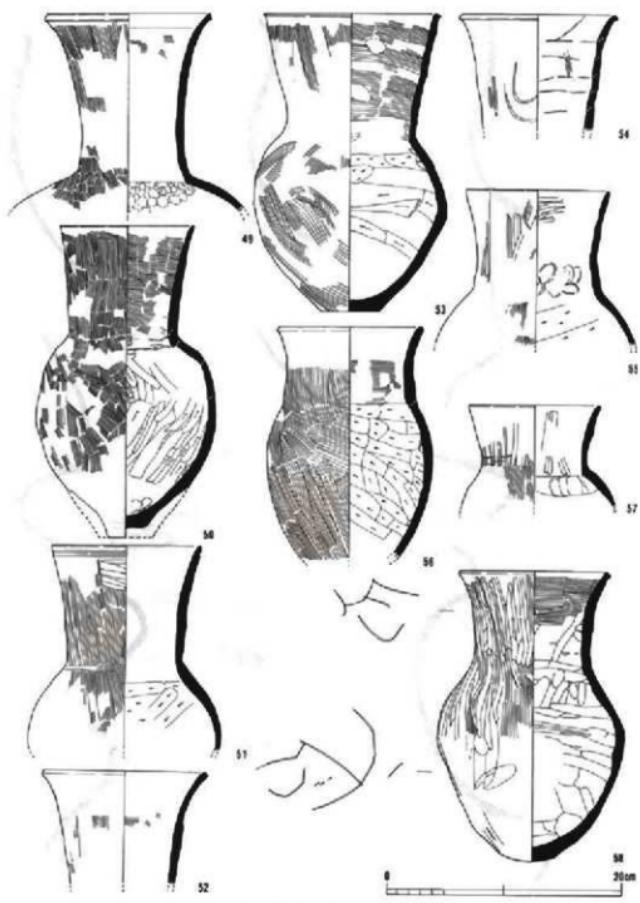
(38~40)はミニチュア土器である。(38)は、口縁部に2穴一対の穿孔を2箇所もつ壺である。(39・40)は長頸壺である。

旧河道②層出土土器 (第17~25図)

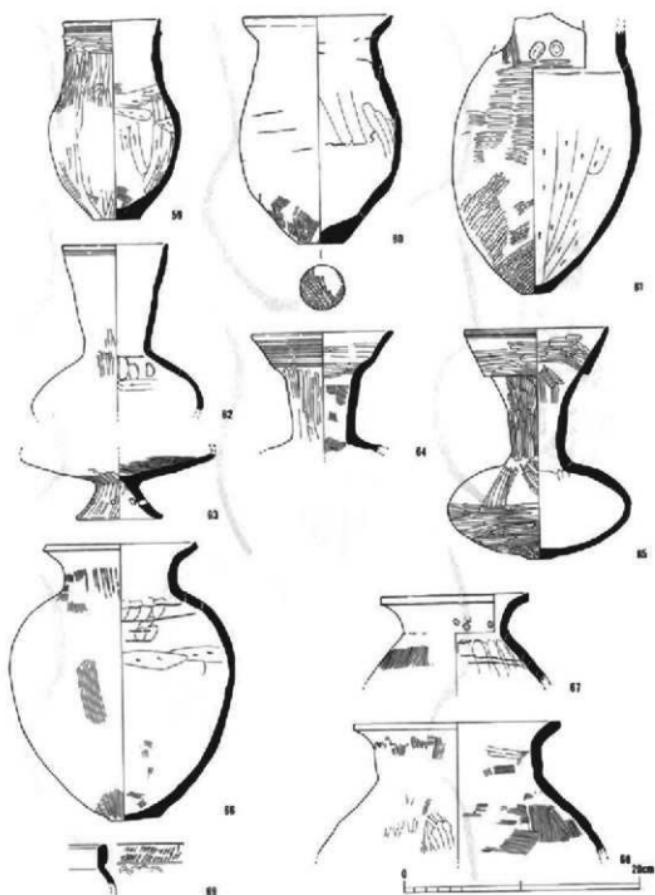
第②層は短期間に河道内に堆積した洪积砂層である。土器の量・器種も他の旧河道内の堆積層に比べ、圧倒的に多い。

壺はA₂・B₁・B₂・B₃・D₁・E・G₁・G₃・G₄・I₁・I₂・I₃・I₄が出土している。

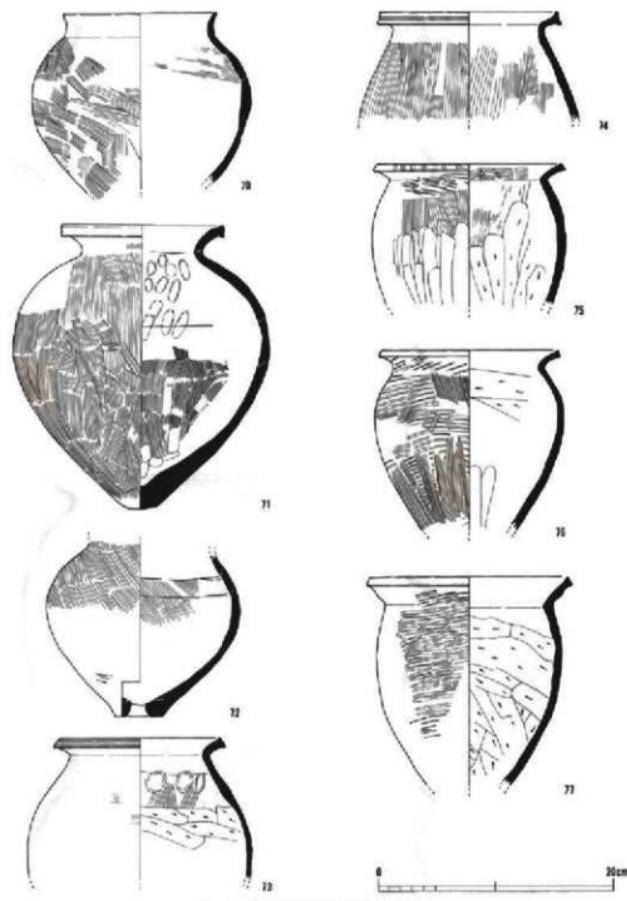
(67)は、口縁部が大きく開き、頭部に円形刺突文をもつ壺A₂である。体部にハケ調整、内面にユビナデを施す。壺Bは端部が上下に拡張し、端部外面に櫛描き波状文を施す壺B₁(41)、筒状の頭部をもち、端部が拡張しない壺B₂(66・68)がある。(41・67)は弥生時代中期と考えられる。(71)は口縁部が「く」の字状に外反し、端部が上下に拡張し面をなす壺D₁である。体部外面・内面下間にハケ調整が、上半はユビナデ調整が施され、壺D₂と調整技法は同じである。壺E(70)は球状の体部で、短く外反する口縁部をもつ壺である。内外面ともにハケ調整を施す。壺G₁(44~46)は、頭部がほぼ垂直に立ち上がる長頸壺である。(44)は外面にヘラミガキ調整を施し、(45)はタタキ目を残す。口縁部が外反する壺G₃(49~59)は長頸壺のなかで



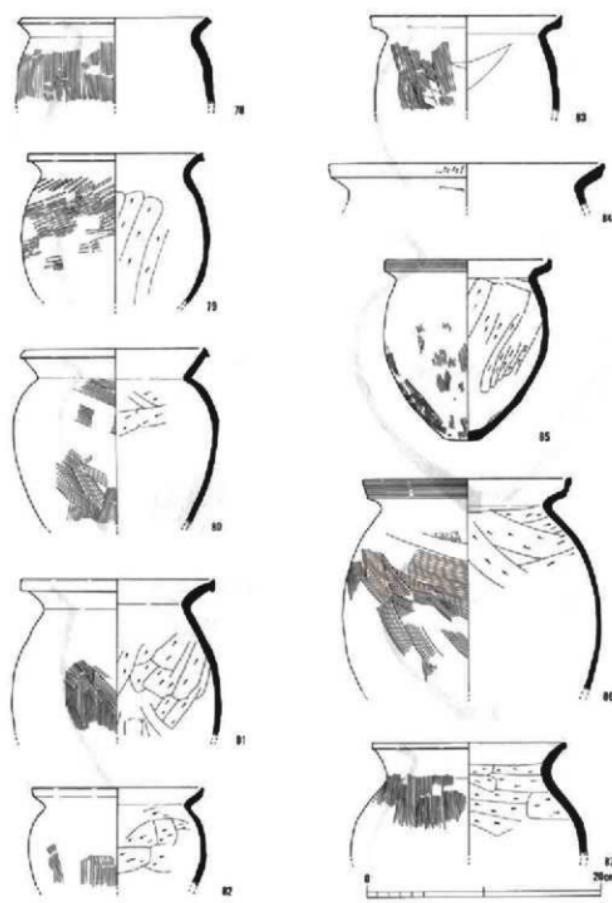
第19図 旧河底②層出土の土器(3)



第20図 旧河道②層出土の土器(4)



第21図 旧河道②層出土の土器(5)



第22図 旧河道(2)層出土の土器(6)

も量的に多い。外面の調整がハケ調整を施す(49・53・56)と、ヘラミガキを施す(54・55・57～59)がある。後者の(54・58)はヘラ搔きによる絵画文が刻まれている。とくに(58)の絵画文は、頭部のものが鹿のような動物、体部のものが人を描いているように思える。壺G₄は口縁端部が直立しないしは内傾して立ち上がる長頸壺である。(47)は端部外面に竹管文を施す。(59)は直立する端部外面に擬凹線文を施す小型の長頸壺である。外面はハケ調整の後、丁寧にヘラミガキ調整を施している。壺I₁は口縁部のつくりに特徴をもつ細頸壺である。壺I₁(42)は、口縁部外面・頸部に凹線文、撫撓き波状文を施す弥生中期の壺である。壺I₂(62)は頸部と口縁部に明瞭な境のない壺である。壺I₃(65)は口縁部が肥厚し端部が尖った壺である。端部外面に2条の擬凹線文を施す複合口縁の壺である。外面はいずれもヘラミガキが丁寧に施され、つくりも丁寧である。(64・65)は精製の土器である。(43)は頸部に断面三角形の突帯を張り付けた壺である。体部上位に竹管文が施される。

壺はA・B₁・B₂・C₁・C₂・D・E・Fがある。

壺A(92・93)は口縁部が「く」の字状に短く外反する弥生時代中期の壺である。(92)は内外面ともハケ調整を施し、端部外面には刻み目を施す。(93)は口縁部の外反が(92)よりもゆるく、端部の拡張も下方に向かって著しい。内面は板ナデが施されている。外面にはスヌが付着する。口縁部が「く」の字状に外反し、端部が拡張する壺B₁は、上下に拡張する壺B₁(73・74)と、上方に拡張し受け口状を呈する壺B₂(60・82～86)がある。(73・74)は拡張した端部に擬凹線を施し、内面体部上半にハケ調整が残る。壺B₂は、複合口縁をもち、端部外面に擬凹線文を施す(85・86)と、口縁端部が受け口状を呈し、擬凹線をもたない(60・82～84)がある。調整技法は、(60)を除き、両者とも外面体部がハケ調整、内面が頸部付近までケズリ調整を施している。(60)は外面体部および底部にタタキ目を残し、「叩き平底手法」が用いられている。内面はナデ調整である。内外面とも粘土接合痕跡を残し、粗雑な作りである。(85)は体部内外面ともタールが付着し、煮沸器としての使用が窺える。擬凹線をもたない一群の中でも体部最大径を上位にもつ(82)、下位にもつ(60)は器形が他とは異なり、細分する必要があるかもしれない。(84)は端部外面に上下方向3段の柳描列点文を施している。壺C₁は端部が僅かに上方へ拡張する壺C₁(75～77)がある。壺C₁は外面体部・口縁部にタタキ目を残し、「口縁叩き出し手法」の痕跡を残す。(75)はタタキをハケ調整で消し、体部下半にケズリ様の強いナデを施している。内面は口縁一部上位にハケ調整を残し、(76・77)とは調整が異なっている。(79～81・88)は、端部が上下方向に僅かに拡張する壺C₂である。(79)は外面体部にタタキ目を残すが、壺C₁のように頸部にまでタタキは施されない。(80)は、体部最大径を上位にもち、口縁部は直線的に外傾し、他の壺C₂とは器形が多少異なる。細分が可能かも知れない。(89)は口縁部が鋭く「く」の字状に屈曲する壺Dである。外面にはタタキ目を残し、内面のケズリ調整は頸部まで至っていない。口縁端部に一条の沈線が巡る。(91)は口縁部が直線的に外傾する壺Eである。

内面体部のケズリは上半まで施されていない。(78・87・88・90)は張りのない体部をもち、口縁部が短く外反する型Fである。外面体部はハケ調整、内面は頭部までケズリが施されている。(90)は型Fのなかでも口径20cmを超える大型の型である。

鉢はC₁・C₂・D・E₁・E₂・F₁・F₂がある。

鉢Cは、砲弾形の体部をもつ穿孔鉢C₁(95・96)と直線的に聞く体部をもつ鉢C₂(94)がある。(95)は内外面ともヘラミガキが施されている。(94)は外面にタタキ目を残し、(96)と同様、内面下半にケズリ調整を施す。(101・102)は鉢Dである。擬凹線文はもたない。外面にヘラミガキ調整を施す(101)と内面下位にハケ調整を施す(102)がある。口縁部が「く」の字状に外反する鉢Eは、短い口縁部をもつE₁(103)がある。調整は外面ともヘラミガキ調整を丁寧に施している。(106)は底部に低い脚部をもつE₂である。内掛する体部をもつ鉢Fは、突出した底部分をもつF₁(98・99)と低い脚部をもつF₂(104・105・107)がある。鉢F₁は内外面とも上半はハケ調整、底部付近は丁寧なヘラミガキ調整が施されている。(105)は脚部である。外面はハケ調整の後、小さな竹管文を施す。(108)は柱状の脚部をもつ大型の鉢である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下方向に拡張する。体部外面はハケ調整の後、ヘラミガキ調整が施されている。

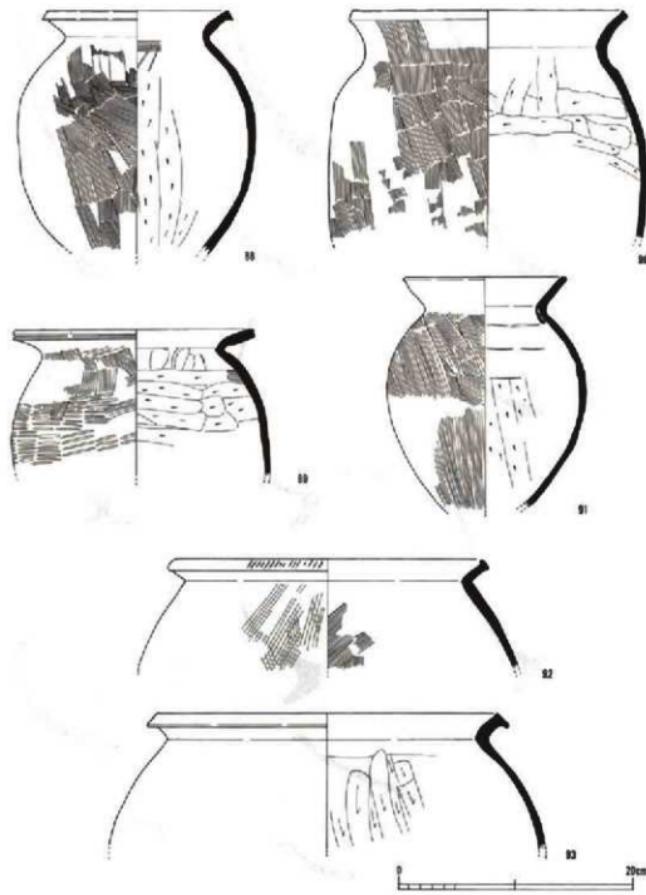
高环は、A・B₁・B₂・C₁・C₂がある。

高环A(109)は、水平方向に張り出す口縁部をもつ弥生時代中期の高环である。端部に凹線文を運んだ後、棒状浮文を張り付けている。高环Bは、外反する口縁部をもつ高环である。口縁端部が肥厚するB₁(110)と大きく外反するB₂(111・112)がある。(112)はほぼ完形である。全面にヘラミガキが施され、胎土も精良で丁寧な作りである。中空の脚部をもつ。据部の三方に円孔を穿っている。高环B₁・B₂はヘラミガキを主な調整技法とする点で類似している。複合口縁をもつ高环Cは、端部外面に擬凹線文を施し、調整も高环B₁・B₂と同様、ヘラミガキ調整が主で丁寧な作りである。高环Cは複合口縁をもち、端部外面に擬凹線文を施す丹後系の高环である。口縁端部が垂直に立ち上がるC₁(113・114)、口縁部と端部がほぼ一直線にならび、端部が幅広なC₂(115)がある。いずれも丁寧にヘラミガキ調整を施している。(114・115)は据部の四方に円孔が穿たれている。(116)は、筒状の柱状部をもつ高环の脚部で、中空である。柱状部と据部の境に二条の沈線が巡り、据部に円孔を4箇所穿っている。

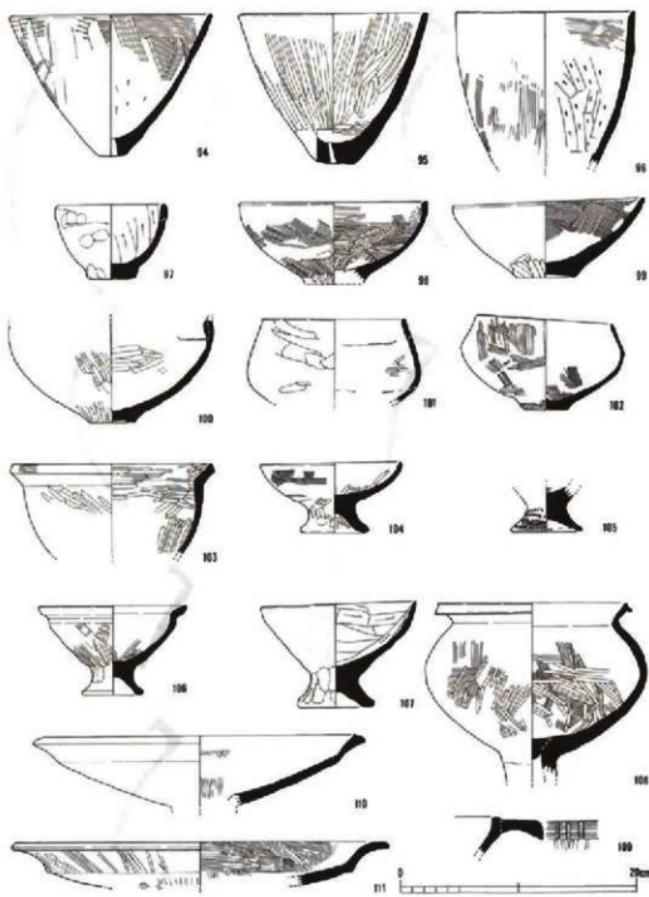
器台は、A₁・A₂・Bがある。筒状の柱状部をもつ器台Aは、短い柱状部をもつA₁(121)と長い柱部をもつA₂がある。(121)は端部が上下方向に拡張して面をなす。調整はヘラミガキ調整ではなく、細かいハケ調整が主体である。柱状部には上下2段の円孔が穿たれる。

(119)は外面に幅広の粗いヘラミガキを施し、柱状部は上下方向に3個の円孔を二方向穿つ。

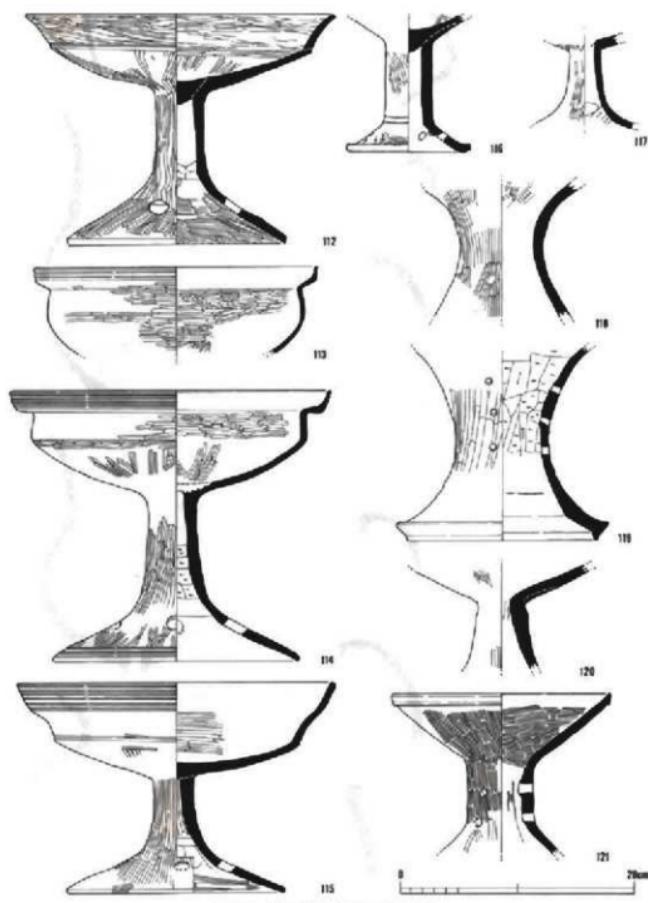
脚端部は上下方向に拡張し、端部に凹みをもつ。



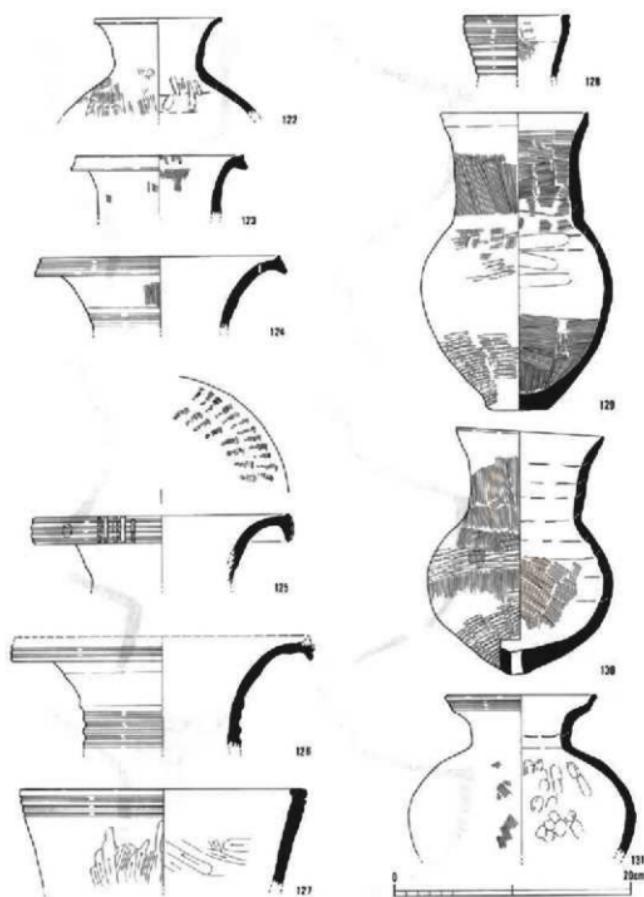
第23図 旧河床②層出土の土器(7)



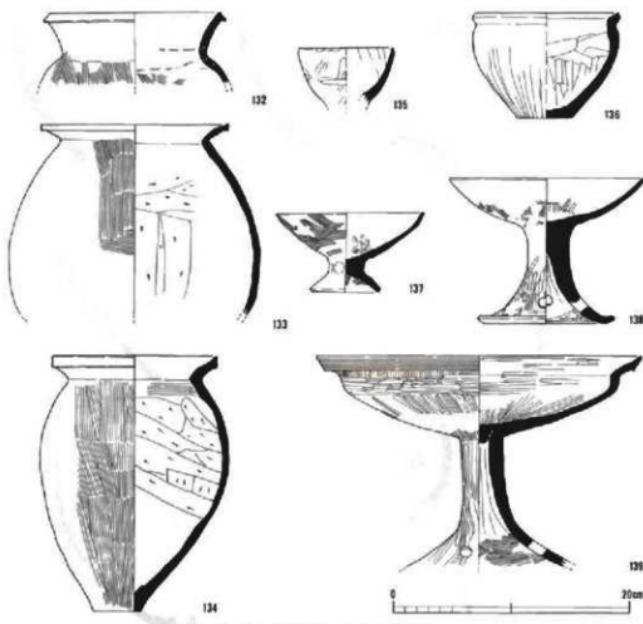
第24図 旧河道(2)層出土の土器(8)



第25図 旧河床(2)層出土の土器(9)



第26図 旧河道③層出土の土器(1)



第27図 旧河辺③層出土の土器(2)

旧河辺③層出土土器 (第26~27図)

旧河辺③層は、旧河辺内埋土の最下層にあたり、有機物を多く含んだ層である。土器は、上層の①・②層に比べ量的に少ない。弥生時代中期の土器が目立つ。

壺は A₁・B₁・B₂・C₁・G₂・G₄・H・I₁ が出土している。

壺 A₁ は(124~126)が該当する。(124・126)は壺 A₁ のなかでも口縁端部下方の垂下が弱く端部外面の幅も狭い。(124)は口縁端部・頸部に凹線文が巡り、口縁部に円孔を穿つ。(125)は、端部の下方への垂下が著しい。端部外面には、凹線文を施した後、4 本一単位の棒状浮文と円形浮文が施される。壺 A₁ は弥生時代中期の壺である。筒状の頸部をもつ壺 B₁ は、口縁部が短く外反する壺 B₁(123)と複合口縁の B₂(131)がある。(123)は弥生時代中期の壺と考えられる。

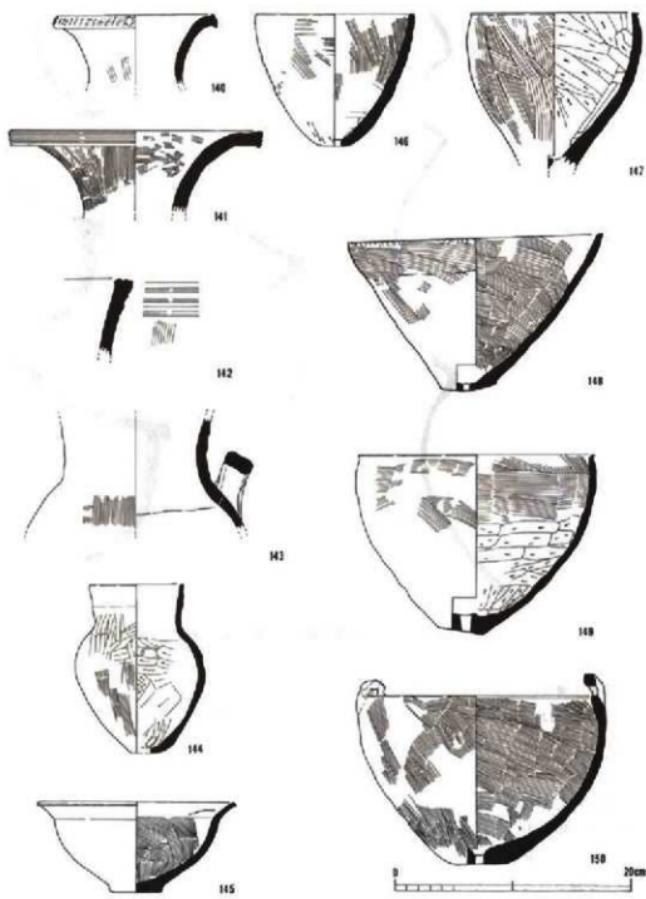
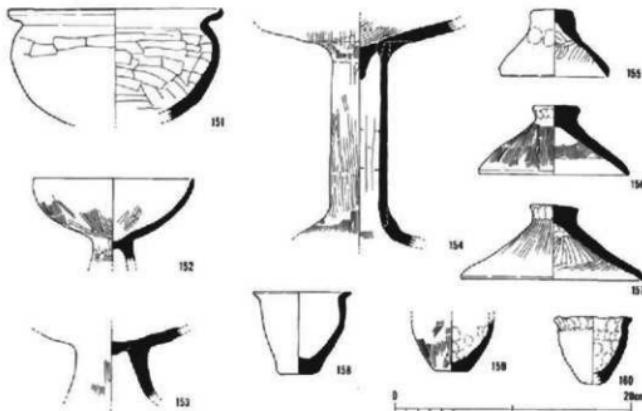


図28(1) 旧河道その他出土の土器(1)



第29図 旧河道その他出土の土器(2)

(131)は口縁端部外面に擬凹線文を施し、外面体部はハケ調整、内面はユビオサエ調整である。(122)は頸部が外反して、そのまま口縁部に続く壺C₁である。長頸壺GはG₂とG₄がある。(130)は壺G₂のなかでも小型の壺で、丸底に近い底部穿孔の土器である。外面にはタタキを残している。内面には粘土組接合痕跡が目立つ。(129)の壺G₄は体部にタタキを施した後、丁寧なハケ調整を施し、器面を整えている。(127)は短頸壺で口縁部に凹線文を施す。壺I₁。(128)は細い頸部をもつ細頸壺である。口縁部に凹線文が巡る。(127・128)は弥生時代中期の壺である。

壺は、B₂・C₂・Dがある。

(134)は、口縁端部が上方に拡張する壺B₂に分類される。内面体部のケズリ調整は頸部まで施されず、ハケ調整を残す。(133)は「く」の字状の口縁部をもち、底部が僅かに上下に拡張する壺C₂である。内面頸部付近にハケ調整が残る。

鉢はE₂・F₁・F₂がある。

(136)は口縁部が「く」の字状に短く外反する鉢E₂である。体部外面はヘラミガキ調整、内面はユビナデ調整である。(135)は鉢F₁のなかでも小型の鉢である。内外面ともユビナデ調整で器面を整えている。(137)は低い脚部をもつ鉢F₂である。体部内面はヘラミガキ調整で外面にはハケ調整が施される。

高环は C₂・D がある。

(139) は複合口縁をもつ高环 C のなかでも、端部が外傾する高环 C₂ である。端部外面に擬凹線文が巡る。他の高环 C と同様、丁寧なヘラミガキが施されている。高环 C₁ より端部が外傾し新しい要素をもつ高环である。(138) は裾広がりの脚部をもち、环部が内傾する高环 D である。环部内面は丁寧なヘラミガキを施し、裾部の四方に円孔を穿つ。

旧河道内その他出土土器 (第28・29図)

ここで掲載する土器は旧河道内出土であるが、出土層位が不明の一群である。

壺は A₂・G₁・H がある。

(140・141) は口縁部が漏斗状に外反し、端部が肥厚し面をもつ壺 A₂ である。(140) は口縁端部に廉状文を施し、円形浮を張り付けている。壺 A₂ のなかでは外反の度合いが小さい。(141) は端部に細い凹線文を施す。壺 A₂ は弥生時代中期の土器である。(144) は小型の長頸壺で、颈部が直線的に立ち上がる壺 G₁ に分類される。(142) は、口縁部外面に細い凹線文を施す短頸壺である。壺 H に分類され、弥生時代中期の壺である。(143) は体部上半に半環状の把手をもつ短頸壺である。

鉢は C₁・C₂・C₃・E₁ がある。

(146・147) の砲弾形の体部をもつ底部穿孔の鉢 C₁ である。(146) は外面ハケ調整でタタキを残す粗い調整である。(147) は内面にヘラケズリを施した後、底部付近を丁寧にナデ調整している。両者とも端部は平坦である。(148) は鉢 C₂ である。C₂ のなかでも口径21.6cmと大型の鉢である。端部外面はユビオサエ調整によって整えている。(149・150) は体部が内傾する大型の鉢 C₃ である。(149) は内面下半にヘラケズリ調整を残し、上半にハケ調整を施している。(150) は口縁部に半環状の把手を 2箇所対峙して張り付けた鉢である。内外面とも丁寧にハケ調整が施される。(145) は口縁部が「く」の字状に外反する鉢 E のなかでも、外反する口縁部の大きな鉢 E₁ に分類される。外面はナデ調整を施し、内面口縁部はヘラミガキ調整、体部は丁寧なハケ調整である。(151) は偏平な体部をもち、口縁端部が直立し受け口状を呈する鉢である。内外面とも横位の板ナデを施す。

(152) は高环 D である。裾広がりの脚部をもち、中空である。外面はハケ調整の後、ヘラミガキ調整を施している。环部内面はヘラミガキ調整である。(153・154) は中空の高环の脚部である。(153) は裾広がりの脚部である。环部が内傾する高环 D に分類されると考えられる。(154) は長い鶴状の柱状部をもち、円板充填法である。

(155～157) は、突出したつまみ部をもつ蓋である。(155) は体部が内傾気味に小さく聞く蓋である。内面はヘラミガキ調整である。(156・157) は、つまみ部と体部の境にくびれをもつ蓋である。(156) は(155) と同様、体部が内傾気味に聞く。内外面ともハケ調整を施す。(157) は体部が直線的に聞く蓋で、内外面と丁寧なヘラミガキ調整を施す。

木 器

旧河道内から出土し、出土位置が記録された木器は、合計218点である。以下では、そのうち60点の実測図を掲載し、樹種、計測値等は、文末の観察表に一括して記載する。

1は木鉋である。極めて精緻な加工が施されている。先端部が四角錐状となる。基部は、先端部からの棱を削り取り、さらに、柄を作り出している。器表面、特に先端部は丁寧に仕上げられており、加工痕はほとんど識別できない。

本例は、身部の断面形が、棱をもつ菱形、柄部の断面形がU形を呈しており、全体的な形態は、鉄鉋の中でも定角式と呼称されるものに近似するようである。これに従うならば、本例は弥生時代後期末以降の所産と考えられよう。

2は、いわゆる木庖丁（木製摘具）である。厚さ5～6mmの板を用いている。板目板の木目に平行する方向に、刃部を設けている。刃部は、主として片面を削ることによって作出されている（図右面）、図左面側もわずかに削られた痕跡を示している。

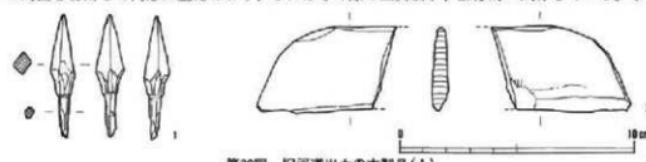
3は、極めて精緻な作りの匙である。身部と柄のなす角度が大きく、液体をくさい取るのに適した形態を呈している。柄はわずかに彎曲しており、半円形の断面形を呈している。また、柄の端部は丸味をもたせるように削って仕上げられている。身部は木薺形を呈する。全体の調整は、3～5mm幅の極めて丁寧な削りによるものであるが、柄部の表面（図左）のみは平滑な面となっていて、加工痕を識別し得ない。

4は、縦斧の柄である。斧台部分は一部が欠損しているが、幅が狭いことから、小型の柱状片刃石斧の柄と考えてよいであろう。柄部は、緩やかに彎曲している。柄部の大半を欠損している。

5は、小型の横槌である。丸木を素材として、槌身を太く作り、握り部の木端も太く作って『グリップエンド』としている。槌部の先端は丸く仕上げられている。槌部の側面には、打撃痕が認められる。

6・7は、叉鍬である。6は板目、7は板目取りの材が用いられている。6は、四又であるが、7は遺存度が悪いため明瞭ではない。ともに方形の着柄孔を穿っている。

8～11は、桶状容器の底である。8、10が板目、9、11は板目となっている。いずれも板材の周囲を切断して円形に整えており、8にはその際の工具痕が、部分的に残存している。なお、



第30図 旧河道出土の木製品(1)

11の一端は、炭化している。

12は、桶蓋であろう。梢円形を呈する蓋の長径側の両端に、把手を作り出している。蓋内面は平坦に、上面はふくらみをもった形態に作られている。

13は、12のような蓋に対する桶であろう。底と、身部の約 $\frac{1}{3}$ を欠いているが、上面観は12の蓋に近い梢円形を呈している。長径側の一端に孔を有する把手が作られていたと思われる。把手の孔は、これを担うための粗孔、または蓋と結んで固定するためのものであろう。

14は槽である。両側を欠損しているが、平坦な底部から、約 120° の角度で立ち上がる体部をわずかにとめている。体部内面、底部には、幅1~数cmの削り痕が観察される。なお、底面の一端に、縄目の痕跡が残存している。

15~18は、柄およびその把手である。いずれも類似した形態を呈している。側板の直上に把手がつくことから、無蓋の桶と思われる。

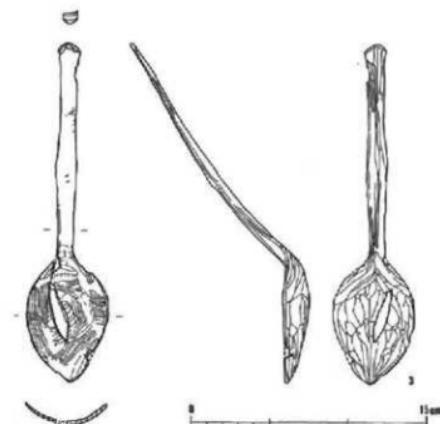
側板の内面には、1~2cmの段が作り出されており、底板を固定するためのものと思われる。

19は、鉢状の容器であろうか。板目取りの材を用いて、丸みをもつ底部を削り出し、内面も数cm凹ませている。辺縁の厚みにはかなりの差が認められ、調整も全体にやや粗い。

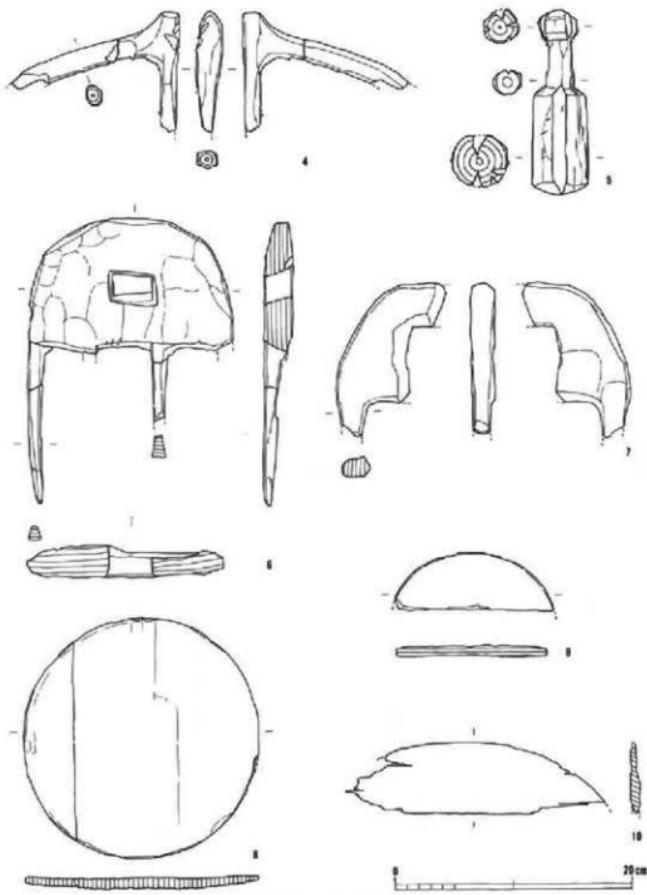
20は鶴の柄である。手の一部と、鶴先を欠損している。把手はバチ形に広がり、端部は平坦に仕上げられている。

21~26は、棒状を呈する遺物である。長さ、径、形態が異なっており、同一器種に属するものとは考えられないが、いずれも遺存しておらず、原形、用途等は不明である。

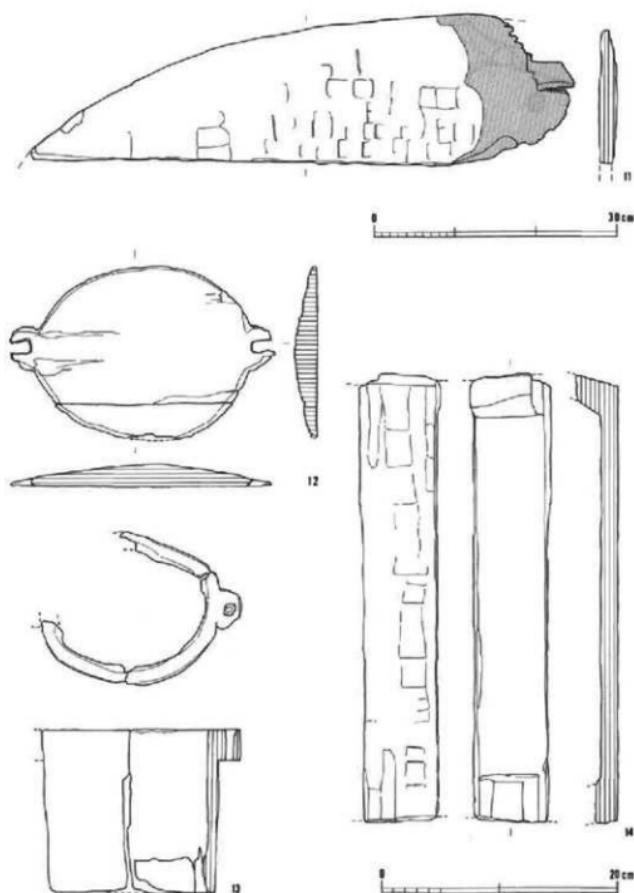
一端に突出部をつくるもの(21)、一端を平坦に仕上げるもの(22)、一部に抉りをもつもの(23)、両端が炭化するもの(25)など多様である。断面形は、円形を呈するものと多角形を呈するものとが認められる。



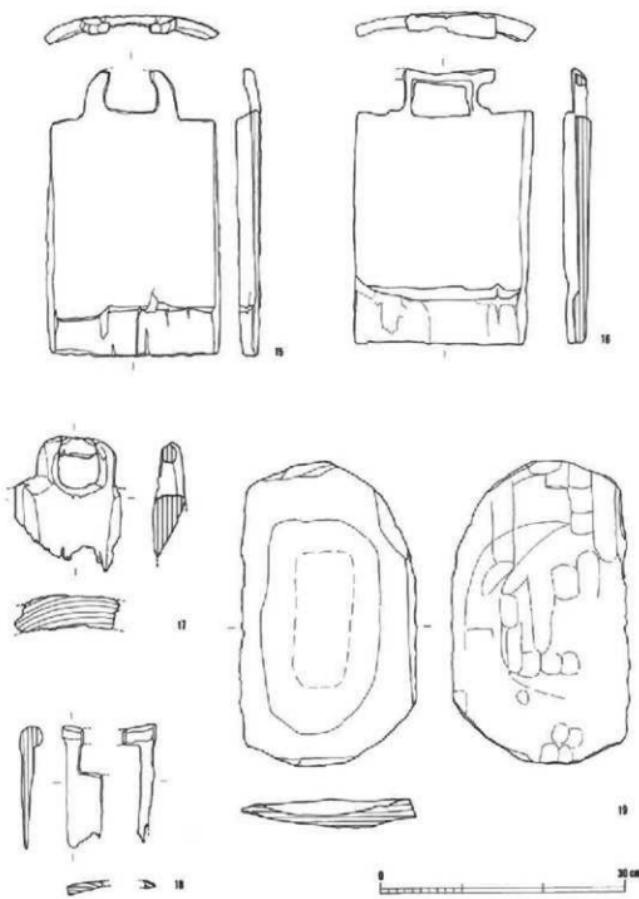
第31図 旧河床出土の木製品(2)



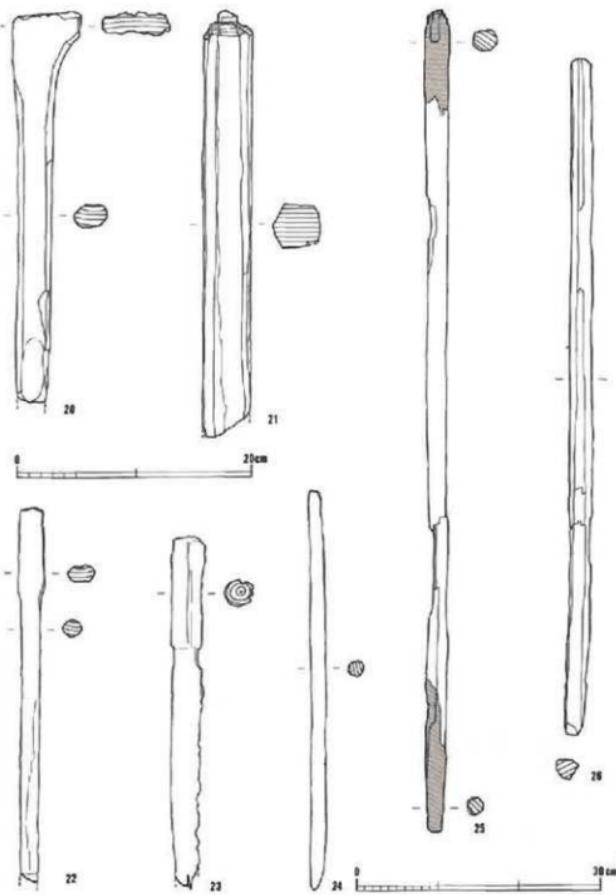
第32図 旧河底出土の木製品(3)



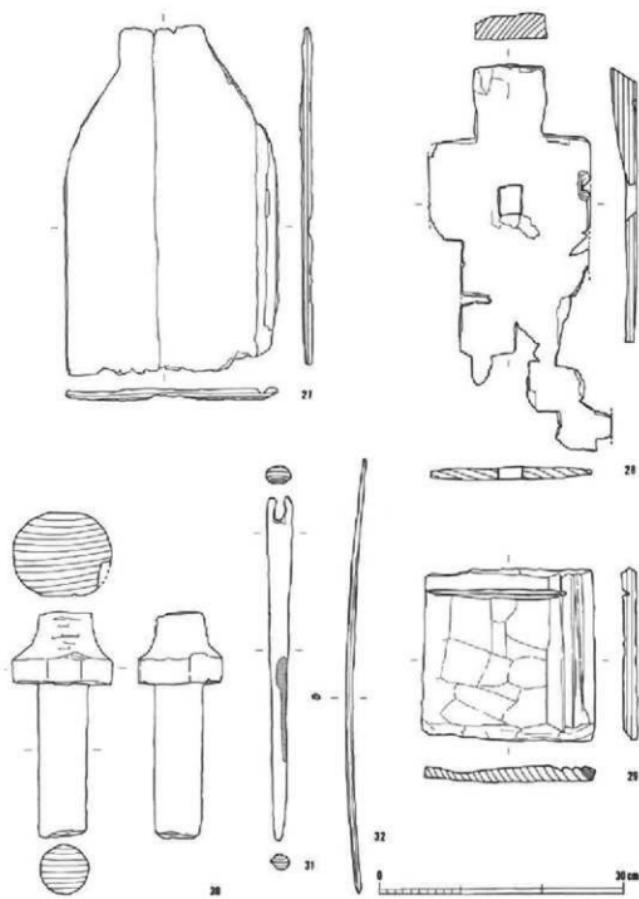
第33図 旧河道出土の木製品(4)



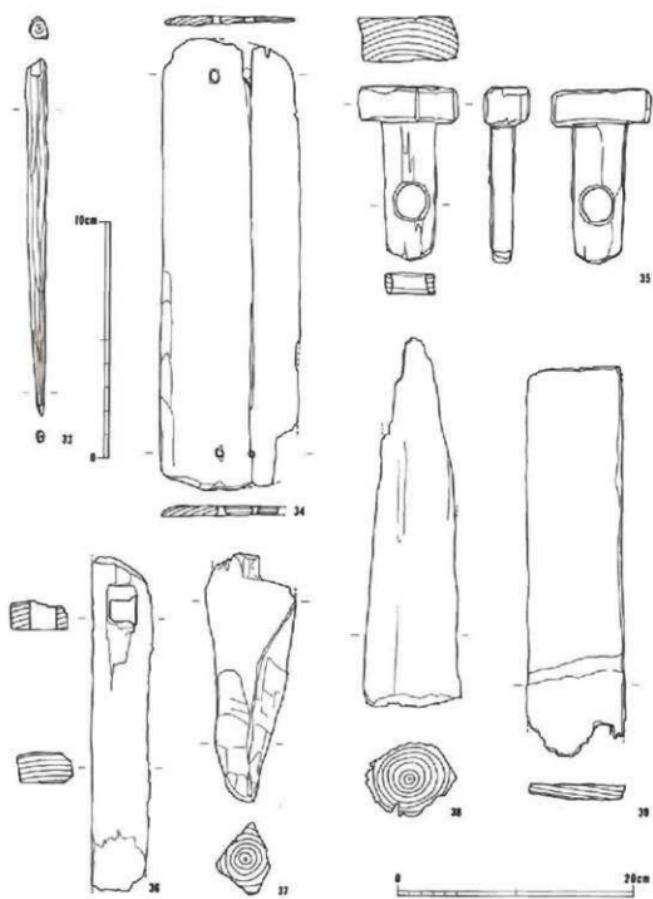
第34図 旧河底出土の木製品(5)



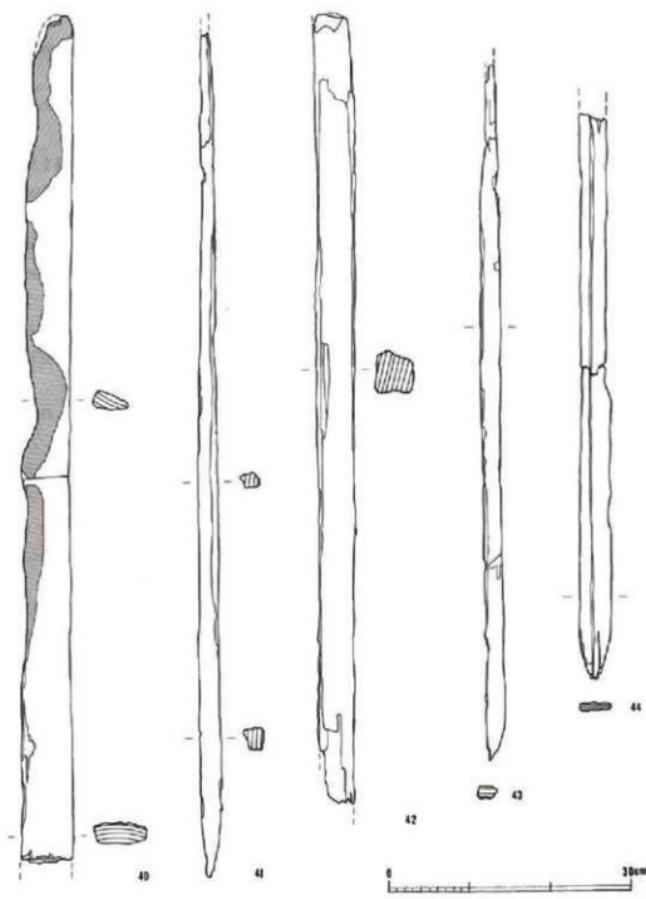
第35図 旧河遺出土の木製品(6)



第36図 旧河道出土の木製品(7)



第37図 旧河道出土の木製品(8)



第38図 旧河道出土の木製品(9)

27、28は獄である。

27は平獄である。両側縁は、わずかな曲線を描きつつ先端部に至る。上半部には、粗い削り痕が残る。断面形は、両側縁が厚く中央がやや薄い。未製品であろう。

28は、広い範囲を欠損する。上部に明瞭な突出部を作り出し、そのやや下方に方形の着柄孔を穿っている。

29は、獄の未製品である。板材の長辺に対して、直交するように、断面V字形の溝を刻み切斷したもので、表面には切断に至らなかった溝4条が認められる。器表面は、幅6~7cmの削りによって仕上げられ、ゆるやかな起伏をもっている。

30は、用途不明の木製品である。断面がほぼ円形の棒の一端に、傘状を呈する部分を作り出している。全体の形状は、あたかも車軸のような印象を受けるが、使用の痕跡等をとどめず、用途は不明である。

31は、一端を尖らせて、他の一端を削って二叉にしたものである。一部が炭化している。

33は、用途の不明確な木製品のひとつである。一端を鋭く尖らせており、刺突を目的とした利器、または、釘の一種かとも考えられる。

34は、板の両端に2か所ずつの孔を穿ったもので、田下駄、または、大足と考えられるものである。比較的丁寧な作りとなっており、両端はやや丸みをもって仕上げられている。

35は、建築部材の一端である。T字形を呈し、頭部は先端よりも厚く作られている。下方より約4分の位置に円孔が穿たれており、建築材を接合する際のジョイントの役割を果す、いわゆる「栓状木製品」の可能性をもつものである。

36は、何らかの構造物に用いられていた材であろう。方形の孔が一端に遺存している。断面が長方形を呈する角材である。下部を欠損しているため、その全容は明瞭ではない。

37~56は、杭・板、ないしは棒状の木製品である。部分的に炭化したものも認められる。いずれも、何らかの構造物であったものと思われる。これらの詳細に関しては、後述に委ねる。

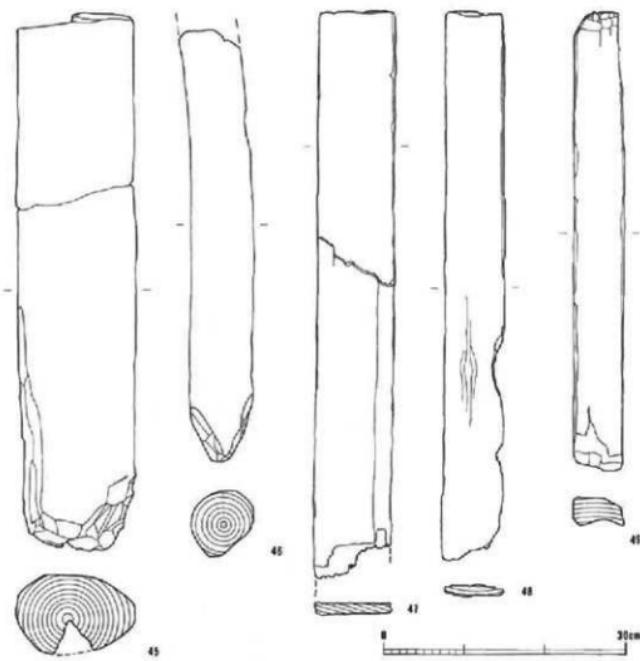
57、58は、梯子である。57は柵目取り、58は板目取りとなっている。ともに厚い板材を削り出して、段を設けている。

57は、下端を削って尖らせており、地表に突き出した最下部であると思われる。また58は、上端が平坦に仕上げられており、梯子の最上部と思われる。

58の裏面には、1条の浅い溝が認められる。

59は田舟である。柵目取りの板材の一面を削って舟形に仕上げている。底部はゆるやかな曲線を描き、厚みを増して端部に至る。

60は箒（長柄箒）である。板目取りの材から削り出されている。身部は一側縁を欠いている。柄部は、身部から次第に厚みを増すように作られている。身部は、やや変形してはいるものの、側面縁がわずかなカーブを描くように作られているようである。

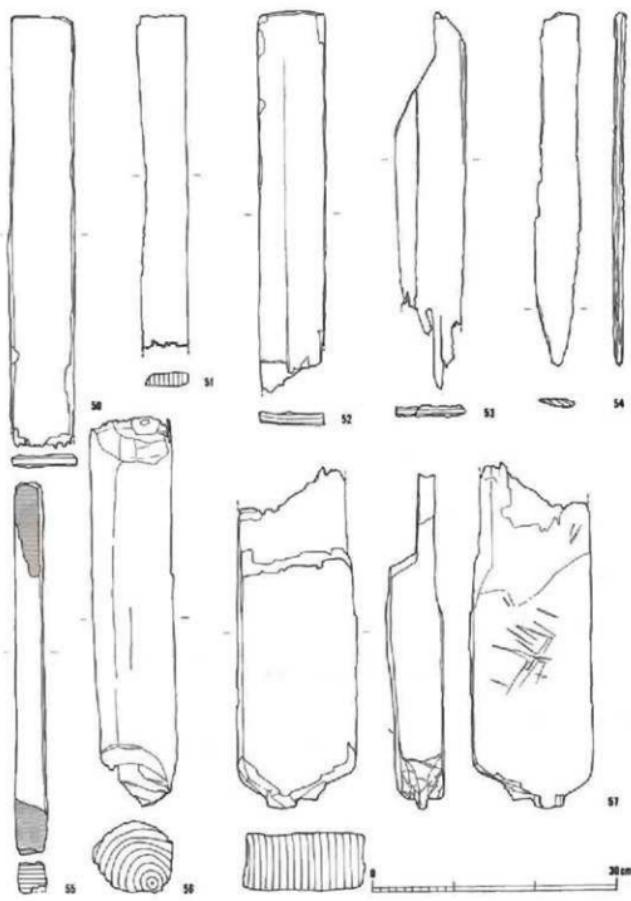


第39図 旧河道出土の木製品(10)

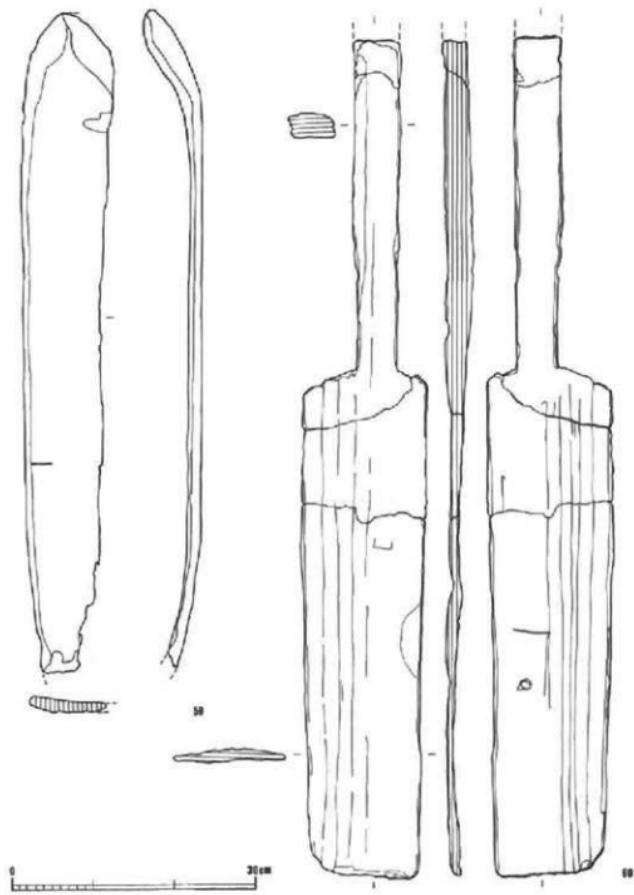
旧河道出土の材について

旧河道内からは、明瞭に製品と判断しうる木製品の他に、多数の板、角材、および丸木材が出土している。これらは、その用途、原形が必ずしも明確ではない。本文中では、37-56を図示したのみであったが、これらを含めて、今回の調査で出土した板材等についてその計測値を示したものが、第44-46図である。ただし、これらの数値には、破損したものの△も含まれていることを、予め述べておく。

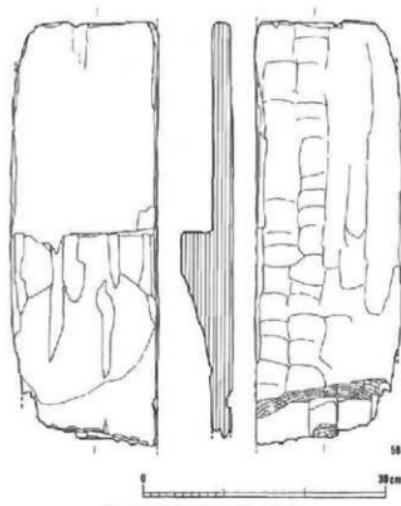
板材の計測値は、木器全体のなかで最もサンプル数が多い。破損品が多く、とくに本来の長さを知りえないものが多い。また、計測値の分布も、かなり拡散した状況であるが、完存して



第40図 旧河道出土の木製品(11)



第41図 旧河道出土の木製品(12)



第42図 旧河遺出土の木製品(13)

比較的細いものが多数を占める。長さは、60cm未満に集中するが、やや離れて1m前後にも計測値の分布が認められる。

以上のような各材の計測値の分布を見てゆくならば、長さが60~80cm以内のものと、1m前後のもの、さらにこれを超えて長大なものとに分離しうるかもしれない。さらに想像をたくましくするならば、こうした差異が、構造物(建築物)の主要構造材とその他の構造材、さらに、建築物以外の木製品の素材等に対応している可能性を考えることも不可能ではない。

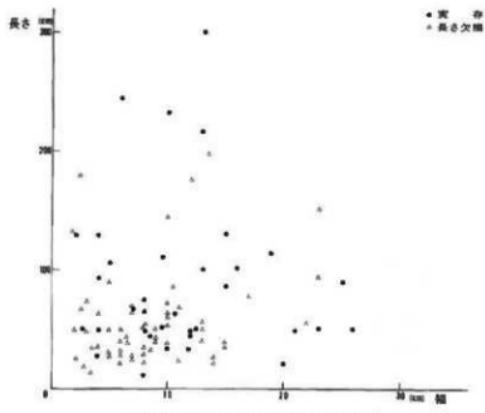
今回の調査で出土した板材等では、建築材であったことを検証しうるものは多くはない。しかし、こうした計測値のデータから、その遺跡で出土した製品以外の材に関する傾向のひとつを導くことも、当該遺跡の性格を考えるうえで無意味なことではなかろう。

旧河遺内出土の土器類は、主に弥生時代後期~古墳時代初期のものを混在しているため、土器の所属時期についても不明の点が多い。しかし、旧河遺内における木製品の検出状況は既述の通り上・下2面が認められるものであった。②層には、古墳時代より新しい遺物が含まれていないことから、上位の木器検出面の所属時期は、古墳時代初期を大きく下ることはないものといえよう。

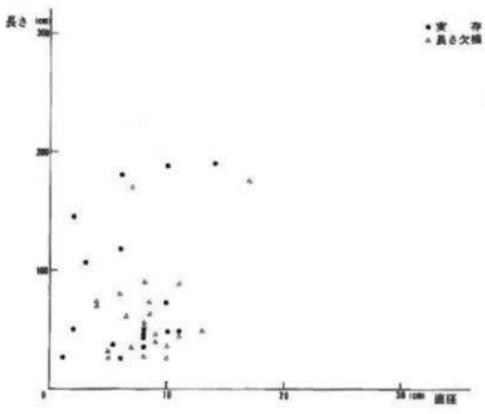
いたもののみを取り上げてみると、幅15cm、長さ80cm以内に、ある程度の集中が認められる。また、幅は、数cm~20cmと多様であるが、長さが1m前後のものが、比較的多く見られる。一方で、幅は前者と大差ないものの、長さのみが2mを超えて著しく長いものが存在する。

丸太材では、直径5~10cm、長さ1m未満の位置に、計測値の集中が認められるが、やはり、長さ2mに近いものが存在する。とくに折損しながらもなお、2m近いものは、本来はかなり長大なものであったろう。住居の主柱等としての機能が推測される。

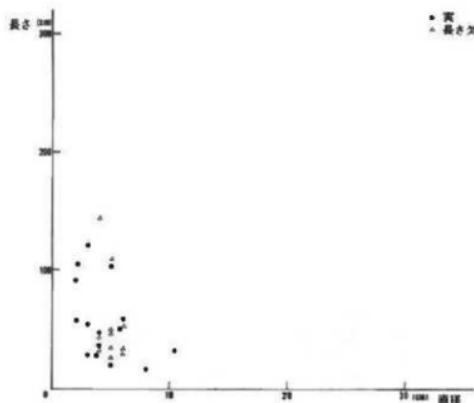
角材では、一辺が6cm未満の



第43図 建築材(板材)計測値分布図(1)



第44図 建築材(丸太材)計測値分布図(2)



第45図 建築材(角材)計測値分布図(3)

旧河道内出土の木製品類は、大別すれば下記のようなものといえよう。

- ① 織、獣を中心とした農具類。
- ② 槽、桶等の容器類および匙。
- ③ 武器形木製品
- ④ 建築物、構造物の材および梯子など。

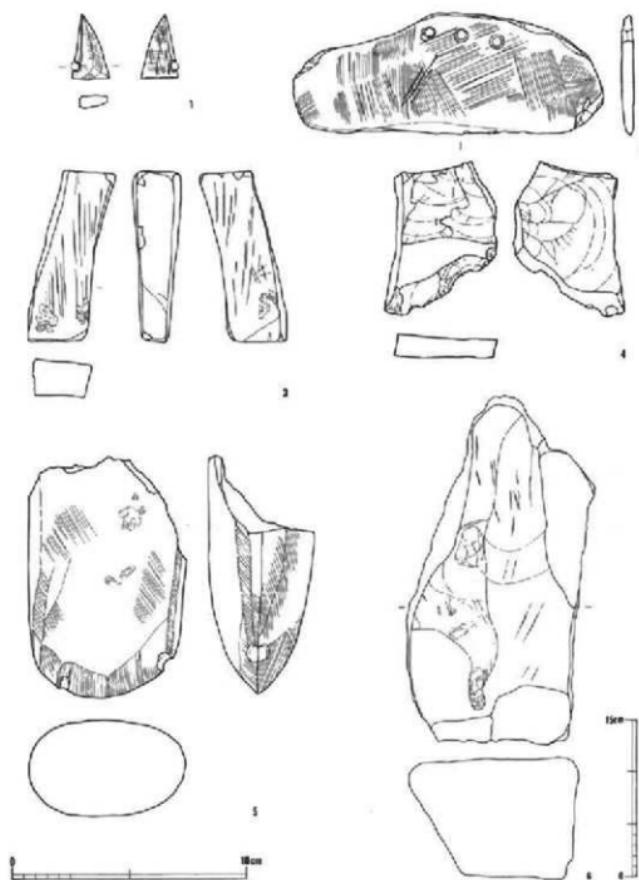
これらのうち、多数を占めるのは、④である。その主要な構成要素は、先述のとおりである。

上記①～④に属さない可能性のあるものとして、5、31があげられよう。5は横柵として記載しているが、紡織具の一種である可能性があろう。また31は、その形状から、ごく素朴な杼である可能性が考慮される。

石 器

上板井遺跡では、旧河道内の堆積層中から6点の石器が出土している。その内訳は石庖丁軸用の磨製石縫（？）1点、石庖丁1点、砥石2点、大型蛤刃石斧1点、二次加工のある剝片1点である。砥石1点が②層上面から出土しているのはかは、いずれも③層から出土しており、土器との対応からすれば、弥生時代中期後半に属するものと思われる。

第46図1は石庖丁軸用の磨製石縫（？）である。比較的良質な粘板岩を用い、両面は研磨によって仕上げられている。孔の一部をとどめている。石庖丁破損の後、破断面に研磨を施しさらに幅0.5mm、深さ0.2mmの溝を破断面の中央に切っている。破断面の研磨は、一端を尖らせる



第46図 旧河道出土の石器

ようにおこなわれているが、他の一端が折損しているため、再生のための研磨で意図された形態を推定するのは困難である。しかし鋭い尖端部を有することから、あえてあげるならば石鎚であろうか。長さ27mm、幅16mm、厚さ5mm。

2は、石庖丁である。両端にわずかに剥離による調整の痕跡をとどめている。刃部には使用によると思われる磨耗が、顯著に認められる。石材は、粘板岩である。長さ133mm、幅51mm、厚さ5mm。

3は、緻密な非晶質の安山岩製の二次加工のある剝片である。平坦な剥離面を打面として剥離された剝片の1側縁に、主として腹面側から二次加工を施して、ノッチ状の刃部を作り出している。刃部は比較的急斜度で、80度前後をはかることから、機能としてはスクレイパー的なものが考えられよう。剝片の下半分および1側縁は二次加工後に折損している。長さ61mm、幅42mm、厚さ9mm。

4は、流紋岩（？）製の大型始刃石斧である。基部側の約半分を折損しているが、その断面は、右図左面側から加わったものと思われる。刃部は、やや歪んだ半円形を呈し、使用によると思われる小剥離痕が数カ所に認められる。器面は丁寧な研磨によって仕上げられているが、敲打による調整痕をわずかにとどめている。長さ103mm、幅68mm、厚さ45mm。

5、6は砥石である。5のみがIV-2層上面からの出土である。

5は細粒のシルト質の石材を用い、その3面に砥面を設けたものである。1側縁は折損しているが、他の面の状況から、折損した1面にも砥面が設けられていたものであろう。上下両端も面取りを施して、形態が整えられている。各砥面には、引っ掛け傷状の使用痕が見られる。長さ72mm、幅24mm、厚さ20mm。

6は、細粒砂岩製の大型砥石である。砥面は1面のみで、やや波立ち状を呈している。形態を整える調整加工はほとんどおこなわれておらず、自然礫の比較的平坦な一面をそのまま使用したものであろう。長さ194mm、幅108mm、厚さ78mm。

出土土器観察表

柱穴46出土土器

遺物番号	器 形 分類	法 量 (cm) 口 径 高	形 種 の 特 徴	種 類 の 特 徴	備 考
1	瓦瓶底 C-I	(16.0) (13.5)	瓶底の周部より、口縁部は内側にわずかに屈曲させる。	外面 口縁部ヨコナギ→瓶底部ハケ (13.0cm) 内面 口縁部ヨコナギ→瓶底部ハケ (13.0cm)	外面 10YR7/2 内面 2.5YR7/2 粗砂含有

土坑2出土土器

遺物番号	器 形 分類	法 量 (cm) 口 径 高	形 種 の 特 徴	種 類 の 特 徴	備 考
2	壺 G2	(11.0) (19.7)	瓶底は幅く字形にして最も立ち上がり、 口縁部は内側気味に立ち上がる。	外面 制限著しく、調整不明。 内面 体部から瓶底への移行部エビオ リエ調節。	内外面 2.5YR6/8 半・粗砂含有
3	壺 C1	(13.0) (14.0)	瓶底は幅く字形に外反し、瓶底部上方 につまみ上げている。側変定を施す。	外面 壁にギザ模様の凹路 内面 瓶底へラクダリ	内外面 10YR5/2 粗砂含有 外表面3.5付着
4	壺	— (13.0)	—	—	—
5	壺 B1	(16.0) (19.1)	瓶底は多ヶ所底を帯びて「く」字形に外反 し、口縁部は上下に底膨らみ傾斜する。 瓶底には2箇所の横筋を施す。	外面 ヨコナギ	内外面 10YR5/2 粗砂含有 外表面大付着
6	壺 D	16.7 (16.2)	瓶底は幅く字形に外反し、瓶底部を削る もつ。	内面 壁底著しく調整不明	内外面 10YR6/3 粗砂・礫含有
7	壺 B1	— (13.4)	瓶底は幅く字形に外反し、瓶底部は上方 に底膨らみ、内傾する。	内面 壁底著しく調整不明	内外面 5YR7/6 粗砂・礫含有
8	高环 B2	— (12.0)	口縁部は大きく外反し、瓶底を丸くお きめる。	調整不明	内外面 5YR7/6 半砂含有

旧河道 ①層出土土器

遺物番号	器 形 分類	法 量 (cm) 口 径 高	形 種 の 特 徴	種 類 の 特 徴	備 考
9	壺 G2	(13.6) (26.4)	体部はやや膨らんだ倒卵形を呈し、瓶 底は斜状にはげ直線的に立ち上がる。 口縁部は外反し、瓶底部を丸くおさめる。	外面 口縁部ヨコナギ→瓶底・体部縫 合ガタ 内面 口縁部ヨコナギ→瓶ハケ (16.0cm) 瓶底ヨコナギ→瓶ハケ (16.0cm)。 体部・瓶底付近部底によろナギ(下→上)、体 部下手縫ウカジ。	内外面 2Y7/1 粗砂・礫含有
10	壺 G1	(11.1) (14.9)	なで肩の体部から瓶底は直線的に外傾 する。 口縁部は丸く気味に外さまる。 口縁部をもつ。注口部分迄エビオリエ の凹路。	外面 口縁一部瓶底縫ハケ(11.0cm)、体 部右上がり約45度キタキア 内面 瓶底縫ハケ(7.0cm)、瓶底縫ハケ (16.0cm)。 体部・瓶底付近部底の初期した 部分に横ウカジ。	外面 SYR8/1 内面 10YR3/3 中砂少量含有
11	壺 C2	(14.9) (13.6)	側張りの少ない体部は緩やかに外傾 する瓶底をもつ。口縁部は上下に壓 迫し、底をもつ。	外面 口縁瓶底縫ナギ、口縁部ヨコナギ。 瓶底部ヘラミキナギの痕跡。 内面 瓶底不定方向ナギ→口縁部ヨコ ナギ、体部・瓶底エビオリエ・体部縫 ハケリ。	内外面 7.5YR8/1 中砂含有
12	壺 C1	16.0 (17.5)	側張多少立直吹吸に立ち上がり、口縁 部は外反する。瓶底内部を削るもつ。	内面側張著しく調整不明	内外面 10YR8/2 粗砂・礫含有
13	壺 C1	12.6 (9.2)	張り出した体部から瓶底は緩やかに瓶 底に移行し、口縁部は外反する。瓶底は削 るもつ。	外面 制限著しく調整不明。 内面 制限によるナギ(下→左)。	内外面 5YR7/8 粗砂・礫含有

14	■ B2	11.4	17.2	体部最大径を中位よりやや上にもち、 頭部は前立位時に外反。	外観 頭部中→下位ハケの痕跡。後部 上位頭ハケ(5cm)→頭→口縫尾ヨコナ ダ。 内面 口縫尾ヨコナダ→横ハケ (6cm)、脇筋筋肉ハケ(5cm)。	外側面 2.5YR/1 中縫合有
15	■ D2	11.8	17.9	体部中位よりやや上位に最大径をも つ、口縫部はいくつ字形に外反し、頭部 を丸くおきめる。	外観 体部頭ハケ(5cm)→口縫尾ヨコナ ダ。 内面 口縫尾ヨコナダ→頭→体部上位 ヨビオサナ、体部上半ナナの痕跡。体 部下半筋肉ハケ(5cm)。	内面面 2.5YR/1 中縫合有 体部内面筋肉付着
16	■ F	127.0	16.01	大きくなり反する口縫部と頭部との間に 突き張状の痕跡をもつ、頭部は小さい。	外側 口縫部ハケ(5cm)→頭→ガ キ、体部ヨコナダ。 内面 口縫部ヨコナダ。	外側 2.5YR/2 内面 2.5YR/1 中縫一縫合有
17	■ D	15.6	122.59	体部最大径を中位にもつ、 口縫部はいくつ字形に扁曲する。	外観 体部頭ハケ(5cm)、口縫部ヨコナ ダ。 内面 体部下位筋肉ハケ(5cm)、中 位筋肉ハケ(5cm)、口縫尾ヨコナダ。	内面面 2.5YR/4 中縫一縫合有
18	■ C2	18.31	17.91	口縫部はいくつ字形に扁曲、頭部は 下方に若干膨脹し面をもつ。	外観 体部頭ハケ→板状工具による 頭部ヨコナダ。 内面 体部横ケリ。	外側面 2.5YR/2 内面 会員スス付着 筋肉合有
19	■ B1	184.4	155.51	体部最大径を中位にもつ、 頭部は丸く、口縫部は丸く、字形に扁曲す る。 口縫部は上方に試験し2条の側凹痕跡 が確認される。	外観 体部頭ハケ(5cm)→口縫部ヨ コナダ。 内面 体部下位筋肉ハケ(5cm)→上位筋 肉ハケ(5cm)→下位筋ケリ。 口縫尾ヨコナダ。	外側面 10187/3 内面筋肉合有 外表面スス付着
20	■ B1	186.51	186.01	体部最大径を中位にもつ、口縫部は いくつ字形に扁曲する。	外観 体部下位筋肉ハケ(5cm)→上位 筋肉ハケ(5cm)→口縫尾ヨコナダ。 内面 体部ヨコナダ。	外側面 10187/3 中縫合有 外表面筋肉中位スス付着
21	■ B2	17.2	132.21	口縫部は丸く、字形に扁曲し、頭部 は上方にまみ上げる。頭部は弱い頭 りが見られる。	外観 体部上位筋肉ハケ(5cm)→上位 筋肉ハケ(5cm)→口縫尾ヨコナダ。 内面 口縫部ヨコナダ、体部上位筋肉 ハケ(5cm)。	外側面 2.5YR/6 中縫合有 外表面筋肉中位スス付着
22	■ B2	114.81	05.01	口縫部は丸く扁曲し、再び丸みを帯び て斜上方に膨らむ。 4条の側凹痕跡を抜す。	外観 体部上位筋肉ハケ→筋肉ハケ (14cm)→頭→口縫尾ヨコナダ。 内面 体部上位筋肉ハケ(5cm)。	外側 2.5YR/1 内面 2.5YR/3 中縫一縫合有 外表面筋肉中位スス付着
23	■ B3	186.6	123.30	体部最大径を中位にもつ、口縫部は字形 で外反し、頭部を斜め上方にま み上げる。	外観 体部は板状工具による筋ナダ→ 頭部上位筋肉ハケ(5cm)→口縫尾ヨコナ ダ。 内面 体部中→下位筋肉ハケ(5cm)→ 頭部上位筋肉ハケ(5cm)→口縫尾ヨコナ ダ。	外側面 2.5YR/4 内面 全面にスス付 着筋肉合有
24	■ D	122.51	25.0	体部最大径を中位よりやや上にもち、 なで筋の外形である。口縫部は斜め上 位に扁曲する。	外観 多数→水洗後を以降筋肉剥離し 頭ハケの痕跡。口縫尾ヨコナダ。 内面 口縫部ヨコナダ、体部剥離不明。	外側 2.5YR/6 内面 2.5YR/1 中縫一縫合有 外表面中位スス付着
25	■ C2	12.6	9.1	体部は直角的に外側する。頭部と体部 の間は明確でない。 尻部の一方に穿刺で穿孔あり。	外観 低頭部上位ヨコナダ→ヨビオサ ナ、体部ハケ不明。 内面 体部上位筋肉ハケ(5cm)、中位筋 肉ハケ(5cm)、頭部横筋肉(5cm)。	外側 2.5YR/2 内面 2.5YR/3 中縫一縫合有 外表面中位スス付着
26	■ C2	18.9	10.0	やや突出した平底尖端の皮膚。体部は 内側実質に立ち上がる。 尻部の一方に片寄って穿孔あり。	外観 瘢状上溝による不定方向のナ カ。 内面 体部横筋肉によるナダ。尻部ヨビ オサナ。	外側面 10187/3 内面 2.5YR/4 中縫一縫合有 外表面中位、二次被膜を 穿孔する。
27	■ C2	187.20	11.4	後部は内側骨棘に立ち上がり、頭部は 丸く、口縫部。頭部の端は骨棘 ではない。 尻部中央に穿孔有り。	外観 体部は右上に骨棘のナカ。部 分的にナダ。 内面 体部は不定方向の骨棘によるナ カ。尻部はヨビオサナ。	外側 2.5YR/4 内面 2.5YR/3 中縫一縫合有
28	■ B	18.01	15.41	体部は内側実質に立ち上がり、口縫部 は直線的に立ち上がる。	外側 2.5YR/4 内面 2.5YR/3 中縫一縫合有	

29	体 E3	(9.6)	7.2	体部は内側に立ち上がり。口縁部は後く、字形に外反する。 口縁部外側に2条の倒門歯を施し、扉部は上に若干拡張する。	外側 体部下位傾ハケ(9/cm)。扉部ユビオサエ。 内側 体部縦ハケ(5/cm)→上位傾方向 倒状工具のナシ。口縁部ヨコナデ。	内外面 2.5YR8/2 中砂一粒砂含有
30	体 D	(83.6)	(9.3)	体部は下位に向かって立ち上がり。口縁部は内側に向かって立ち上がり。口縁部は前位に向かって立ち上がる。 口縁部5条の凹線を施す。 体部は前位の凹手の痕跡。	外側 体部にミガキの痕跡。 内側 調整不明。	外面 SYR8/8 内面 7.5YR8/2 中砂少量含有
31	体 A	—	(5.3)	口縁部は内側に立ち。 外側に凹線を施さない。	内側面調整不明。	外面 10YR7/2 内面 10YR7/4 細砂含有 精良
32	体 A	(30.6)	(3.9)	口縁部は内側に立ち上がり。口縁部は内側に内側に立ち。	口縁部内外面ヨコナデ。	内外面 10YR7/2 細砂含有 精良
33	体 B	(12.6)	(4.6)	体部は浅く内側に向かって立ち上がる。口縁部は若干の凹手をして立ち上がり。口縁部に2条の凹線が施す。	外側 体部上位横ミガキ→下位傾く 内面 口縁部ヨコナデ・体部横・斜 ミガキ。	内外面 10YR8/2 粗砂一粒砂含有
34	器台 B	—	(7.3)	穿孔有り。	削丸着しく調査不明。	内外面 5YR8/4 粗砂一粒砂含有
35	器台 B	—	(14.9)	—	外側 体部縦ハケ(上→下5/cm)。 内面 体部縦ハケ(7/cm)。	内外面 5YR7/4 粗砂一粒砂含有
36	器台 B	—	(7.5)	穿孔有り。	外側 体部ミカ→斜ミガキ 内面 粗砂ユビナデ	SYR8/2 粗砂一粒砂含有
37	器台 AZ	—	(36.5)	—	外側 体部横ミガキ。扉部ヨコナデ。 内面 体部縦リ目付の痕跡。下位横ミガキ。 粗砂横方向ヨコナデ。	SYR7/6 細砂多量含有
38	ミニチュア 土器	4.6	7.2	体部は大径を中位にもつ。口縁部は外反する。端部は丸くおさまる。 扉部に2穴、対の穿孔が二周並められる。	外側 体部縦ハケ(5/cm)→縦ミガキ 内面 体部ユビオサエ	内外面 10YR8/2 中一粒砂含有
39	ミニチュア 土器	4.3	7.9	体部は大径を中位よりも多く。なで肩を望する。頭部は大きく外反し。口縁部を丸くねらせる。 左端部は突出している。	外側 口縁部ヨコナデ。瓶底付丸スピ ナサエ。 内面 体部ユビオサエ。	内外面 5YR8/2 中一粒砂含有
40	ミニチュア 土器	—	(3.2)	体部は大径を中位よりも多く。なで肩を望する。瓶底は若干突出している。	外側 体部縦ハケの痕跡。 内面 体部横方向のユビナデ。	内外面 SYR7/6 中一粒砂含有 —末端瓶を受ける

旧 河 道 ②層出土土器

遺物番号	器 形 分類	法 長 (cm) 口 径 器 高	形 總 の 特 徴	種 類 の 特 徴	備 考
41	壺 B1	— (4.0)	口縁部は大きく外反し。瓶底付近では外 方へ窪く。瓶底は上へ若干の延張して きをもつ。表面には軽度引き剥がれがあり 、口縁部下部に光沢感がある。	外側 口縁部ヨコナデ→縦ハケ 内面 口縁部ヨコナデ	内外面 2.5YR8/2 中一粒砂含有
42	壺 B1	(17.0) (30.0)	瓶底は斜め上方に広がり上端で弧曲し て下方へ少し下垂。瓶底を内側へつまみ込 む。口縁部は外側に5条、口縁部下部に 3条以上の凹線が施され、その両 端部に一本ずつ横筋き剥がれ感がある。	外側 口縁部縦ハケ(7/cm)。 内面 口縁部ヨコナデ。口縁下部ナ ド調整	内外面 10YR7/2 中砂少量含有
43	壺	— (8.0)	大きく張り出した侈部。瓶底に断面三 角形の突起を張り付ける。瓶底上部に 管貫支が施されている。	外側 瓶部横ナデ。体部は縦ミガキ。 内面 瓶底ヨコナデ。瓶底に段々目 の痕跡を見める。	内外面 10YR7/3 粗砂多量含有
44	壺 G1	— (29.2)	侈部最大径を中位にもつ。なで肩の内 部から頭部は直線的に上へ立ち上がる。	外側 第一休部縦ハケ(8/cm)→縦ミガ キ。 内面 侈部上部横ハケ→ユビナデ。下 部ヨコナデ。	内外面 2.5YR7/2 中砂一粒砂含有 瓶底外側入材有

45	Ⅲ G1	(12.6)	28.8	体節最大径を中位にもち、なで前の体節から頭部は直線的に上方へ立ち上がる。口縫部は若干聞く。	内面 無一休部縫ハケ(板状工具の痕が残る)休部下位ハケタキ前脚。 外面 口縫部ヨコヨコハケ(5mm)。 休部上位スピオサエ、下位部スピナデ、 粘虫絨毛筋膜壁に残る。	内外面 2.5YR7/3 中位一離合有
46	Ⅲ G1	—	(8.5)	口縫部は直線的に上方へ立ち上がる。外縫部は平滑である。	外縫 ハケ調整の前脚。 内面 ヨコナデ。	内外面 2.5YR7/2 離合有
47	Ⅲ G4	(16.5)	(14.4)	頭部は斜め上方に直線的に傾く。口縫部は上方に直線的に傾く。外縫部は下方に直線的に傾く。外縫部は斜め上方に直線的に傾く。	外縫 頭部上半縫ハケ、下半縫ミギキ。 内面 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケの痕跡、各部縫ハケタキ。	内外面 2.5YR7/6 離合有
48	Ⅲ G4	15.9	(22.3)	体節最大径を中位にもち、なで前の体節から頭部は斜め上方に直線的に傾く。口縫部は斜め上方に直線的に傾いている。	外縫 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケの痕跡、各部縫ハケタキ。	内外面 2.5YR7/5 中位一離合有
49	Ⅲ G4	13.8	(16.5)	大さく前へ突き出した体節から頭部は斜め上方に直線的に傾く。	外縫 1休部前ハケ(7mm)。口縫部ヨコナデ。 内面 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケの痕跡、各部縫ハケタキ。	内外面 2.5YR7/2 中位合有
50	Ⅲ G3	11.4	36.2	体節最大径を中位にもち、なで前の体節から頭部は斜め上方に直線的に傾く。頭部は下方に若干膨張気味である。	外縫 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケ(11mm)→休部不定形前ハケ。 内面 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケ(11mm)、休部縫ナデ。	内外面 7.5YR6/4-2.5YR8/2 内面 2.5YR8/2 中位合有
51	Ⅲ G3	(12.5)	(17.1)	体節最大径を中位にもち、なで前の体節から頭部は斜め上方に直線的に傾く。頭部外側に1条の沈れがある。	外縫 口縫部ヨコナデ、第一休部縫ハケ(7mm)→第一休部ユビナデ。頭部上位見掛けナデ。 内面 口縫部ヨコナデ、休部横・斜ハケナデ。	内外面 7.5YR8/4 中位一離合有
52	Ⅲ G3	13.6	(9.4)	頭部は直線的で対称である。口縫部は後方に多く残る。	外縫 頭部縫ハケ→口縫部ヨコナデ。 内面 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケ。	内外面 3.5YR8/1 中位一離合有
53	Ⅲ G3	15.9	25.0	休部最大径を休部の位より上方にもち、なで前の体節は上方に直線的に立ち上がり。頭部は下方に直線的に傾いてある。	外縫 体節右上よりのハタキタキハケメ(5mm)。 内面 口縫部横ハケ(10mm)、休部上位見掛けナデ。第一休部後一横筋ナデ。	内外面 2.5YR7/3.5 離合有
54	Ⅲ G3	(13.6)	(9.7)	頭部は直線的で対称である。口縫部は後方に多く残る。頭部は下方に多く残る。	外縫 口縫部ヨコナデ、頭部縫ハケおよび前・後脚の筋跡を含める。 内面 ユビオサエ→不定形回りナデ。	内外面 2.5YR7/4 中位一離合有
55	Ⅲ G3	(12.0)	(13.0)	なで前の骨格から頭部は外側し口縫部は斜め上方に傾く。頭部は対称的で対称である。	外縫 口縫部ヨコナデ、休部縫ハケ(10mm)→第一休部後一横筋ナデ。 内面 口縫部横ハケとヨキ。頭部下位ユビオサエ、休部外めハタキナデ。	内外面 2.5YR8/2 中位一離合有
56	Ⅲ G3	12.1	(19.6)	偏平児特徴の体形。口縫一部頭部より外反し頭部は丸くなる。	外縫 第一休部縫ハケ(6mm)→ヨコナデ、休部上位のハタキ→休部ハケ(10mm)。 内面 頭部縫ハケ。休部縫ナデ。	内外面 10YR7/2 離合有
57	Ⅲ G3	10.9	(8.4)	口縫部外上方に直線的に立ち上がる。	外縫 休部縫ハケ→口縫部ヨコナデ、休部上位ハケタキナデ。 内面 口縫部ヨコナデ、休部縫ハケ。	内外面 2.5YR7/2 中位一離合有
58	Ⅲ G3	12.2	28.4	体節最大径を中位より上にもち、なで前の体節は頭部より最も早く立ち上がり、口縫部はさらに外側する。頭部はさらに外側する。	外縫 口縫部ヨコナデ→頭部一休部縫ハケ→第一横筋ナデ。 内面 口縫部ヨコナデ休部縫ハケ(5mm)、頭部縫ハケナデ、休部縫ナデ→休部上位ハケ→休部縫ナデ。	内外面 2.5YR7/3 中位一離合有 頭部縫にメスA付着 休部縫にメスB付着 休部縫にヘラ筋引き付着を有す。
59	Ⅲ G4	8.2	16.9	休部最大径を上位にもち、なで前の体節、頭部より外反氣味に立ち上がり、口縫部と頭部の間に腰をもつ。	外縫 休部縫ハケ(5mm)→縱工ガキ→頭部縫ナデ。 内面 口縫部ヨコナデ。頭部縫ハケとヨキ。頭部縫ハケとヨキ。休部縫ナデ、休部縫ハケ(7mm)。	内外面 2.5YR7/3 内面 2.5YR7/1 離合有
60	Ⅲ G2	12.8	15.2	休部最大径を中位にもち、なで前の体節、頭部は直線的で対称である。頭部は下方に立ち上がる。	外面 前脚のため調節不良感。休部下位右よりハタキ→頭部タキ。 内面 3.5YR8/2 中位一離合有 休部中位一休部ユビオサエ付着	内外面 3.5YR8/2 中位一離合有 休部中位一休部ユビオサエ付着

51	黒 II	—	(23.9)	体部最大径を半径に6つ、なで目の合、頭部は幅つまんだ四が2ヶ所で封である。	外側 伸展下部右上がりタキ。上半 頭部ハケの前部 (5cm)。	内側面 10YR7/3 粗砂～纏多量含有
52	黒 II	8.8	(14.1)	大きさ前の張り出した体部。頭部は直 線的に外方に開き、口縫部に重なる。基部は尖り方で、外側には一束の皮膜 文字がある。	外側 第一側縫裂：ガキ。 内側 頭部折り目(左方向)を残す。 体部エナメル。	内側面 SVR7/2. 中～纏多量含有
53	黒	—	(3.4)	脚部は粗さがあり頭部を丸くおむ る。 体部は斜め上方に大きく開く。 頭部中央に2箇所の摩擦紋がある。	外側 伸展一側縫裂：ガキ。 内側 体部底ハケ (5cm)を施し、頭部 はユビサニ。 四辺折り目(右側)。	外側 2.5Y7/3 内側 SV7/1 細砂多量含有
54	黒 II	11.8	(19.4)	頭部は丸く直線の立ち上がり、側面 側面して外方にひらきる。 外側5条の摩擦紋がある。	外側 物語縫：ガキ。 内側 口縫部横：ガキ。 頭部底ハケ。 敷り目(左方向)を残す。	外側 2.5Y8/2. 内側 黒 細砂含有
55	黒 II	12.0	19.4	簡単な体部から長く縫やかに聞く頭部 をもつ。 種皮には2束の摩擦紋がある。	外側 密・体部上半端：オキ→下部縫 うぎ。 口縫部横：ガキ。 内側 口縫部横：オキ。 頭部縫：オキ。 体部ユビサニ。 ユビシテ。	内側面 2.5Y8/2 粗砂
56	黒 II	(12.4)	23.4	体部最大径を上位にもち、肩が張って いる。 頭部は垂直に立ち上がり、口縫部 は外方に開く。	外側 口縫部ヨコナデ。 頭・体部縫ハ ケ。 内側 口縫部ヨコナデ。 体部中位ユビ オリユースー下部横：グゼリ。 下位ハケの 截歯を残す。	内側面 5Y8/3 粗砂～纏含有
57	黒 AII	(12.3)	7.7	全で5条の体部から頭部は垂直気味に、上 立ち上がり、外方へ開く。	外側 頭部縫ハケ→口縫部ヨコナデ。 頭部は「ノ」字形に2束の摩擦紋あり。 内側 口縫部ヨコナデ。 体部上位ユビ ナデ。	外側 2.5Y7/2 内側 10YR7/2 細砂含有 口縫部入式付着
58	黒 II	17.2	16.5	頭部42度直に立ち上がり。 口縫部は斜 面の上方に開く。	外側 頭部縫ハテミタキ。 口縫・頭部 縫ハケ。 内側 頭部縫ナダーハケ。 体部上位ユビ オリユースー横ハケ。	外側 5Y8/6 内側 10YR3/1 細砂含有
59	黒?	—	—	肥厚しながら直立する口縫部をもち、外面 上下2段の糸紋がある。 頭部、成形文を施す。	内側 口縫部ヨコナデ。 頭部ナダの痕 面を残す。	内側面 2.5Y7/2 細砂含有 肌の可塑性あり
70	黒 E	13.0	(15.1)	体部最大径を上位にもち、球形の頭部 をもつ。 口縫部は上方に斜く外反して 立ち上がり。	外側 体部上位縫ハケ (5cm)。 中位縫 ハケ。 下位縫ハケ。 口縫部ヨコナデ。 内側 体部上位：「横」ハケと軽いタメと軽いタメの摩擦紋あり。 口縫部ヨコナデ。	外側 5Y8/2 内側 2.5Y8/2 外側体部上位スス付着
71	黒 DII	(13.5)	23.9	体部最大径を中央にもち、肩が張った 体部。 頭部は「C」字形に外反する。 口縫部は下 方に位置し、面をなす。	外側 口縫部ヨコナデ。 体部縫ハケ (5cm)。 内側 伸展下部手縫ハケ (5cm)。 頭部ユ ビサニ。 体部上位ユビサニ以外はユビシテ。 口縫部ヨコナデ。	外側面 10YR7/3 粗砂～纏含有 内側 縫ハケ
72	黒	—	(14.0)	最大径を体部中位より上にもつ。 頭部 は平底で中央に凹みがある。	外側 伸展縫ハケ。 内側 縫ハケ。	外側面 10YR8/3 細砂含有
73	黒 BII	13.5	(11.9)	体部最大径を上位にもつ。 肩が張った 体部。 頭部は「C」字形に外反し、口縫部は下 方に位置し、面をなす。	外側 口縫部ヨコナデ。 体部縫ハケの前 部を残す。 内側 伸展下部手縫ハケ (5cm)。 頭部ユ ビサニ。 体部上位ユビサニ以外はユビシテ。 口縫部ヨコナデ。	外側 2.5Y5/6 内側 2.5Y3/1 中～纏多量含有
74	黒 BII	11.9	(9.0)	外死する口縫部をもち、頭部は上 位に膨張する。 口縫部外縫に2条の側縫跡紋が残る。	外側 1.5倍～伸展上位ヨコナデ。 体部 縫ハケ (5cm)。 内側 口縫部ヨコナデ。 体部縫ハケ (5cm)。	外側 2.5Y8/4 内側 10YR7/3 細砂含有 外側体部にスス付着
75	黒 CII	(15.5)	(16.4)	体部最大径を上位にもつ。 肩が張った 体部。 口縫部は側ぐ外反し、頭部には別名 日文が施される。	外側 頭部上上がりのタキキ→縫ハケ (5cm)→体部中位縫ナデ。 内側 口縫部ヨビハケ。 頭部縫ハケ→強 い縫ナデ(縫り)?。	内側 10YR7/2 外側スス付着 細砂含有
76	黒 CII	(15.0)	(15.2)	体部最大径を上位にもち、肩が張った 体部。 口縫部は側ぐ外反し、頭部には上 方に傾斜する。	外側 口縫・伸展右上がりのタキキ→ 体部下上位縫ハケ (5cm)。 内側 口縫部ヨコナデ。 体部上半縫ハ ケカズリ。 下位縫ケツリ。	外側面 2.5Y8/4 中～纏多量含有 外側体部スス付着

77	黒 C1	16.7	(17.5)	体部上位に最大径をもつ小型の葉。口緑部は内側ながら斜め上方立ち上がり。葉部は若干上下方向に屈曲する。	外腹 口緑部ヨコナデ。頭部横ハケト 体部右上がりヨタキ。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部上半横ヘ ラケズリ。→下半斜めナダ。	内臓面 7.5YR7/3 根鈎一體多量含有
78	黒 F	(16.7)	(7.3)	口緑部は複数の「く」字形に内反し、葉面をつくる。	外腹 口緑部ヨコナデ。頭部横ハケト 内腹 口緑部ヨコナデ。体部上半横ヘ ラケズリ。→下半斜めナダ。	内臓面 7.5YR7/4 根鈎含む 外腹全体スズ付着
79	黒 C2	(14.8)	(12.7)	口緑部は複数の「く」字形に内反し、葉面をつくり、下方に若干屈曲。	外腹 口緑部ヨコナデ。体部右上 ヨタキのヨタキ。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部上位 スビオナダ。→中・下半斜めヘラケズリ。	内臓面 10YR7/3 中一體多量含有 外腹口埋一体多量スズ付着
80	黒 G2	16.2	(14.8)	体部前表面を上方にもつ、長い幅のした体部。口緑部は直角的に外傾し、葉面は上下に屈曲する。	外腹 口緑部ヨコナデ。体部斜めハケ (10/cm)。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部横ヘラケ ズリ。	内臓面 7.5YR7/4 根鈎一體多量含有
81	黒 C2	(16.2)	(12.2)	体部最大径を中位よりやや上方にもつ。口緑部は「く」字形に大きく外反す。口緑部は上方に屈曲する。	外腹 口緑部ヨコナデ。体部下半横ハ ケ(10/cm)。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部斜めヘラ ケズリ。	内臓面 3YR7/6 根鈎一體多量含有 外腹全体スズ付着
82	黒 B2	(14.4)	(8.3)	体部最大径を上位にもつ。口緑部は「く」字形に直角的に外傾し、上方に立ち上がり。	外腹 境域のため調整不明顯。体部斜 めハケ(5cm)の直角。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部横ヘラケ ズリ。	内臓面 7.5YR6/4 根鈎多量含有 外腹全体スズ付着
83	黒 B2	(16.1)	(6.0)	頭部は短く外反し、梗を作って前の上方に立ち上がる。 口緑部は上方に立ち上がる。	外腹 口緑部ヨコナデ。体部は短ハケ (3cm)。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部斜めハケ	内臓面 10YR7/3 根鈎一體多量含有
84	黒 B2	(22.0)	(3.7)	口緑部は直角的に外反し、葉面は上方に立ち上げる。 口緑部は上方に立ち上げる。	外腹 全体に直角強く調節不能顯。 内腹 ハナの成長部。 内腹 調節のため調節不明顯。	内臓面 10YR5/4 根鈎一體多量含有
85	黒 B2	14.0	15.3	体部最大径の位置にもつ。口緑部は「く」字形に強く屈曲し、梗を作つて上方に立ち上がる。 口緑部は上方に立ち上がる。	外腹 体部横ハケ(7cm)。 内腹 参照上位横ヘラケズリ→頭ヘラ ケズリ。	外由 10YR2/1 内腹 10YR4/1 中一體多量含有 外腹全体・内腹体部下 位タケルス付着
86	黒 B2	17.0	(18.0)	体部最大径を中位よりも上にもち。口緑部は「く」字形に内反し、梗を作つて上方に立ち上がる。	外腹 体部斜めハケ(8cm)→上位ヨコ ナダ。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部上位ヘラ ケズリ。	内臓面 3YR7/1 根鈎一體多量含有
87	黒 F	(16.3)	(9.5)	体部最大径を上位にもつ。口緑部は大きくて外反して上方に屈曲する。	外腹 体部横ハケ(10cm)→口緑部ヨ コナダ。 内腹 体部横ケズリ→口緑部ヨコナデ	内臓面 10YR6/4 根鈎一體多量含有 外腹全面にスズ付着
88	黒 C2	(12.2)	(20.2)	体部最大径を中位にもつ。長い幅のある口緑部は「く」字形に外反する。口緑部は上方に立ち上がり。	外腹 体部横ヨコナダ。体部横 ヘラケズリ。 内腹 一體部横ハケ→体部横ヘラ ケズリ。	内臓面 10YR7/4 根鈎一體多量含有 外腹全面にスズ付着
89	黒 D	20.2	(12.3)	口緑部は複数の「く」字形に屈曲する。 口緑部は上方に屈曲する。	外腹 上がりのヨタキ→体部上位横 ハケ(10cm)→口緑部ヨコナダ。 内腹 体部上位ヘビオサエ・横ハケ ヘラケズリ。 内腹 緩和合併跡あり。	内臓面 10YR8/3 根鈎一體多量含有
90	黒 F	(22.3)	(19.2)	口緑部は大きく外反し、葉面は上方に屈曲する。	外腹 口緑部ヨコナダ。→横ハケ (10cm)。体部横ハケ。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部横ヘラ ケズリ。	内臓面 10YR8/2 根鈎一體多量含有
91	黒 E	13.2	(19.5)	体部最大径を上位にもつ。口緑部は斜め上方に屈曲的に立ち上がり、葉面を丸くおさめる。	外腹 口緑部ヨコナデ。体部は横ハケ (10cm)。 内腹 滞域のため調整不明顯。体部下 半横ヘラケズリ。 内腹 緩和合併跡あり。	内臓面 2.5YR8/2 根鈎一體多量含有
92	黒 A	(26.0)	(9.3)	口緑部は複数の「く」字形に強く屈曲する。 口緑部は上方に屈曲する。 口緑部は丸み立が強される。	外腹 口緑部ヨコナダ。→頭・側部横 ハケ(4cm)。 内腹 口緑部ヨコナデ。体部斜めハケ (10cm)。	内臓面 10YR7/3 中一體多量含有

93	黒 A	(21.1)	(11.5)	口縫部は腹部から斜め上方に脇外反し、縫部は上下に抵抗する。	外側 全体にススが付着し調整不順。 口縫部にヨコナナ。 内面 各部板状工具による織ナギ(上→下)→口縫部ヨコナナ。	外側面 SVR3/1 内面 SVR7/2 粗糸-織多量含有 外筋スス付着
94	黒 C2	(16.8)	11.9	平底の底面から体部は斜め上方に脇外方に開く。直筋に円孔を埋め。	外側 略部ヨコナギ→縫いヶなしは縫ナギ 内面 各部下手ハラケメリ。上手ハラケ(0.1/cm)。	内外側面 JOYR7/3 粗糸多量含有
95	黒 C1	(15.3)	12.6	丸底気泡の底部から体部は若干内壁気泡に斜め上方に開く。縫部は平底。直筋に円孔を埋め。	外側 略部ヨコナギ 内面 斜筋材に縫いヶなし。体部縫いヶなし。	内外側面 SVR3/4 粗糸多量含有
96	黒 C1	(11.0)	(12.9)	体部は内壁気泡に斜め上方に開く。縫部はよくおこめていい。	外側 体部縫いヶナガ(5/m, 8/cm) 内面 体部上部横ハケ(5/cm)。体部中→下位端ヘタキズリ(上→下)。	外側面 2.SVR6/6 内面 SVR7/6 粗糸多量含有
97	黒 F1	(9.22)	8.9	突出した平底の底部から、体部は内壁気泡しながら斜め上方に開く。口縫は肥厚しながら縫いヶなしも上る。	外側 口縫→底部にかけてユビオサキ 内面 口縫→体部にかけてエオオサキ+ユビオサキ(上→下)。	内外側面 7.5VR8/2 粗糸-織含有
98	黒 F1	(16.0)	7.0	突出気泡の平底から体部は内壁気泡に斜め上方に開く。口縫部は丸くおさめる。	外側 体部縫いヶナガ(7/cm)→側→底部縫いヶなし。口縫部ヨコナナ。 内面 体部縫いヶナガ(7/cm), 下半筋:ガキ。底部縫いヶなし。	外側面 SV7/1 内面 10YR3/1 粗糸-織少量含有
99	黒 F1	16.1	6.0	平底の底面から体部は内壁気泡に斜め上方に開く。口縫部は丸くおさめる。	外側 略部は成形のため調整不順。底部取リゲタキズリ(1)。 内面 口縫一部横ハケ(3/cm), 底筋1ガキ。	内外側面 10YR2/1 粗糸含有
100	黒 —	(8.7)	突出気泡の平底から内側して斜め上方に立ち上がる。	外側 体一部縫いヶガキ。 内面 体部縫いヶガキ。 粘土練習面を認め。	内外側面 Z.SVR2/3 粗糸含有	
101	黒 D	(12.2)	(6.8)	体部は内壁気泡に斜め上方に開き、体部中空で内側して立ち上がる。口縫部は丸くおさめる。	外側 織成のため調整不順。1ガキ及びナナの前筋を認める。 内面 織成のため調整不順。1ガキの後筋を找める。	内外側面 7.5VR8/3 粗糸-織含有
102	黒 D	11.2	7.7	突出した前部から体部は内壁気泡に斜め上方に開き、中空で内側して立ち上がる。口縫部は丸くおさめる。	外側 口縫一部横上段。底部縫いヶガキ 内面 体部下縫いヶガキ。	内外側面 SVR6/5 粗糸-織含有
103	黒 C2	16.0	(7.0)	体部は内壁気泡に立ち上がり、口縫部は外反する。口縫部は上下に若干重ねして立ち上がる。	外側 口縫部ヨコナナ。→側1ガキ。 内面 体部下縫いヶガキ。	内外側面 7.5VR2/3 粗糸-織含有
104	黒 F2	11.0	6.0	低い脚部から斜め上方に内壁気泡に体部が開く。口縫部は尖っている。粘土練習面を認す。	外側 体部ユビオサキ+ナタデココナギ。 内面 体部ヨコナナ。→側1ガキ。 内面 口縫一部上部ナタデココナギ。下半筋1ガキ。 内面 口縫一部上部子縫いヶガキ。下半筋1ガキ。	外側面 10YR8/2 内面 10YR6/6 中-底筋多量含有
105	黒 —	(3.2)	脚部の織目。 筋部に竹筋が施される。	外側 口縫部ヨコナギ(0.5/cm)。 内面 体部ヨコナギの抵触を找す。脚部ユビオサキ。	内外側面 SVR7/4 粗糸-織含有	
106	黒 E2	(12.0)	7.6	低い脚部から、体部は内壁して斜め上方に開く。口縫部は外反し、袖部を上方にまん上げる。	外側 体部ヨコナギ。下半筋1ガキ。 内面 腋2.5V8/2 内面 口縫ヨコナギ。体部上半ナギ。下半筋1ガキ。	内外側面 SVR7/4 粗糸-織含有
107	黒 F2	13.7	9.0	低い脚部から斜め上方に内壁気泡に体部が開く。口縫部は尖っている。	外側 体部不定方向のナギ。脚部ヨコナギ。 内面 肩・横エビナギ。→口縫部付近ヨコナギ。	外側面 2.SVR3/2 内面 2.3V5/2 粗糸含有
108	黒 —	(34.7)	最大径を体部中央位にもち、口縫部は「△」形に外反する。口縫部は下方に抵抗する。脚部をもつ。	外側 口縫一部横ヨコナギ。体部縫いヶナガ(0.5/cm)。足1ナギ。 内面 口縫部ヨコナギ。体部は縫ハケ(0.05)→不定方向のナギ。	内外側面 2.5VR6/2 粗糸-織含有 二次完成を受ける	
109	高 A	—	(3.2)	水平にぐるり巻きすローリング部をもつ。口縫部は4条の胸門縫を施した後、3本一組の腰羽根を施す。	外側 体部縫いヶナギ 内面 ヨコナギ。	内外側面 10YR5/2 粗糸含有 95面11尾糸入付着

110	高坏 III	[26.5]	15.91	直線的に内側する後頭部の外部より口 縫部は強く外反し、縫部は内外方に肥 厚する。	外周：外縫とガキの痕跡。 内面：口縫部ヨコナギ。→縫とガキ。 筋膜層：ガキ。	内外面 SYR7/1 筋筋一體含有
111	高坏 II	[21.0]	13.91	直線的に内側する後頭部の外部より口 縫部は強く外反し、縫部は丸くひき まる。	外周：口縫部ヨコナギ。→縫とガキ。 筋膜層：ガキ。 内面：筋膜層とガキ→縫とガキ。	内外面 IOYB7/2 筋筋一體含有
112	高坏 II	[26.4]	19.5	直線的に内側する後頭部の外部より口 縫部は強く外反し、縫部は丸くひき まる。 縫部は下に口縫をもつ。	外周：口縫部ヘラミガキ。体部・脚 縫部ヘリガキ。 内面：口縫部ヨコナギ。体部縫ヘ リミガキ。筋膜層ヨコナギ。 筋膜層は複数ヶ所(17mm)。	内外面 SYR7/4 筋筋含有
113	高坏 C1	[21.0]	17.31	浅い壇状の体部から口縫部が外反した 後、縫部は常に上方に立ち上がる。 縫部外縫に3条の筋肉糸をもつ。	外周：口縫と体部縫ヘリガキ。 内面：口縫・体部縫ヘリガキ。体部 下縫ヘリガキ。	内外面 SYR6/8 筋筋一體含有
114	高坏 C1	[27.1]	22.8	浅い壇状の体部から口縫部が外反した 後、縫部は常に上方に立ち上がる。 口縫部外縫に3条の筋肉糸をもつ。 縫部は中空の形状がありうる縫部は下 に4個の円孔を持つ。縫部下 に4個の円孔を持つ。	外周：体部上縫とヘリガキ。下縫と 筋膜層ヘリガキ。 内面：口縫部ヨコナギ。体部上縫ヘ リガキ。下縫ヘリガキ。筋膜層ヨコナギ。	内外面 2.SYR8/2 筋筋一體含有
115	高坏 C2	[26.4]	17.7	浅い壇状の体部から口縫部が外反した 後、縫部は常に上方に立ち上がる。 縫部は常に上方に立ち上がる。 口縫部外縫に3条の筋肉糸をもつ。 縫部は中空の形状がありうる縫部は下 に4個の円孔を持つ。	外周：口縫部横ヘリガキ。体部縫ヘ リガキ・縫ヘリガキ。筋膜層ヘリ ガキ。筋膜層ヘリミガキ。 内面：縫ナゲ・縫ナゲ。筋部ヨコハ ケ(6mm)。筋膜層ヨコハケ(6mm)。	内外面 IOYB7/1 筋筋一體含有
116	高坏	—	(11.6)	長い壇状の体部から、縫に段を作り て、口縫部は斜め上方に外反し、縫部 はさらに斜め上方に立ち上がる。 縫部外縫に5条の筋肉糸をもつ。 縫部は中空の形状がありうる縫部は下 に4個の円孔を持つ。	外周：筋膜層ヘリミガキ。筋膜層ハ タ→縫ヘリガキ。筋膜層ヨコナギ。 内面：筋膜層ヨコナギ。	内外面 10YR7/3 内面 7.5YR7/4 筋筋一體含有
117	高坏	—	(7.45)	縫部は中空の形状がありうる縫部は 中空の形状に2条の筋肉糸をもつ。 縫部には円孔が4ヶ所ある。	外周：縫とガキ。 内面：筋膜層ハタ・ナゲ異質。	内外面 SYR6/6 内外面 7.5YR7/1 筋筋一體含有
118	腰台 B	—	(11.3)	縫部は常に上に立たれられる。	外周：縫ヘリガキ。 内面：受・外縫部ヘリミガキの痕跡。	内外面 7.5YR8/2 筋筋一體含有
119	腰台 B	—	(16.2)	大きく外方に開く受部に対して、常に の小さい張り感がありうる縫部。縫部は上 下に張り、縫部は凹む。 筋部は筋膜方向に3個一連の円孔をもつ。 筋膜層は2箇所で縫をもつ。	外周：縫部縫ヘリケズリ。 内面：縫部縫ヘリケズリ。筋部は筋 目結合筋膜を認む。	内外面 7.5YR7/2 筋筋一體含有
120	腰台 A1	—	(8.9)	外方に開く受部。縫部は筋膜がり。 筋膜層は筋膜から筋膜へ2次に開き、 筋膜は外方に張り筋膜をなす。	外周：縫ヘリミガキ。 内面：受部筋膜の筋膜を残す。	内外面 7.5YR8/3 筋筋一體含有
121	腰台 A1	—	(15.8)	筋膜の筋膜から筋膜へ2次に開き、 筋膜は外方に張り筋膜をなす。 筋膜層は筋膜から筋膜へ2次に開き、 筋膜は外方に張り筋膜をなす。 筋膜層は筋膜から筋膜へ2次に開き、 筋膜は外方に張り筋膜をなす。 筋膜層は筋膜から筋膜へ2次に開き、 筋膜は外方に張り筋膜をなす。	外周：受・柱状筋膜ハケ(13mm)。筋 膜層ヘリミガキ。 内面：受筋膜ハケ(13mm)。筋膜ヨコ ナギ。柱状筋膜ヨコナギを認む。	内外面 7.5YR8/2 筋筋少量含有

旧 河 道 ③層出土土器

遺物番号	部 形 分 類	法 全 長 (cm)	口 縫 部 厚 (mm)	形 独 の 特 徴	種 法 の 特 徴	備 考
122	Ⅱ C1	(10.8)	(9.2)	扁平状に立ち上がる縫部をもつ。外方 へ廣く口縫部。	外周：口縫・体部ヨコナギ。体部縫ハ タ 内面：筋膜ヨコナギ。 筋膜層合板跡で筋膜に残す。	内外面 2.SYR7/6 筋筋一體含有
123	Ⅱ B1	(14.2)	(D.0)	扁平状に立ち上がる縫部をもつ。本方に 外方に外反する口縫部。口縫部は下方 に膨張する。	外周：口縫部ヨコナギ。筋部縫ヘリミ ガキ。 内面：口縫部ヨコナギ→縫ヘリミガキ →筋膜ヨコナギ。	内外面 SYR7/6 筋筋含有

124	審 A1	20.2	(6.9)	口縁一部にかけて斜め上方に立ち上がり、裏面は上方に弧状。 口縁部に「V」字形の内縫文を斜め立ちし、頭部には斜め凹縫文を斜め立ちし。 口縁部に1列の内孔が穿たれている。	内外面 縫痕著しく質量不明。 外面 頭部に縫合ハケの痕跡。	内外面 10YR7/4 内面 10YR3/1 縫合有
125	審 A1	21.31	(5.7)	口縁は大きく外反する。頭部は上下に弧状。 口縁部に「V」字形の内縫文を斜め立ちし、5本一列の縫合ハケ、凹形浮文を斜め立ちし。 口縁部内側に2列の縫合浮文を施す。	内外面 縫痕著しく質量不明。	内外面 10YR7/2 縫合・縫合多量有
126	審 A1	22.61	(18.10)	横斗状に立ち上がる頭部から、下方に大きく外側に弧状。 頭部は上下に弧状。 口縁部は頭部に縫合ハケを施し、凹形浮文を斜め立ちする。 頭部には豊胸のない凹縫文がある。	外面 口縁部ヨコナギ。頭部ナギ。 内面 口縁部ヨコナギ。	内外面 2.5YD2/2 縫合・縫合多量有
127	審 B	24.21	(8.3)	口縁部は裏面の上方に直線的に立ち上がる。 頭部は内側に弧状する。 口縁部内側に3列の凹縫文を施す。	外面 口縁部ヨコナギ。頭部縫ハケ→ 縫ナギ 内面 縫痕不定方向ナギ→口縫ヨコナギ。	内外面 10YR7/2 縫合・縫合有
128	審 B1	18.20	(5.22)	口縁部は上端で2や内側にするが、ほぼ直立して立ち上がる。 口縁部内側に、7条の凹縫文を施す。	外面 口縁部ヨコナギ。 内面 口縁→縫跡縫ハケ→ヨコナギ。	内外面 10YR8/2 中筋有
129	審 G4	22.4	25.0	最大径を体部半径に5分の2で算出する。頭部はほぼ直立して立ち上がる。口縁部は外反し、頭部は直立する。	外面 体部右上がりのカタキ。縫部ハケ(10cm)。口縫・豊胸上辺ヨコナギ 内面 体部下平版ハケ(10cm)→縫ハケ(10cm)。体部上ナギナギ。縫部縫ハケ(10cm・6cm)→口縫ヨコナギ。	内外面 10YR7/2 縫合・縫合有 二次焼失を受けた。
130	審 G3	17.3	20.4	最大径を体部半径に5分の2で算出する。頭部は左側を主張するが、ほぼ直立して立ち上がる。口縫部は斜め上方に斜め立ちする。 口縫部内側に3列の縫合浮文を施す。	外面 体部右上がりのカタキ。加・体部上平版ハケ(10cm)。口縫ヨコナギ 内面 体部下平版ハケ(10cm)。上一中筋斜ハケ(6cm)。縫部ヨコナギ。粘土焼付合模跡が頭部に残る。	内外面 2.5YD2/3 縫合・縫合多量有
131	審 B3	12.5	(13.5)	複球形の体部から直立気味に立ち上がる頭部へ繋ぎ。口縫部は斜め上方に立ち上がる。 口縫部内側に3列の縫合浮文を施す。	外面 口縫→縫跡ヨコナギ。体縫縫ハケ 内面 口縫→縫跡ヨコナギ。体部スピオサエ。粘土焼付合模跡を認める。	内外面 2.5YR8/1 縫合有
132	審 C2	14.32	(6.0)	口縫部は「V」字形に外反し、頭部は下方に弧状して立ちなる。	外面 口縫部ヨコナギ。体縫縫ハケ。粘土焼付合模跡明瞭。	内外面 2.5YR8/3 縫合有
133	審 D	15.39	(16.0)	最大径を体部半径に5分の2で算出する。頭部から、口縫部は「V」字形に複く屈曲する。	外面 体部カタキ→縫ハケ(10cm)。 内面 口縫部ヨコナギ。体部上平版ハケアゲリ。下部縫ヘリナギ。	内外面 2YR7/2 縫合・縫合多量有 外表面全焼スカリ
134	審 B2	11.32	22.5	最大径を体部半径より上にもつ。口縫部は直ぐ「V」字形に屈曲し、頭部は上方に弧状する。	外面 体部縫ハケ(6cm)。口縫ヨコナギ 内面 体部上位版ハケ。体縫縫ヘリケアゲリ。	内外面 5YR8/3.5 内外面 SYR7/1 縫合・縫合多量有 外表面全焼タール付着
135	鉢 P1	(7.9)	(4.8)	体部は内側して斜め上方に立ち上がり、口縫部は直ぐ直立する。口縫部内側は突っ張っている。	外面 口縫ヨコナギ。体縫縫ヘリカタキ。 内面 体縫縫ヨコナギ。	内外面 10YR7/2 中筋有
136	鉢 E2	12.22	8.95	平均の底盤から体部は内側して斜め上方に立ち上がり、口縫部は直ぐ直立する。	外面 口縫ヨコナギ。体縫縫ヘリカタキ。 内面 口縫ヨコナギ。体縫縫ヘリカタキ。	外底 SYR8.5% 内面 SYR6/6 中筋多量有
137	鉢 P2	12.6	6.7	長い頭部から体部は内側して斜め上方に尾く。	外面 口縫ヨコナギ。→縫ハケ(12-16cm)。体縫縫ハケ。体部スピオサエ、ヨコナギ。 内面 口→体縫ヨコナギ。縫部縫ハケ→ヨコナギ。	外底 2.5YD2/2 内面 2.5YD2/3 縫合・縫合多量有
138	瓶H D	16.52	12.4	底く斜めに開く外部をもつ。中央の横筋から底盤は幅広があり、底盤は丸くおさめている。頭部は斜め上方に斜め内側に穿たれる。	外面 口縫縫ハケ(13cm)。齊部縫ハケ→縫ヘリカタキ。 内面 口縫縫ヨコナギ。柱状部段り目の痕跡あり。縫ユビナギ。縫部縫ナギ。	外底 SYR7/6 内面 2.5YK7/9 中筋・縫合有

139	高年 C3	22.8	17.9	深い凹状の脚部から口縁部が「く」字形に外反し、筒内上方に立ち上がり。口部には3条の脚部溝を施す。 小空の脚部には横状の柱状茎をもち、筒部下部には3箇の両孔が開いてある。脚部下部には3箇の両孔が開いてある。	外側 口縁部上半部へラミガキ。 内側 口縁部下部へラミガキ。 内側 口縁部下部へラミガキ。柱状部折り目部の痕跡。脚部横ハケ(35°/cm)。	内外面 2.5YR8/2 半砂合有
-----	----------	------	------	---	--	----------------------

旧河道遊離土器

遺物番号	種類 分類	法 則 口 径 深 度	法 則 口 径 深 度	形 態 の 特 徴	性 質 の 特 徴	備 考
140	壺 A2	(13.22)	(5.8)	縦十枚の筒部から口縁部は外反する。 筒部は上下間に僅かに膨張し肩を持つ。 筒部外表面は横状茎を施す。 円形底が開いており、筒部下部には3箇の両孔が開いてある。	外側 口縁部ヨコナギ。 内側 口縁部ヨコナギ。筒部底へラミガキ。 内側 口縁部ヨコナギ。	内外面 5YR8/3 粗砂合有
141	壺 A2	(20.22)	(6.7)	縦十枚の筒部。口縁部にはば水字形に外反し、筒部外表面には3条の横い門文が施されている。	外側 口縁部ヨコナギ。筒部底ハケ(35°/cm)。 内側 ロ一細基層ハケ。	内外面 5YR8/3 粗砂合有
142	壺 B1	—	(5.8)	口縁部底は内側に僅かに低張。 口縁部外表面には3条の横い門文が施されている。	外側 口縁部ヨコナギ。筒部底ハケ。	内外面 10YR7/3 粗砂合有
143	壺 —	(9.3)	—	なで肩の体部。脚部は約6段して立ち上がる。体部上半部に半周状の把手が付く。 筒部外表面には横状の脚部溝が施されている。	全体に擦耗し調整不明。 外側 縦ハケ剥離。 内側 瓦部縫合部剥離。	内外面 10YR7/2 粗砂～礫合有
144	壺 G1	7.8	14.3	扁大徑を有する筒上部に立ち上る。筒部は準らかに外反して立ち上がり。口縁部と脚部の境に僅かに接合がある。口縁部底は丸くねじめられる。	外側 口縁部ヨコナギ。肩一体部上半部へラミガキ。体部底ハケ(35°/cm)。 内側 体部下部ヨコナギ。(上→下)	内外面 5YR8/3 粗砂～礫合有
145	鉢 E1	(17.43)	5.7	平底の底盤から体部は約6上方に内側して立ち上がる。口縁部は外反して崩れる。	外側 口縁部ヨコナギ。体部不定方向のナギ。 内側 口縁部へラミガキ。体部上半部ハケ(35°/cm)。下半部ハケ(35°/cm)。	内外面 2.5YR8/3 粗砂～礫合有
146	鉢 C1	(12.13)	11.2	平底気泡の底盤から体部は内側して立ち上がる。底部は平底。	外側 体部ヨコナギ。ハケ(7cm)→下平根付ナギ。 内側 体部ヨコナギ(6cm)。	内外面 2.5YR8/4 粗砂～礫合有
147	鉢 C1	(16.40)	(13.40)	身延は内側して立ち上がり。底部前部を残す。口縁部底は外方に突て延張。底部は半球形で外方に張り出でる。筒部中央に穿孔。	外側 体部ヨコナギナスリ→底ナギ。 内側 体部ヨコナギナスリ→底ナギ。	内外面 7.5YR8/2 粗砂～礫合有
148	鉢 C2	21.6	12.8	手盆の底盤から体部は大きく斜め上方に内側して立ち上がる。底部は外方に突て延張。底部は半球形で外方に張り出でる。筒部中央に穿孔。	外側 口縁部ヨコナギ。体部上半部ハケ(35°/cm)。体部上半部ハケ(35°/cm)。下半部ハケ(35°/cm)。 内側 体部ヨコナギ(6cm)。下半部ハケ(35°/cm)。	内外面 10YR8/2 粗砂合有
149	鉢 C3	(25.30)	15.0	手盆の底盤から体部は内側して立ち上がる。底部は外方に突て延張。底部は半球形で外方に張り出でる。筒部中央に穿孔。	外側 体部ヨコナギ(6cm)。 内側 口一休部上半部ハケ(35°/cm)。下半部ハケ(35°/cm)。下半部ハケ(35°/cm)。	内外面 5YR7/4 粗砂～礫合有
150	鉢 C2	(20.30)	14.2	手盆の底盤から体部は内側して立ち上がる。底部は外方に突て延張。底部は半球形で外方に張り出でる。筒部中央に穿孔。	外側 ロ一休部底ハケ(10cm)。 内側 体部底下部ハケ→休部中一休部中ハケ(6cm)。	内外面 7.5YR8/4 礫を少量合有 体部下部スリット
151	鉢	(18.30)	(9.4)	筒状に内側して立ち上るが体部。口縁部は準らかに「く」字形に外反し。筒部は上方に伸びる。	外側 体部底ナギ。口縁部ヨコナギ。 内側 口縁部ヨコナギ。体部底ナギ。	内外面 2.5YR8/2 粗砂～礫合有 内面 Xスリット
152	高坪 B	—	(6.0)	中空の脚部。	外側 筒部底ハケ・底ヘラミガキ。 内側 筒部の内側剥離有。	内外面 5YR8/3 粗砂～礫合有
153	高坪	13.6	(7.20)	輪状の底。底盤は丸くおさまる。	外側 口縁一休部上部ヨコナギ。体部半球形ハケ(35°/cm)。下半部ハケ(35°/cm)。 内側 体部底ハケ(35°/cm)。	内外面 2.5YR8/2 粗砂～礫合有

154	高木	—	17.1	高い位置の枝状部で瘤状があり、内側充満部。	外樹 つ・瘤状葉ハケ。枝状葉裏ハラ トガキ。 内樹 枝状部ハラケアリ。葉状葉ハケ。 内樹ハラトガキ。	内外樹 SYR8/4 根糸一難合有
155	高	9.0	5.7	突出するつまみ部から内側充満部、聞く体感。場所は異なる。	外樹 つまみ部スビセサエ調整。体部 ナゲ。 内樹 体部ハラトガキ。つまみ部ナゲ。 内樹 体部	内外樹 SYR8/7/3 根糸一難合有
156	高	12.8	5.9	突出するつまみ部。体部との境はびれている。体部は底面的に開く。	外樹 つまみ部スビセサエ。体部開ハ ラトガキ/ 内樹 体部横ハラト→体部・底部ヨコナ ギ。	内外樹 SYR8/7/3 根糸有 体部横付茎スビ付着
157	高	15.2	6.3	突出するつまみ部。体部は内側充満部、瘤部は若干縮んで内側する。	外樹 つまみ部スビセサエ。体部開ハ ラトガキ。瘤部ヨコナギ。 内樹 つまみ部スビセサエ。体部開ハ ラトガキ。→瘤ハラトガキ。瘤地ヨコナ ギ。	内外樹 SYR8/7/6 根糸一難合有 内外樹 SYR8/2/1 瘤少難合有 内外樹ヨコナギ
158	ミニチュア 土器	(6.6)	7.0	若干突出した半球の瘤部。瘤部は内側充満部に立ち上がる。(体部は近く外反する。)	外樹 口縁部ヨコナギ。体部スビセサ エ。 内樹 口縁部ヨコナギ。体部スビセサ エ。	内外樹 7.5YR8/3 根糸多難合有
159	ミニチュア 土器	—	4.4	半球で体部は内側して立ち上がる。	外樹 体部瘤ハラ(Φ12mm)。 内樹 体部ユビオキエ・ユビナギ。	内外樹 10YR8/4 内外樹 2.5YR8/2 根糸有
160	ミニチュア 土器	(6.6)	(5.7)	内側して立ち上がる体部。口縁部は瘤状膨張して外反。	外樹 口縁部ユビオキエ。体部ニビカ ギ。 内樹 ヨリ縁一休部スビセサエ。	内外樹 2.5YR8/4 根糸有

* 参考欄には主に色調・胎土を記入している。色調は農林省農林水産技術会議他監修の新版標準土色帳を使用した。胎土は含有物を記入した。粒径の区分は、同書の分類区分によった。

* 法量欄の数字で () 付の場合は、復元口径・残存高をあらわす。

出土木製品観察表

遺物番号	器種	本番号	周囲	法 量 (cm) 高さ×幅×奥さ×厚さ)	形 態の特徴	装 飾の特徴	出土地 出土地名
1	漆	3.6	七ノ木	0.4×0.5 3.2×0.5 0.9×0.5	両側面の内底と、縁底に削り出された跡がある。	先端部から縁底にかけて、削り出された跡がある。縁部は延方向の傾きがござり調整している。	V区 ③層
2	漆	丁	漆目	5.8×2.8×1.6	縁部は認められない。刃部は直線で、全体に平均的な形状を呈し、刃部の部分が縁部に削り出されている。	全体の調査は不明。	V区 ③層
3	漆	—	ホヤ	1.0×0.6 2.14× 3.5×0.5	身は木製板に着目、身の一部を矢張り削り落す。柄は椎木になり、直角である。先端は円をなす。身部から詰め上げて立ち上る柄頭の断面は半円形を呈する。	先端部の先端は幅3mmの丸く切り落す。柄部付近は僅く削り出される。表面は全面に幅1-5mmの丁寧な削り跡がある。柄部の表面は漆面不明、裏面は漆面の跡が認められる。	V区 ③層
4	漆	漆目	—	14.0×1.75×10.0×(1.5)	身は一括火照。表面の先端はやや尖る。	全表面に調整。	V区 ③層
5	漆	漆目	七ノ木	全体 4.7×14.5 15.5×2.9×(2.0) 3.2×(2.5) 柄 6.3×2.3×(2.0) 3.2×(2.5)	尖形、椎身：彫みによる極方向の削れがある。側面底に刃部が認められる。 腰身：腰身は腰部によって区別されさせられ、腰部の先端は椎体に削り落している。	刃先は削りによる調整。表面は不明。	V区 ③層
6	漆	漆目	カン型	全体 24.1×16.7×(3.0) 着地孔 3.2×4.5×(2.5) 刃部 13.2×1.0×(1.5)	腰身の尖端。刃部は角びて削り出され、刃底4mmのうち3mmが欠損し、1mmが削り落されている。造りする刃部は、内部に向かって腰身する。腰身は腰孔とも、刃先へ垂直に立くな。	刃先は削りによる調整。表面は不明ではあるが、削りの跡が底部が認める。	V区 ③層
7	漆	漆目	—	12.5×9.7×(1.5)	約1/3腰身。腰身は11mmの一で、腰部削出しと刃部が欠損する。その削部はひだらかに削りをも。	刃部は着地部に向いて、削り調整。	V区 ③層
8	漆	漆目	スギ	最大直径20.1×10.1	造り内に西側を厚くする。 半輪軸に直角斜材。	表面とも削り跡が認められる。 周辺は切削して削りをもる。表面周辺部は被取材に使用した削削の削跡を認める。	V区 ③層
9	漆	漆目	スギ	13.4×4.8×(2.5) 復元部7.0	約1/2腰身。	腰身は削り跡をもる。表面は「真漆が認められるが、裏面は漆面不明」。	I-II区 ③層
10	漆	漆目	七ノ木	21.9×9.8×(2.5)	腰円削も厚する。 腰身に上部欠損部が多い。	表面とも済磨が明る。周辺は工具で削削されたことをもる。	V区 ③層
11	漆(底)	漆目	—	6.9×16.7×(2.3)	腰部の一部削れ。一端に削れが認められる。刃部は腰部と接続する。 腰円削を呈する。	表面に工具痕が認められる。	Aトレンチ ③層
12	(漆)漆	漆目	七ノ木	22.5×14.3×1.9	腰円削を呈する。一端に削れが認められる。刃部は腰部と接続する。 腰円削を呈する。	刃部の内側は工具による切削痕跡が認められ、表面とも削り跡である。削り方不同。半径は不明である。	V区 ③層
13	漆	漆目	スギ	全体 直径34.0×腰径12.0× 高さ13.8 把手 3.4×1.8×(2.5)	腰部は細長い小柱を有する。 刃口火照している。 腰側部の下端に凹部があり、凹部を削り出す跡が認められている。刃部の削れは認められなかった。腰の表面には平行形の基部と腰外縁が削り落されている。残るの中央には把手用の孔が削り出された。	表面不明。	V区 ③層

14	機 械	板目	ビノキ	(1.4) 37.4×6.2×(3.5) (1.8)	平面部は各面を削る事となる。 また、両端部は欠断する。底面は平面で端部は斜めになって削られる。 内面底部は平滑に仕上げられる。 外端部は底面と端面を削る事となる。	前方の側面材を削って作っている。 内面底部は丁度底面をカットして仕上げられており、外端部は端面下端の削り跡が隙間に残り、継ぎは上げである。	V区 ③場
15	機 械	板目	ビノキ	35.3×21.3×(1.8)	把手側の削りあわし。 側面は平面状の把手側を切り落としている。把手の一部を削る。 側面下端は底面と斜めに削る事となる。 昇降の轍路は延められた。	把手と側面と斜め底面削り調整。 方向・位置不規則。 前面下端の削りはノック工具で削りに加工する。	V区 ③場
16	機 械	板目	ヒノキ	34.6×22.2×(2.0)	側面部上に把手側削りあわし。 把手は上面の側面を削る。ヒヤサ当方側を削る。 側面は把手の中間で削り、内面は底面で削る事となる。	側面に棘・底面として削り上り切削。 側面の内面は削り調整であるが、表面は不規則。前面下端の削りはノック工具で削りに加工する。	V区 ③場
17	機 械	板目	スギ	19.6×13.0×(2.0)	側面・把手の一端が残り、側面部上に手柄底部の把手が削り落されている。 側面に道がある。	手柄不規則。	V区 ③場
18	機 械	板目	—	15.2×10.8×(1.8) (1.8)	側面部上に把手の把手が削り落されるものがあらう。 把手側削りあわし。	把手・側板の内面は削り調整。	V区 ③場
19	写 真 (鏡?)	板目	カシ類	37.3×21.7×(1.4) (1.8)	平面部は底面で刃身をたたきながら側面を削る。中央は斜めに凹みをもつ。側面は平面から底部を削り落す。 底面は底面削りあわし。	側面や底面は刃身によって削って落している。丸削り幅1.5~2cmの刃削りと工具で削り調整。	V区 ③場
20	角 物	板目	スギ	5.79×(2.1) 2.8×(2.0)	把手T字部を欠断する。側面は側面で把手側を削り落すと見えられ、一端を欠断する。	側面の側面は工具で切削。他の部分の調整は詳細不明。	V区 ③場
21	樹枝木製品	板目	ビノキ	35.9×4.0×(3.0)	側面は正面形を呈する。一端を欠断する。側面の下10mm附近に取り落す。	側面の側面は工具で削り落すと見えられ、側面の側面が削り落され、他の部分の調整は詳細不明。	V区 ③場
22	樹枝木製品	板目	スギ	46.3×3.4×(2.0) 2.4×(2.0)	一端に扁平な長方形の削り落し部をもち、そこから直に伸びる側面の側面感分らせる。	側面の側面は工具で削り落す。	V区 ③場
23	樹枝木製品	丸木	イタガキ	42.7×3.6×(3.0)	側面影は円形を呈する。一端を欠断する。一端の下10mm附近に取り落す。	側面影は工具で削り落す。	V区 ③場
24	樹枝木製品	板目	—	49.3×1.0×(1.0)	側面は円柱を呈する。一端をえぐっている。	側面不規則。	V区 ③場
25	樹枝木製品	板目	—	15.4×3.0×(2.5) 2.0×(2.0)	側面はほぼ正方形を呈する。両側面は手や両端を削り変化している。	側面不規則。	V区 ③場
26	樹枝木製品	板目	—	45.7×2.9×(2.5)	両端部と手や側面を削り落す。一端は一端欠断。	側面不規則。	V区 ③場
27	芋 籠 (米穀品)	板目	ビノキ	43.1×26.3×(1.4)	刃先は半球で、裏面が突出した形である。 側面は厚く、中央部は無い。	二本筋に変り削り調整。	V区 ③場
28	芋 籠 (米穀品)	板目	—	47.5×29.0×(1.5)	側面に両方の側面底部をもつ。側面底部は幅7mm、深さ5mmの複数で刃先に削り落されている。中央部は削り落す。 側面は、底面は側面が立つか。	両側の側面部・側面の両面に削り落す。	V区 ③場
29	米穀品	板目	—	25.1×21.1×(1.0)	はね正方形を呈する。底次で一側面が削り落らくなる。両面には把手を嵌みこむと思われる穴やV字形の切れ込みが側面側にあらわれる。 能力的にはまるまるの溝を加工する事が出来る。	側みのある側は幅1~7mm前後の削りや削り落す。他の側も前側に削り落す。下端は片側より、上端は両側より削り落されている。	V区 ③場
30	木柄木製品	板目	ビノキ	27.6×12.2×(10.2) 5.9×(5.0)	下端を欠断する。前面部は円形を呈する。側面は中央に削り落している。	側面不規則。	V区 ③場

31	不明木製品	板目	----	47.4X3.1X(2.0) 2.1X(1.4)	一方の端面は一貫に分かれし、他の端面は端面が切ってある。断面形は円形を呈する。中央部は部分的に前後してある。	二端に切られた部分に割り合板を接着する。他の部分は調整小用。	V級 ②種
32	不明木製品	丸木	----	53.3X0.9X(0.6)	表面を粗く削り出し、表面をしていて、表面剥離や剥離を呈する。	調整不規則。	V級 ②種
33	不明木製品	丸木	----	11.0X(0.5) 11.3X(0.5)	一端は丸くえぐる。他の一端は丸削りをする。表面は円形を呈する。	端面は周囲から加工。端面は割り調節する。	V級 ②種
34	化粧板状 木製品	板目	コウヤマキ	11.0X(0.8) 30.8X(0.9) 9.4X(0.9)	半圓形で端面丸削りを呈する。円端に2箇所付いた4脚の孔を有する。底面下端の一端に凹りがある。	端面は削り加工。	Ⅲ区 ②種
35	化粧板製品	板目	スギ	14.7X(2.0) 4.4X(1.7)	半圓形で丁字型を呈し、表面は一方に若干削りの凹凸を有する。表面は凹凸を有する。	側面の先端は削って丸く加工。側面の長辺と側面の端に丁字型跡が残る。表面・端面は削り取り加工を施す。	V級 ②種
36	建築材	板目	---	5.0X(2.0) 4.0X(2.0)	表面長方形の角材を加工。両端が尖角形。上端に幅2.0mm、底1.7mmの長方形の端面が削りがされている。	穴の端部は工具で穿る。他の端部は削る。	V級 ②種
37	杭	丸木	---	30.9X(5.0) 4.5X(5.0)	他の先端のみ丸く。	西方から幅1.5mmの削りを施す。 丸頭を尖らせてある。	不明
38	柱	丸木	---	31.2X8.2X(5.2)	下端は平頭に近く丸い。上端は丸削りで丸めた丸頭をしている。	下端は工具によって平面に切削されている。	柱穴用 ②種
39	柱 材	板目	---	32.9X9.1X(1.1)	筒内の方舟を多くなる。表面とも平頭。一端を丸削る。	一面に工具を削り小切削に丸く。	Ⅲ区 ②種
40	柱 材	板目	---	107.5X6.4X(1.8) 4.4X(1.8)	筒内方舟化している。表面を丸削る。	調整不規則。	Ⅲ区 ②種
41	柱	板目	---	106.8X7.6X(2.0) 1.4X(1.8)	筒内方舟を呈し、先端を尖らししている。	調整不規則。	V級 ②種
42	角 材	板目	---	100X1.8X(3.2)	表面形が内凹形を呈する角材。表面を丸削する。	調整不規則。	Ⅲ区 ②種
43	柱	板目	セノキ	68.3X2.5X(1.7)	表面長方形を呈し、先端を尖らししている。	調整不規則。	Ⅲ区 ②種
44	柱	板目	---	71.7X4.0X(1.0)	細小な素材の先端を尖らす。一端は丸削りである。	一面に工具を削る。先端は削りを施す。尖らせてある。	Ⅲ区 ②種
45	金属品	丸木	---	47.9X35.2X(10.0)	表面形が内凹形を呈する。一端は平面に丸削りしている。他の内表面と等しい。	先端部は削り加工が施されている。	Ⅲ区 ②種
46	柱	丸木	---	54.7X8.0X(3.3)	やや湾曲し先端を尖らせている。表面形が内凹形を呈する。一端を丸削る。	先端部は丁寧に削って尖らせてある。	柱足Aトランク ②種
47	柱 材	板目	---	71.8X9.2X(1.4)	端・端ともと2端一である。一端が丸削りしている。	調整不規則。	柱足Aトランク ②種
48	柱 材	板目	セノキ	69.4X1.6X(1.5)	端は丸く。側面の一部を丸削る。	上端は平面に切削されている。	Ⅲ区 ②種
49	柱 材	板目	セノキ	58.30X6.4X(3.4)	比較的丸い柱だ。	両端は削り表面によって切削されている。	Ⅲ区 ②種
50	柱 材	板目	---	53.3X8.2X(3.5)	端・端ともと丸である。一端を丸削りしている。	上端は削り加工されている。	柱足区不明 ②種
51	柱 材	板目	---	41.4X3.2X(1.7)	一端が丸削りしている。一端はやや削りをして端を丸くする。	両端は工具による削りである。	Ⅲ区 ②種
52	柱 材	板目	セノキ	46.9X0.8X(1.4)	一端を丸削る。	一端は工具による削り。もう一端は工具による削りである。	Ⅲ区 ②種
53	不明木製品	板目	---	46.2X0.7X(0.9)	端を丸削る。上端左端縁は舟形に丸く削りされている。	両端に工具を削る。上端は工具による削りである。	Ⅲ区 ②種
54	不明木製品	板目	セノキ	43.7X2.5X(0.9)	端が丸っている。側面の一部が丸削りしている。	先端は削り加工し、両端は工具による削りである。	Ⅲ区 ②種
55	角 材	板目	---	45.3X3.6X(3.7)	表面は方形を呈する。両端は丸削りしている。	調整不規則。	Ⅲ区 ②種

56	漆喰材	分離材	——	48.1×10.1×(3.9)	詳細不明。	約1/4の分離材と漆喰は片面で丁寧に切削。下部は内側より丁度干渉り込み、その後削削している。	Ⅱ区 ④壁
57	株子	壁目	スギ	42.6×15.1×(7.2)	下端部から一段目まで残存。下端部には小さな突起をもつ。	漆喰の漆喰材を約1/3の厚度で削り込み、足し上げてある。漆喰部は表面を削り落して残してある。裏面には幅2~3mmの長版剥離が見られる。	Ⅱ区 ④壁
58	株子	壁目	ヒメキ	12.5×18.3×(2.5) (3.4)	足かけ部2~3段のみ残り、両端を欠損する。足かけ部の前面は下端部の漆喰が剥離・凹凸状とする。	上端部は表面に削り落し、水平の削削を終えている。裏面には幅1~2mmの工具痕跡が残る。漆喰には落葉の跡がある。 下端部は漆喰をもじり落す形で削り込みされた後削削している。	確認△トレ 出・漆喰手 袋
59	田嶋	壁目	スギ	82.0×3.6×(2.4)	一端と一部縁を欠損している。舟底板を呈し、両端は浮みを残す。	漆喰・漆喫板を剥込んだものか、削削を終えている。	Ⅱ区 ④壁
60	長柄鑿	壁目	キン類	106.6×14.4×(1.5) 6.0×(3.0)	漆喰部と漆喫部の界面部で舟底板を呈し、舟底板の表面は剥離する。舟底板部は舟底板を削り落す形で削り落す。裏面には舟底板の工具痕跡が残す。	舟底部に工具痕跡が認められる。舟底部は丁度削り落してある。裏面には舟底板の工具痕跡が残す。	Ⅱ区 ④壁

第4章は公開していません

第5章 結語

上板井遺跡は、宮田川流域に発達した上位段丘上に立地する遺跡である。今回報告した調査区は、上板井遺跡の中央付近にあたり、小坂川によって形成された南北に延びる微高地上に立地している。上板井遺跡は、は場整備事業に係わる確認調査の結果、弥生時代後期の集落遺跡であることが判明している。詳細に述べると今回調査した地区の北側は水田跡が展開し、調査区の南側に延びる微高地上には堅穴住居址等の集落がある。この集落のさらに南側は水田跡が展開していると推定されている。兵庫県教育委員会が調査した地区は狭小ながら、北側に展開する水田、即ち生産地区と集落の居住地区とのちょうど中間にあたる。今回調査した旧河道跡は調査の結果、その成因は、自然に生じたと推察されるが、その後は、何らかの機能を果たすために、人为的な改変が加えられたと考える。このことは河道内に認められた杭列、夥しい量の土器、木製品の存在からも表づけられる。

旧河道内出土について

出土した木製品は土坑1から出土した板材を除いてすべて旧河道内より出土した。出土した木製品は総数218点を数える。木製品の内訳は鎬・鋤・田舟・木庭丁等の農具類、槽・桶の容器類、板材・丸材・角材・杭・梯子等の建築材、斧等の工具類である。ほかに木炭・匙が出土している。量的には板材に代表される建築材が全体の86%を占め、旧河道から出土した木製品の多くが、丸材・板材・角材・杭である。当調査区の周囲で実施された確認調査でこれらの建築材の機能を考える上で良好な出土例があるので紹介する。

当調査の北側に展開する水田跡より、水路と考えられている溝が確認されている。この溝は幅1.5m、深さ0.5mの規模で、矢板による護岸施設が作られている。矢板には、幅15~28cm、厚さ2~3cmの板材が使用されている。板材の長さは残念ながら確認されていない。矢板列には4cm角、長さ1.5m以上の角材が横木として使用されていた。また別の例では、自然木を横木とし、杭で支えている護岸施設も確認されている。出土した建築材のなかには、溝の護岸部材として使用された建築部材が含まれている可能性がある。今回出土した板材・角材・杭のなかで、護岸部材の可能性のある材を取り上げてみる。すなわち、板材については、幅15~30cm前後の法量のもの、角材については1辺4~5cm前後のもの、および杭を護岸部材と想定すると、出土した板材・角材・杭の建築部材183点のうち、60点が該当する。約3割の建築部材が護岸部材としての可能性をもつ。厳密には、護岸部材と建物址等に使用される建築部材との識別は困難である。しかし、旧河道出土の建築材は、護岸部材と建築部材の両者が混在している可能性があることは指摘できる。

旧河道より出土した本製品は、鉢・獣・木包丁・田舟などその使用が主として生産区域に所属するものが15点出土している。また槽・桶など居住区域に主たる所属をもつものが20点出土しており、建築材と同様、生産区域と居住区域に所属するものが混在している。

出土した本製品のうち桶状容器の底(8)と鍵未製品端の2点について、光谷拓実氏の御好意で年輪年代測定を実施したので、その成果を報告する。測定した材は、どちらも杉材であった。(8)は289年分の年輪を含み、残存最外輪測定年代はB.C. 92年である。Gは156年分の年輪を含み、残存最外輪測定年代がA.D. 56年の測定結果であった。もちろん最外輪の年代が伐木年代ではないが、両木製品の製作年代が調査で得られた時期、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の時間幅におさまる可能性は高いと判断される。

上板井遺跡の土器について

上板井遺跡の土塊、柱穴、旧河道からは木製品とともに多量の土器が出土した。うち器種が識別できるものは790点を数える。そのなかで約1割が弥生時代中期に属する土器で、他は弥生時代後期から古墳時代初頭の間におさまる土器である。器種は広口壺、長頸壺、短頸壺、細頸壺などの壺類をはじめ、甕、鉢、器台、高杯が出土している。とくに甕は全体の約半分を占め出土量が最も多い器種である。ついで壺類が多く、全体の約3割を占めている。壺類のなかでも、長頸壺は広口壺について多く、全体の12%を占め、長頸壺の多さが際立っている。鉢についても有孔鉢（鉢C）が突出して多く、本遺跡の器種構成の特色といえる。

弥生時代中期の土器は、甕 A₁・A₂・B₁・H・I₁、壺 A・C₁、鉢 B、高杯 A が相当し、中期後葉に比定される土器が多い。他の土器については総じて弥生時代後期から古墳時代の初頭の範疇におさまると考えられる。これらの一群は、器形から時期的な細分も可能であるが、後述するように旧河道内の土器の出土状況が決して良好とは言えず、大きな過ちをおかす可能性が高い。ただ近畿自動車道工事に因縁して、上板井遺跡周辺の七日市遺跡、国領遺跡（C地区）、西木之部遺跡、板井寺ヶ谷遺跡など弥生時代の集落跡が調査され、良好な土器の出土例が増えている。当地方の弥生時代の土器の検討は、これらの遺跡の成果なしには不可能で、これらの報告を待って、後日検討すべき問題と考える。したがって、本報告ではたんに資料の提示に留め、詳細な土器の検討は省略させていただく。

最後に上板井遺跡の遺構について簡単に触れ終わりとしたい。今回調査した上板井遺跡からは、建物跡の柱穴群、土坑、旧河道跡の遺構が発見された。柱穴群はかなりの深度で削平を受けているため消滅したものもあり建物址は復元できなかったが、上板井遺跡の居住地区的北限が当調査区にまで及ぶことが判明した。これらの柱穴群の時期については、柱穴内より長頸壺が1点出土している。口縁端部が僅かに内傾する壺 G4 に分類した長頸壺で、石井編年案にし

器種	分類	出土層位				合計	器種	出土層位				合計	
		①	②	③	不明			①	②	③	不明		
広口壺 蓋	A1	4	7	8	3	22	鉢 蓋 台 高 壺	C2	15	25	16	11	67
	A2	3	7	0	2	12		D	15	32	13	10	70
	B1	5	6	3	1	15		E	0	2	0	1	3
	B2	1	7	2	1	11		F	2	10	3	5	20
	B3	0	0	5	3	8		A	2	3	3	0	8
	C1	6	7	4	4	21		B	2	0	0	0	2
	C2	5	3	1	1	10		C1	0	6	3	10	19
	D1	0	0	3	1	4		C2	3	4	0	11	18
	D2	1	1	0	0	2		C3	0	0	0	2	2
	E	0	3	0	1	4		D	2	2	0	0	4
110 13.9%	F	1	0	0	0	1		E1	1	1	1	3	6
	G1	4	14	11	0	29		E2	0	3	2	0	5
	G2	4	3	4	1	12		E3	1	0	3	0	4
	G3	8	14	4	15	41		F1	0	5	1	1	7
12.2%	G4	0	9	3	2	14	88 11.1%	F2	1	8	2	2	13
	H	0	1	1	1	3		A1	0	2	0	0	2
短頭 甕 3 0.4%	I1	0	1	1	1	3		A2	1	0	0	0	1
	I2	0	0	3	2	5		B	4	3	0	0	7
	I3	0	2	0	0	2		A	0	2	2	1	5
	I4	0	1	0	0	1		B1	0	5	1	5	11
窪 11 1.4%	A	0	4	1	1	6		B2	4	12	9	21	46
	B1	34	22	9	7	72		C1	0	2	2	1	5
	B2	29	50	10	11	100		C2	0	0	1	0	1
	B3	3	3	6	7	19		C3	0	3	0	1	4
C1	4	14	4	12	34	81 10.2%	D	0	3	1	5	9	
							総計	165	312	146	167	790	
								20.9%	39.5%	18.5%	21.1%		

*器種・総計内の数字は上：総数、下：百分率

表2 旧河道内層位別の出土器物構成表

たがえばV-3様式に比定され、弥生時代後期後半頃と考えられる。

土坑は3基確認された。いずれも上部が削平され、土坑の構造は不明瞭であった。土坑の時期については、土坑2から一括性の高い土器群が出土している。出土した土器の一群は、総じて弥生時代中期後葉から後期初頭の範疇におさまると理解している。

旧河道は、その土層の堆積状況から三時期に大別される。下層より③層腐植質の紗賀シルトが堆積する時期（堆積時間は長い）。②層シルト質紗糸が堆積する時期（非常に短い堆積時間）。①層砂混じりシルトが堆積する時期（③層よりは堆積時間が短い）の三時期である。各層の土器の包含量は②層が最も多く全体の出土量の4割を占める。これは②層の堆積が洪水に起因しており、③層中の土器を巻き込んだためと推察される。②層上面では板状杭を円形に打ち込んだ遺構が検出されており、②層が堆積し凹地化した後も人為的な利用が行われている。②層が凹地の底面であった時期は、②層上面の木製品の出土状況から判断して、凹地内を水が流れていたと推察され、板状杭を円形に打ち込んだ遺構は、このような環境で機能を果たしていたと考えられる。その後、数回にわたって弱い洪水がおこり、凹地内は平坦化していく。平坦化していく時期は、弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

旧河道の機能については環濠的な機能も考えられる。しかし前述したように、旧河道内から出土した建築材のなかに、護岸部材の可能性のあるものが含まれている。またⅡ区に杭列が認められることから、少なくとも③層の時期には、旧河道内には、護岸施設が設けられていた可能性は高い。調査区の北側に展開する水田部分で、護岸施設をもつ水路の存在を考慮すると、この旧河道は、水田区域へ水を供給する機能を果たしていたと推察される。ただ②層が堆積し、凹地化した後は水路として機能はなくなったと考えられる。

参考文献

- 1) 石井清司「各地域の様式編年—丹後・丹波地域—」『弥生土器の様式と編年—近畿編』 1989
- 2) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府弥生土器集成」 1989
- 3) 芦田 浩「上板井遺跡」「兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和60年度—」兵庫県教育委員会 1985
- 4) 村上泰樹「西木之部遺跡C地区」「兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和59年度—」兵庫県教育委員会 1987
- 5) 村川行弘・村川義典「春日七日市遺跡—確認調査報告書—」春日七日市遺跡発掘調査団 1984
- 6) 井守健男・桂定淳介・村上賢治・久保弘幸「春日・七日市遺跡」「兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和59年度—」兵庫県教育委員会 1987
- 7) 村上泰樹「国領遺跡（A-C地区）」「兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和60年度—」兵庫県教育委員会 1985

図 版



1. 旧河道出土 木製鉤



2. 旧河道出土 木製耙



1. 調査前 全景（南東から）



2. 調査前 近景（南西から）



1. 確認調査 Aトレンチ（北から）



2. 確認調査 Aトレンチ木製品検出状況（東から）



旧河道 I ~ VI 区調査終了後全景（西から）



1. 旧河道Ⅰ～Ⅱ区 ②層中遺物出土状況（南西から）



2. 旧河道Ⅲ区 ③層中遺物出土状況（南西から）



1. 旧河道IV区 ③層上面遺物出土状況（西から）



2. 旧河道IV区西側 ③層上面遺物出土状況（南から）



1. 旧河道脇区東側 ③層上面遺物出土状況（南から）



2. 旧河道脇区東側 ③層上面遺物出土状況（南から）



1. 旧河道V区 (2)層上面遺物出土状況 (西から)



2. 旧河道V区 実掘状況 (東から)



1. 旧河道・拡張調査区全景（北西から）



2. 拡張調査区・柱穴群（北西から）



1. 拡張調査区 土坑1(右)・2(左)検出状況(西から)



2. 拡張調査区 土坑2内遺物出土状況(西から)



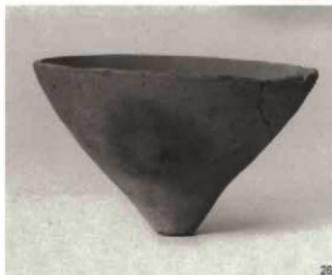
遺構内出土の土器（柱穴46.1、土坑2.2～8）



旧河道 ①層出土の土器



旧河道 ①層出土の土器



旧河道 ①層出土の土器



44

旧河道 ①・②層出土の土器 ①層 38~40、②層 42~44)



旧河道 ②層出土の土器



50



51



55

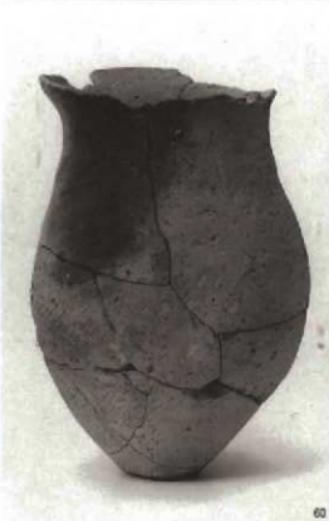


53



57

日河道 ②層出土の土器



日河道 ②層出土の土器

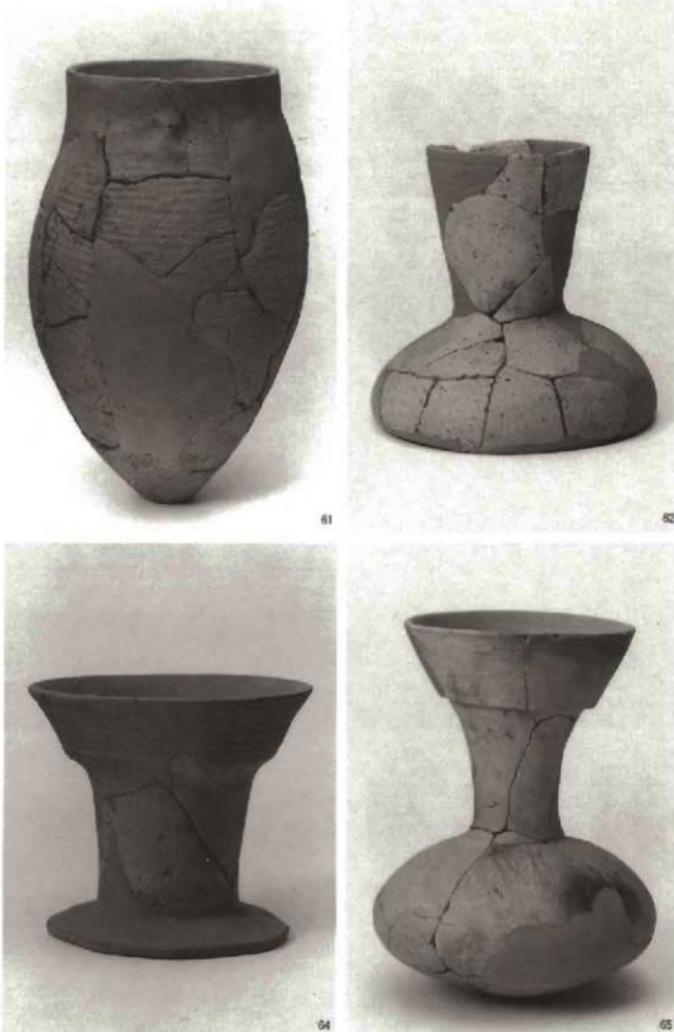


58A



58B

旧河道 ②層出土の土器 (A : 頸部付近、B : 体部付近)



日河遺 ② 層出土の土器



63



67



66



68



70



71

旧河内 ②層出土の土器



旧河道 ②層出土の土器



78



79



80



81



82

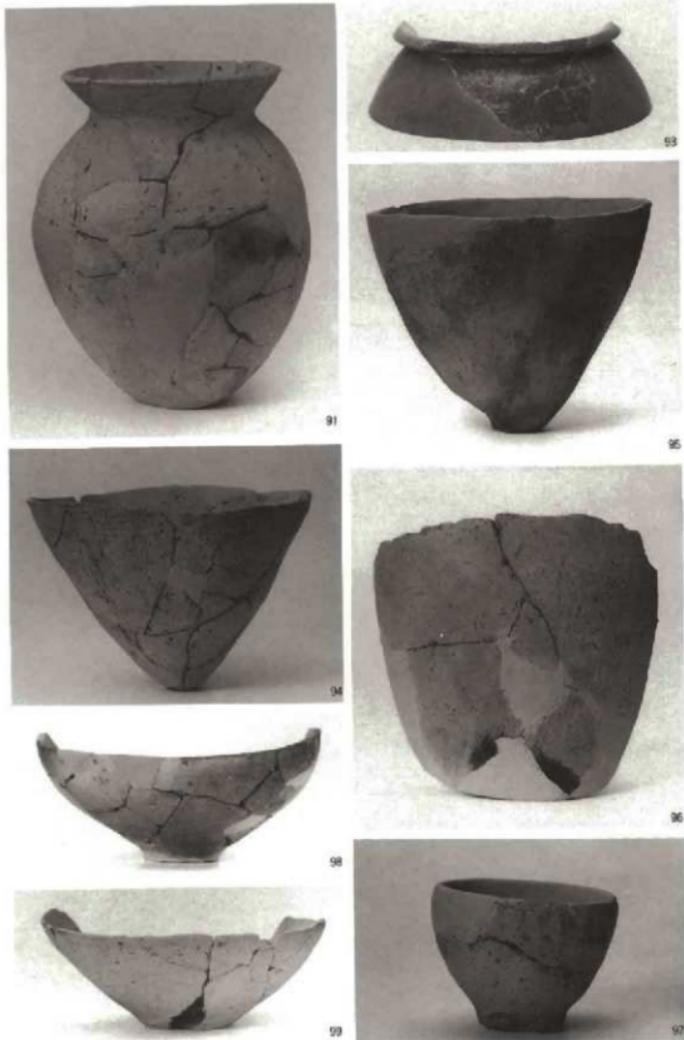


83

旧河道 ② 層出土の土器



旧河道 ②層出土の土器



旧河道 ②層出土の土器



旧河道 (2)層出土の土器



旧河道②層出土の土器



120



121



122



123



130



131

旧河道 ②・③層出土の土器



旧河道 ③層出土の土器



旧河内 ③層・その他出土の土器 (③層138・139、遊歎土器140~146)



旧河道 その他の出土土器



155



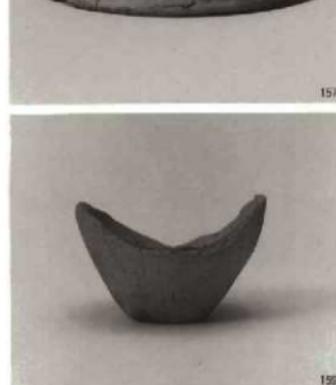
156



157



158

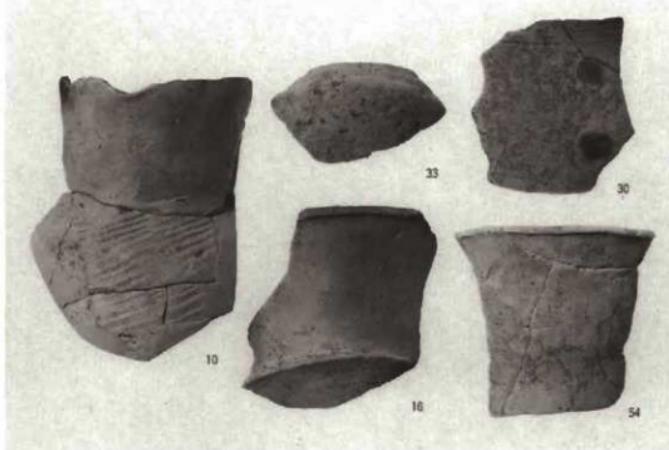


159

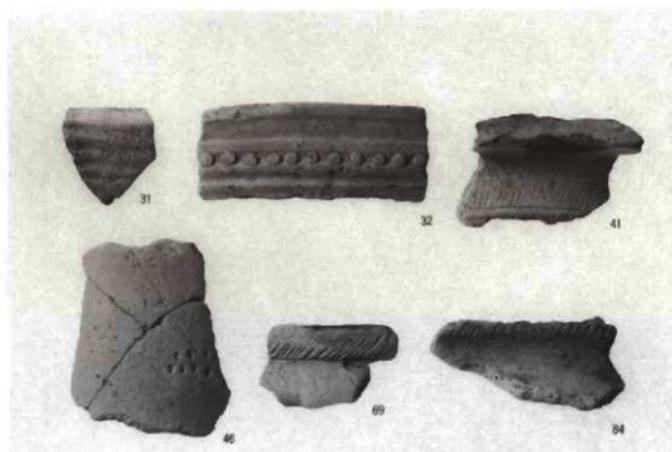


160

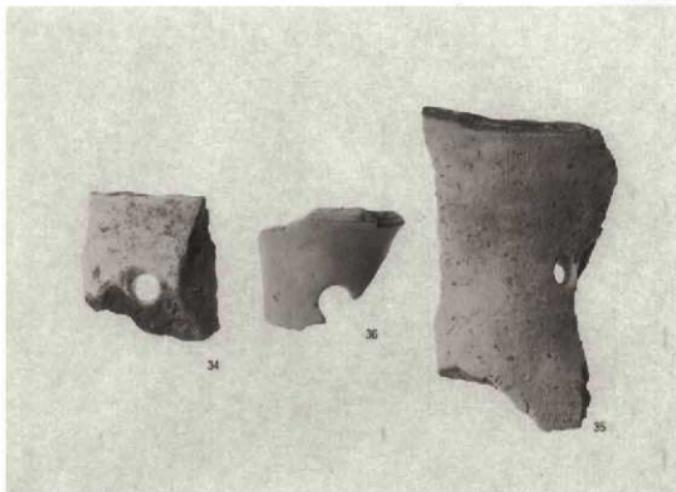
旧河道 その他の出土土器



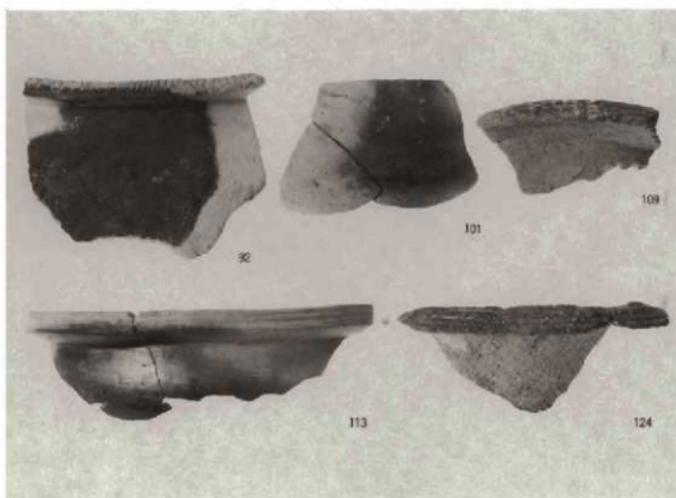
1. 旧河道 ①・②層出土の土器 (①層10・16・30・33、②層54)



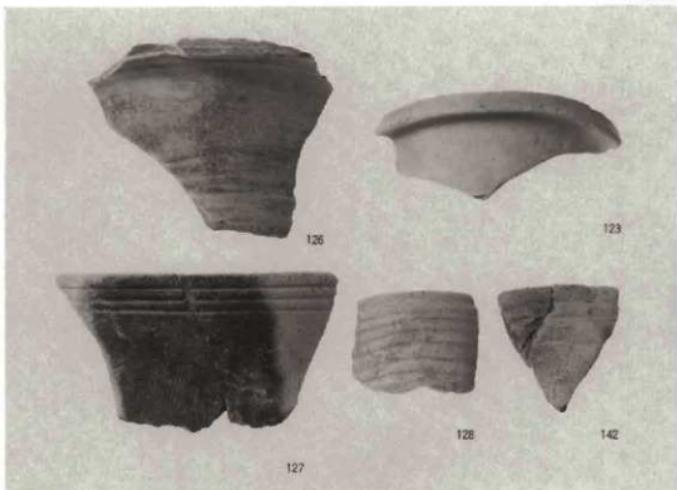
2. 旧河道 ①・②層出土の土器 (①層31・32、②層41・46・69・84)



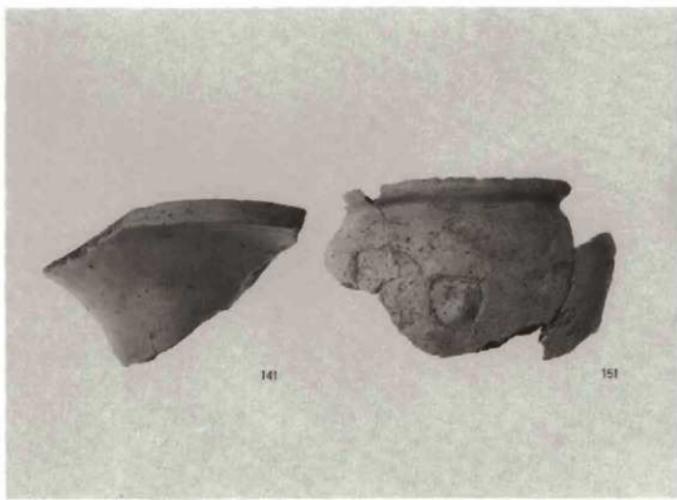
1. 旧河道 ①層出土の土器



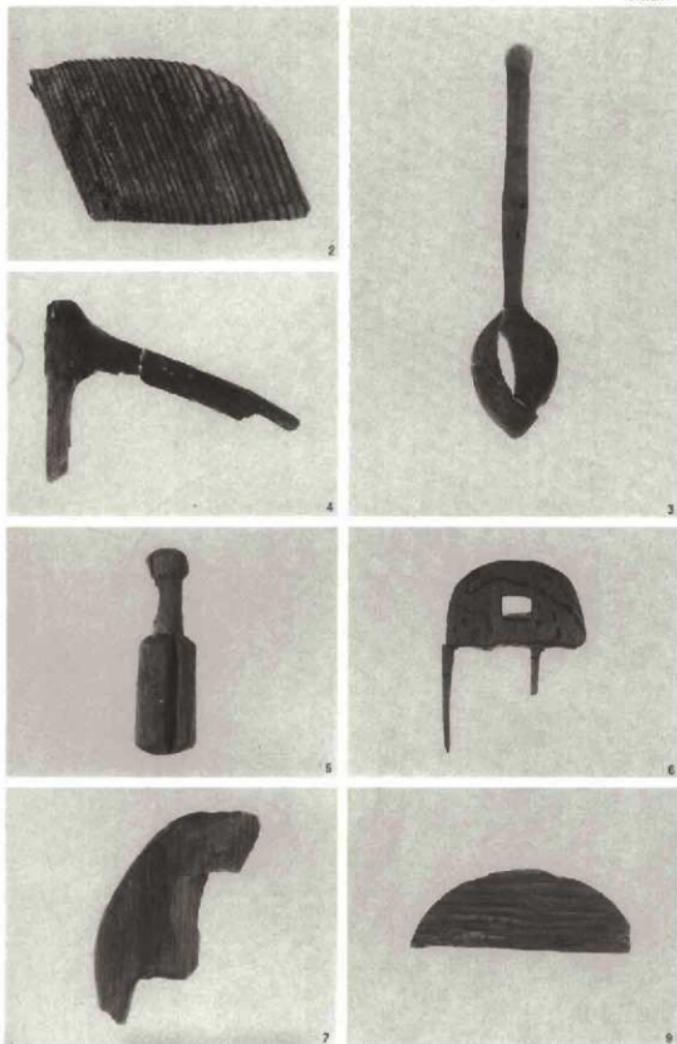
2. 旧河道 ②・③層出土の土器 (②層92・101・109・113, ③層124)



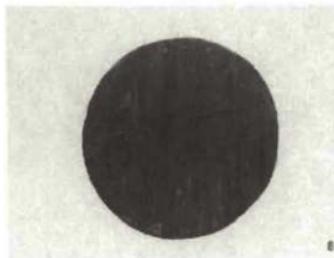
1. 旧河床 ③層・その他出土土器 (③層123・126・128、その他142)



2. 旧河床 その他出土土器



旧河遺出土の木製品1) (②層3・4・7、③層2・5・6・9)



12



13



15

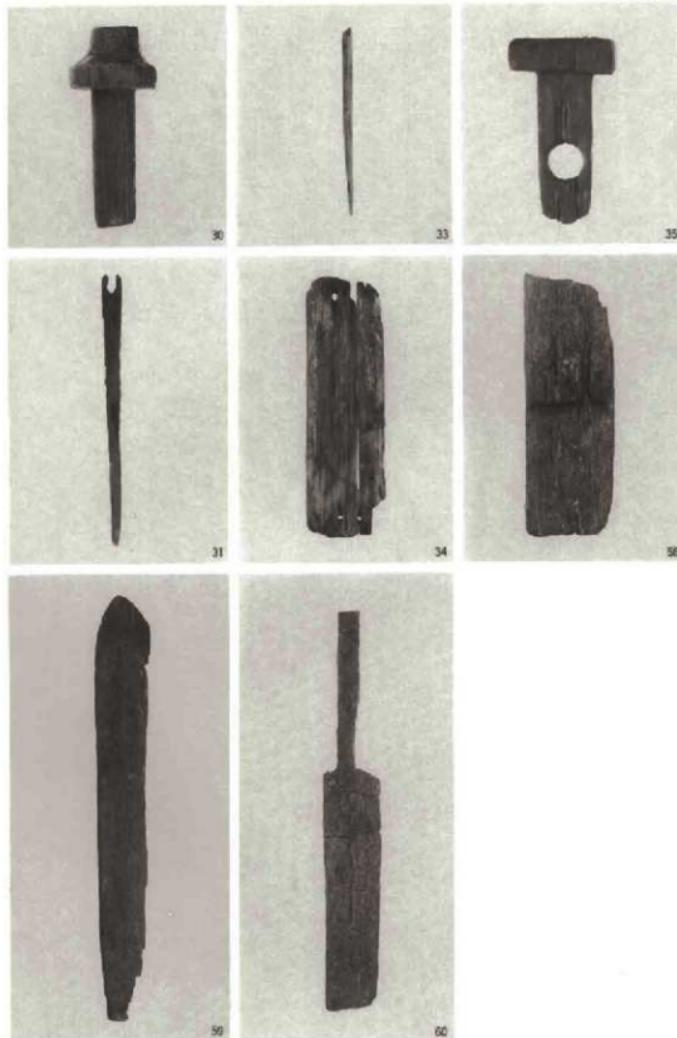


19

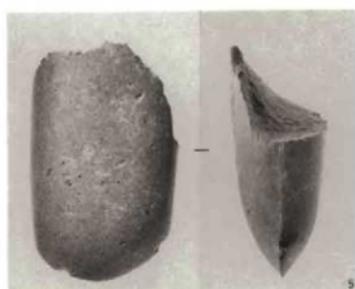
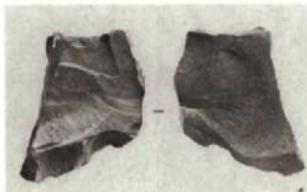
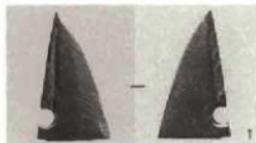


16

旧河道出土の木製品(2) (2)層8・13、(3)層12・15・16・19)

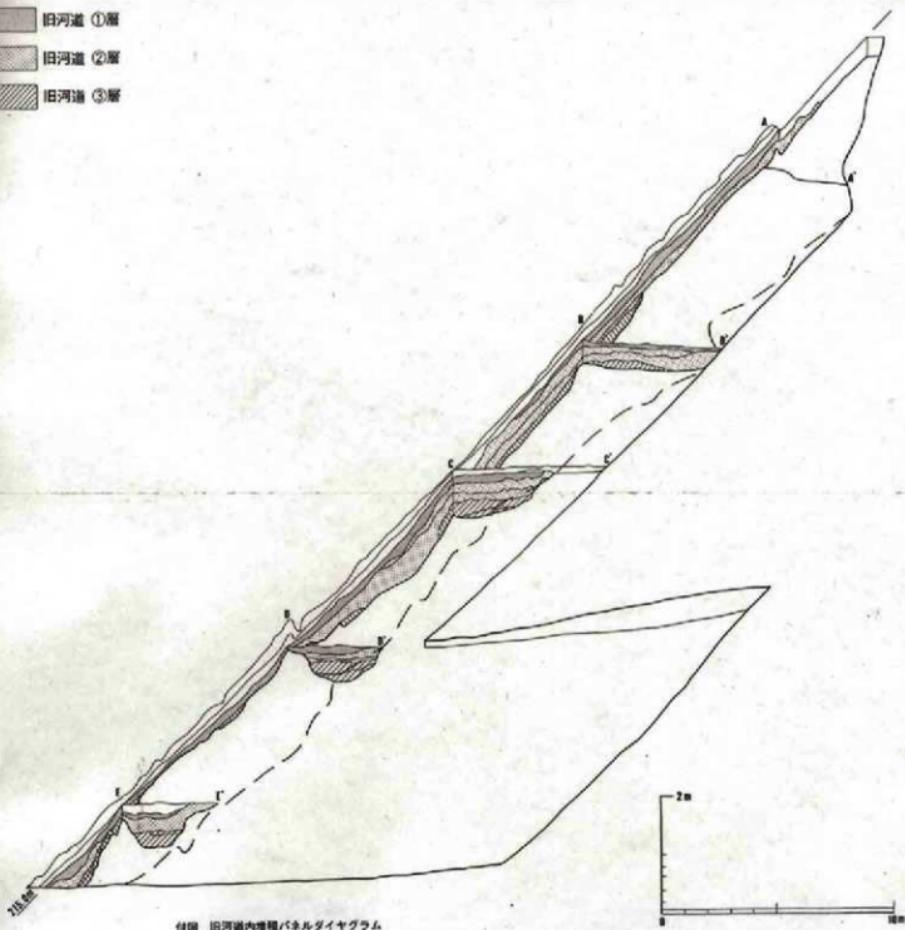


旧河遺出土の木製品(3) (2層30・31・33、3層34・35・59・60)



旧石器出土の石器

旧河道 ①層
旧河道 ②層
旧河道 ③層



付図 旧河道内堆積バネルダイヤグラム

上板井遺跡発掘調査報告書

平成2年3月30日 印刷

平成2年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社
〒652 神戸市兵庫区木本通9丁目1-34